中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団第21回訪日報告書

目次

報告書の刊行にあたって 1

中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」寄付金申込社（者）一覧 2

2017年度中国日本商会役員名簿 3

2017年度社会貢献委員会委員名簿 5

2017年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿 6

程海波団長挨拶 7

主催、共催団体の概要 8

第21回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団　団員名簿 9

第21回訪日ホームステイ受け入れリスト 10

第21回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程 11

第21回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト 12

＜訪日記録＞

日本航空整備工場（11/28)/担当：北京理工大学 15

パナソニックエコテクノロジーセンター（11/29)/担当：華北電力大学 17

大阪大学（11/29)/担当：国際関係学院 20

三菱電機名古屋製作所（11/30)/担当：北京理工大学 22

NECイノベーションワールド（12/1)/担当：華北電力大学 24

丸紅(12/1)/担当：北京師範大学 26

みずほ銀行(12/4)/担当：北京大学 28

日比谷松本楼（12/4)/担当：北京第二外国語学院 30

中国大使館（12/4)/担当：国際関係学院 32

中央大学（12/4)/担当：北京第二外国語学院 34

ホテルニューオータニ（エコセンター）(12/5)/担当：北京大学 36

歓送会(12/5)/担当：北京師範大学 38

学生たちの感想文から 40

学生たちの観た日本 61

学生たちの撮った写真 78

第21回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日活動メディア報道リスト（中国語のみ） 1

第21回中国大学生「走近日企・感受日本」
訪日団報告書の刊行にあたって

本報告書は、「走近日企・感受日本」事業の第21回訪日団の報告書です。

本事業は、中国日本商会が会員からの寄付金を原資として、中国人大学生を訪日視察に招待派遣するもので、2007年から年に2回実施しており、今回までに30大学652名の学生に参加いただきました。

特に昨年は日中国交正常化45周年であったことより、本事業もその記念事業の一つとしての認定を受けて実施されました。次代の中国を担う若者に日本の実像に触れてもらう機会を提供する本事業は、日中両国民の相互理解の増進に大きく貢献しているものと自負しております。

2017年には中国から735.6万人もの方が日本を訪れており、本事業開始当時とは状況が異なってきておりますが、若い世代の人たちが初めて訪れる日本で見て聞いて感じて得られる感動はその後の人生や日中友好に少なからず好影響をもたらすことは不変であると信じております。

さて、第21回訪日団は、2017年11月28日から12月5日までの8日間、6大学から選抜した30名で編成され、一同、様々な日本に触れて無事終了することができました。

このたびの訪日では、東京、愛知、兵庫で会員企業7社を視察させていただいたほか、大阪大学、中央大学における日本人大学生との交流、中国大使館の訪問、日比谷松本楼の視察、一泊二日のホームステイ体験など、多彩なプログラムを実施しました。ホームステイの受入れにご協力いただいた企業は17社にのぼっています。

このように「走近日企・感受日本」事業は、中国日本商会の会員企業の多大なる協力と貢献のもとに実施されています。また、共催団体である中国日本友好協会に全面的なご協力をいただくとともに、一般財団法人日中経済協会、中国友好和平発展基金会と公益社団法人企業市民協議会（CBCC）に適切な寄付金の管理を行っていただいております。改めて、本事業実施にご支援、ご尽力をいただいているすべての関係者に厚くお礼を申しあげます。

本事業が日中相互の国民レベルでの理解促進の一助となり、将来さらに大きな実を結ぶことになれば、これに勝る喜びはありません。

なお、今回が第2期（2012年～2017年）の最終回となりますが、既に第3期の寄付を募っており、2018年以降も次代の中国を担う若者の日本との交流と理解促進を図ってまいります。

中国日本商会 会長 上田明裕

2018年1月

中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」
寄付金申込社（者）一覧

【寄付金】750万円

1	アサヒグループホールディングス株式会社
2	伊藤忠（中国）集団有限公司
3	新日鐵住金株式会社
4	住友商事（中国）有限公司
5	全日本空輸株式会社
6	東芝（中国）有限公司
7	トヨタ自動車（中国）投資有限公司
8	日本航空株式会社
9	日立（中国）有限公司
10	丸紅株式会社 丸紅（中国）有限公司
11	株式会社みずほコーポレート銀行
12	三井物産株式会社
13	三菱商事株式会社
14	三菱電機（中国）有限公司
15	三菱東京 UFJ 銀行（中国）有限公司

【寄付金】350万円以上～750万円未満

1	日本電気株式会社
2	キヤノン（中国）有限公司
3	住友化学投資（中国）有限公司
4	ソニー（中国）有限公司
5	三井住友銀行（中国）有限公司

【寄付金】100万円以上～350万円未満

1	あいおいニッセイ同和損保株式会社
2	旭化成株式会社
3	旭硝子（中国）投資有限公司
4	アルプス（中国）有限公司
5	岩谷産業株式会社
6	日本たばこ産業株式会社
7	日本郵船株式会社
8	NTT グループ
9	JTB 新紀元国際旅行社有限公司
10	JXTG エネルギー株式会社
11	双日株式会社
12	第一生命株式会社
13	株式会社電通
14	東京海上日動火災保険株式会社 東京海上日動火災保険（中国）有限公司
15	日揮株式会社
16	日産（中国）投資有限公司
17	野村證券株式会社
18	三井化学株式会社
19	三井住友海上火災保険株式会社 三井住友海上火災保険（中国）有限公司
20	三井住友信託銀行
21	三菱ケミカルホールディングス株式会社
22	三菱重工業（中国）有限公司

【寄付金】10万円以上～100万円未満

1	株式会社 IHI
2	アルパイン（中国）有限公司
3	株式会社荏原製作所
4	エプソン（中国）有限公司
5	華昇富士達電梯有限公司
6	住金物産株式会社
7	住友生命保険相互会社
8	ソニー生命保険株式会社
9	大和証券株式会社
10	宝酒造株式会社
11	電源開発株式会社
12	東工物産貿易有限公司
13	東曹達（上海）貿易有限公司
14	トヨタモーターファイナンスチャイナ
15	日本生命保険相互会社
16	テルモ（中国）投資有限公司
17	日本農林中央金庫有限公司
18	ハウス食品株式会社
19	日立高新技術（上海）国際貿易有限公司
20	株式会社ブリヂストン
21	北京丘比食品有限公司
22	三井不動産諮詢（北京）有限公司
23	三菱マテリアル株式会社
24	三菱 UFJ 証券有限公司
25	三菱 UFJ 信託銀行
26	明治安田生命保険相互会社
27	明宝工程塑料商貿（上海）有限公司
28	矢崎（中国）投資有限公司
29	理光軟件研究所（北京）有限公司
30	株式会社ワコールホールディングス
31	成川　育代（個人会員）
32	柳田　洋（個人会員）

2017年度中国日本商会役員一覧

2017年12月13日現在

	商会役職	氏　名	会社名	役職
1	会長	上田　明裕	伊藤忠	常務執行役員　東アジア総代表
2	副会長	山洞　正一	アサヒグループホールディングス	中国総代表
3	副会長	小澤　秀樹	キヤノン	副社長執行役員
4	副会長	西浦　新	新日鐵住金	常務執行役員　中国総代表　北京事務所長
5	副会長	古場　文博	住友商事	常務執行役員　東アジア総代表
6	副会長	阿部　信一	全日本空輸	上席執行役員　中国総代表　北京・天津支店長
7	副会長	大西　弘致	トヨタ自動車	専務役員　中国本部長
8	副会長	岩永　正嗣	日中経済協会	北京事務所　所長
9	副会長	堂ノ上　武夫	日本貿易振興機構	北京事務所　所長
10	副会長	横尾　定顕	パナソニックチャイナ	役員　中国・北東アジア地域総代表
11	副会長	小久保 憲一	日立製作所	執行役常務　中国総代表
12	副会長	鳥居　敬三	丸紅	常務執行役員　中国総代表
13	副会長	岡　豊樹	みずほ銀行	執行役員　中国総代表
14	副会長	金森　健	三井物産	専務執行役員　中国総代表
15	副会長	平井　康光	三菱商事	執行役員　東アジア統括
16	副会長	富澤　克行	三菱電機	執行役員　中国総代表
17	副会長	小原　正達	三菱東京UFJ銀行（中国）	副董事長
18	理事	亀倉　隆志	岩谷産業	常務執行役員　中国総代表
19	理事	西村　康	双日	常務執行役員　中国総代表
20	理事	椿本　光弘	豊田通商	常務執行役員　東アジア総代表
21	理事	松原　圭司	阪和商貿（北京）	阪和興業　執行役員　中国総代表
22	理事	陶　履徳	日鉄住金物産	北京事務所　所長
23	理事	上田　敏裕	旭硝子（中国）投資	董事長　総経理
24	理事	永田　泰	川崎重工管理（上海）	董事　総経理
25	理事	青山　傑	コスモ石油	北京事務所　首席代表
26	理事	市川　正人	クボタ	北京事務所　首席代表
27	理事	池松　克紀	JFEエンジニアリング（北京）	総経理
28	理事	西村　伸吾	JXTGエネルギー	執行役員　中国総代表
29	理事	明石　宏二郎	東京電力	北京代表処　首席代表
30	理事	今井　正志	アルプス(中国)	総経理
31	理事	吉田　直樹	NEC	執行役員　中国総代表
32	理事	堂園　憲治	NTTコミュニケーションズ（中国）	北京分公司　総経理
33	理事	宇平　直史	NTTデータ	執行役員　中国総代表
34	理事	本間　雅之	NTT DOCOMO China通信技術	董事長
35	理事	後藤　雄次	京瓷(中国)商貿	董事・総経理

36	理事	井神　淳	北京凱迪迪愛通信技術	董事長
37	理事	高橋　洋	ソニー（中国）	董事長＆総裁
38	理事	須毛原 勲	東芝	中国総代表
39	理事	高澤　信哉	富士通(中国)	董事長兼総経理
40	理事	小原　弘嗣	マルチメディア振興センター	北京代表処　首席代表
41	理事	椋野　貴司	旭化成	執行役員　中国総代表
42	理事	纐纈　義隆	アステラス製薬（中国）	董事長兼総経理
43	理事	中西　稔	花王（中国）投資	董事長　総経理
44	理事	西　広信	住友化学投資（中国）	総経理
45	理事	陳　偉東	日健中外科技(北京)	総経理
46	理事	柴﨑　崇紀	テルモ	上席執行役員　中国総代表
47	理事	寺師　啓	東レ	北京事務所　所長
48	理事	本田　和秀	凸版印刷	北京事務所　首席代表
49	理事	松崎　宏	三井化学	理事　中国総代表
50	理事	高尾　昌二	三菱化学控股管理(北京)	董事長
51	理事	柯　豪俊	住友生命	北京事務所　首席代表
52	理事	諸　紅霞	大和証券	北京事務所　首席代表
53	理事	和田　健治	日本銀行	北京事務所　首席代表
54	理事	篠原　康人	三井住友海上火災保険（中国）	北京分公司　総経理
55	理事	川端　良彦	三井住友銀行（中国）	副社長
56	理事	岸上　輝充	三井住友信託銀行	北京代表処　首席代表
57	理事	松尾　純利	日通国際物流(中国)	社長
58	理事	江利川 宗光	日本航空	執行役員　中国総代表　北京支店長
59	理事	高泉　宏康	日本郵船	中国総代表
60	理事	今井　誠	イトーヨーカ堂(中国)投資	董事長
61	理事	石毛　二郎	JTB新紀元	総経理
62	理事	大谷　隆一	上海博報堂広告有限公司	北京分公司　総経理
63	理事	谷口　利英	全日空国際旅行社	総経理
64	理事	高橋　修三	長富宮中心	常務副総経理　ホテル総支配人
65	理事	馬場　章正	北京電通広告	董事　総経理
66	理事	戸村　滋見	北京発展大廈	董事　総経理
67	理事	田淵　真次	日中経済貿易センター	専務理事　北京事務所長
68	理事	中下　裕三	日本国際貿易促進協会	北京事務所　中国総代表
69	理事	厚谷　禎一	KPMGアドバイザリー（中国）	ディレクター
70	理事	萩原　徹	国誉家具（中国）	北京分公司　総経理
71	理事	小金井　英生	世達志不動産投資顧問（上海）	北京分公司　総経理
72	理事	越智　博通	北京陸通印刷	董事長
73	理事	堀内　博史	ハウス食品（中国）投資	北京分公司　総経理
74	監事	三浦　智志	監査法人トーマツ	パートナー
75	監事	越智　幹文	国際協力銀行	首席代表

2017年度社会貢献委員会委員名簿

	氏　名　（会社名・役職）
社会貢献委員長	鳥居　敬三　（丸紅　常務執行役員　中国総代表）
委員	山洞　正一　（アサヒグループホールディングス　中国総代表）
委員	上田　明裕　（伊藤忠　常務執行役員　東アジア総代表）
委員	小澤　秀樹　（キヤノン　副社長執行役員）
委員	西浦　新　（新日鐵住金　常務執行役員　中国総代表　北京事務所長）
委員	古場　文博　（住友商事　常務執行役員　東アジア総代表）
委員	阿部　信一　（全日本空輸　上席執行役員　中国総代表　北京・天津支店長）
委員	大西　弘致　（トヨタ自動車　専務役員、トヨタ自動車（中国）投資　董事長）
委員	岩永　正嗣　（日中経済協会　北京事務所　所長）
委員	堂ノ上　武夫　（日本貿易振興機構　北京事務所　所長）
委員	横尾　定顕　（パナソニックチャイナ　役員　中国・北東アジア地域総代表）
委員	小久保 憲一　（日立製作所　執行役常務　中国総代表）
委員	岡　豊樹　（みずほ銀行　執行役員　中国総代表）
委員	金森　健　（三井物産　専務執行役員　中国総代表）
委員	平井　康光　（三菱商事　執行役員　東アジア統括）
委員	小原　正達　（三菱東京UFJ銀行（中国）　副董事長）
委員	富澤　克行　（三菱電機　執行役員　中国総代表）
委員	江利川 宗光　（日本航空　執行役員　中国総代表　北京支店長）
委員	石毛　二郎　（交通公社新紀元国際旅行社　董事　総経理）

2017年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿

会社名	氏名	役職
【社会貢献委員長】	鳥居　敬三	丸紅　常務執行役員　中国総代表
【WG座長】	岩永　正嗣	日中経済協会　所長
アサヒグループホールディングス	飯塚　喜美子	行政局主任
伊藤忠(中国)集団有限公司	堀尾　卓	東アジア総代表室 部長
キヤノン(中国)有限公司	福井　穂高	コーポレートコミュニケーション戦略本部副総経理
新日鐵住金諮詢（北京）有限公司	濱崎　由基	部長
交通公社新紀元国際旅行社有限公司	石毛　二郎	董事　総経理
住友商事(中国)有限公司	中原　誠	人事部　部長
	米　健	中国総代表助理
全日本空輸株式会社	新井　哲朗	銷售部
東芝（中国）有限公司	薬丸　法之	副総裁
トヨタ自動車(中国)投資有限公司	栗田　弘毅	渉外部主査
日中経済協会	澤津　直也	副所長
日本航空株式会社	藤井　智之	営業部　マネージャー
日本貿易振興機構　北京事務所	日向　裕弥	副所長
日立（中国）有限公司	岩見　健太郎	副総経理
丸紅（中国）有限公司	松園　大	中国総代表助理
みずほ銀行（中国）有限公司　北京支店	柳原　諒一	営業二課
三井物産（中国）有限公司	城戸　崇裕	業務部　部長
三菱商事（中国）商業有限公司	李　征	企画業務部　副部長
三菱電機（中国）有限公司	王　蕾	経営企画室高級助理
三菱東京UFJ銀行（中国）北京支店	張　婷	企画部　北京本部
【オブザーバー】	菊池　信太郎	日本大使館　広報文化センター　書記官
【オブザーバー】	柴戸　ひとみ	日本大使館　経済部　書記官
【訪日中のアテンド等】	横山　勝明	日中経済協会　（東京）　参与

第21回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表団報告書
団長挨拶

2017年11月28日から12月5日にかけて、第21回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日団一行34名は、日本での8日間の訪問を行いました。中国日本商会、日中経済協会そして訪問先の関係者の多大なるご支援ならびにご協力の下、代表団の訪日活動は無事そして円満に期待通りの成果をあげることができました。

今回の代表団は北京大学、北京師範大学、北京理工大学、北京第二外国語学院、華北電力大学、国際関係学院の優秀な学生により構成されています。日本滞在期間中、代表団は日本航空、パナソニックエコテクノロジーセンター、三菱電機名古屋製作所、日本電気、丸紅、みずほ銀行、ホテルニューオータニなどの有名企業の見学の他、大阪大学や中央大学の学生との友好交流、中華人民共和国駐日本国大使館への表敬訪問、孫中山・梅屋庄吉両氏の一生涯の友情の舞台となった松本楼への訪問、さらには中国日本商会各会員企業の従業員宅でのホームステイを行いました。学生等は今回の訪日交流を通じて日本企業の環境保全そして人工知能等分野での進んだ技術や「人間本位」の経営理念、また社会貢献の精神を学び、日本の青年たちと相互理解や友情を深め、日本の伝統文化や一般市民の生活を体験することができ、今後は日中友好事業に積極的に関わり、両国の友好に貢献をしたいと述べていました。団員らは充実した今回の8日間において、細かな観察や思考を通して様々な角度や側面から認識した日本について日記形式にまとめました。ここに団員らの日本訪問における思いを皆様へご紹介いたします。皆様にはこの報告書から、彼らの収穫や感動といったものを感じ取って頂ければ光栄に存じます。

「走近日企・感受日本」中国大学生訪日プロジェクトは2007年の開始から現在まですでに21回行われ、650名余りの中国の大学生が日本での交流を行いました。また2017年は日中国交正常化45周年、2018年には日中平和友好条約締結40周年を迎えます。本プロジェクトも第二期が終了し、第三期のプロジェクトが始まります。青年は日中友好における未来と希望です。日中両国の青年同士が手を携え、共に両国友好の使者そして架け橋となることを心から願っております。中日友好協会としましても、日本の各界の皆様と共に両国の青少年交流に力を注ぎ、日中友好事業の担い手を絶えず育成し、日中関係の発展をサポートしていく所存でございます。

最後に、今回の代表団の訪日に際して多大なご支援を頂いた中国日本商会、日中経済協会及び関連各企業そしてホストファミリーの皆様に、心より感謝申し上げます。

第21回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表団
中日友好協会副秘書長
程海波

主催、共催団体の概要

中国日本商会

在北京企業の円滑な事業活動を支援するとともに、日中間の経済交流の活発化を通じて、日中友好を促進することを目的として、1980年10月に設立された北京日本商工クラブを前身とする。中華人民共和国国務院令第36号「外国商会管理暫行規定」に基づき認可された外国人商工会議所の第1号として、1991年4月22日に設立された。

会員数は、2017年12月末日現在、市内法人会員587社、市外法人会員62社、個人会員13名、賛助会員12名の合計674社(名)を擁している。

中国日本友好協会

1963年に中華全国総工会、中国人民外交学会など19の民間団体によって発起設立された、中国における最も代表的な対日民間友好組織である。創立以来、周恩来総理の提唱の下で積極的に対日友好交流活動を展開し、1972年の中日国交正常化と1978年の中日平和友好条約の締結においては大きな貢献を果たした。政治、経済、文化、スポーツなどの各分野で対日友好交流事業を強力に展開し、健全で安定的な両国関係の推進に重要な役割を果たしている。

中国友好和平発展基金会

中国人民対外友好協会の下部組織として、1996年に設立された。各国との友好増進、国際協力の推進、世界平和、共同発展を主旨とし、世界平和と人類の進歩に貢献するため、中国と海外各国との友好事業を始め、文化、教育、医療衛生、環境保護、スポーツ、経済、貧困支援などの数多くの分野で社会的公益活動を行っている。

一般財団法人日中経済協会

経済産業省を始めとする日本政府及び日本経済団体連合会他経済界の支援の下に、日本と中国との経済交流促進のため、1972年に設立された。

第21回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団団員名簿

	姓名	性別	所属		専攻
団　長	程海波	男	中日友好協会	副秘書長	
団　員	劉　瑞	女	北京大学	経済学院	経済学類
団　員	高　遠	女	北京大学	都市・環境学院	都市農村計画
団　員	陳　晨	女	北京大学	光華管理学院	金融
団　員	費　渝	男	北京大学	工学院	理論・応用力学
団　員	李暢暢	男	北京大学	元培学院	PPE（哲学、政治学、経済学）
団　員	席靖毅	女	北京師範大学	外国言語文学学院	日本語
団　員	王　月	女	北京師範大学	外国言語文学学院	日本語
団　員	李易陽	女	北京師範大学	外国言語文学学院	日本語
団　員	賈羽飛	女	北京師範大学	外国言語文学学院	日本語
団　員	尚楚岳	男	北京師範大学	外国言語文学学院	日本語
団　員	王天竹	女	北京理工大学	機械・車輛学院	機械工程（英語課程）
団　員	王楚婷	女	北京理工大学	情報学院	電子科学・技術
団　員	丁楷軒	男	北京理工大学	機械・車輛学院	機械工程（英語課程）
団　員	詹天予	女	北京理工大学	情報・電子学院	電子科学・技術（英語課程）
団　員	汪俊呈	男	北京理工大学	自動化学院	自動化（英語課程）
団　員	馬恵琳	女	北京第二外国語学院	日本語学院	日本語
団　員	徐　穎	女	北京第二外国語学院	日本語学院	日本語
団　員	張　瀟	女	北京第二外国語学院	日本語学院	日本語
団　員	孫佳濱	女	北京第二外国語学院	日本語学院	日本語
団　員	呂嘉琦	男	北京第二外国語学院	日本語学院	日本語
団　員	張　楠	女	華北電力大学	国際教育学院	電気工程・自動化
団　員	付　康	男	華北電力大学	国際教育学院	電気工程・自動化
団　員	藍文鴻	男	華北電力大学	核科学・工程学院	核工程・技術
団　員	宇文天悦	女	華北電力大学	制御・コンピュータ工程学院	コンピュータ科学・技術
団　員	蒲曾鑫	男	華北電力大学	環境科学・工程	応用化学
団　員	賈蘇元	男	国際関系学院	外語学院	日本語系
団　員	姚　禹	男	国際関系学院	外語学院	日本語系
団　員	杜文慧	女	国際関系学院	外語学院	日本語系
団　員	査懿童	女	国際関系学院	外語学院	日本語系
団　員	辺嘉禾	女	国際関系学院	外語学院	日本語系
団員(引率教員)	胡　欣	女	国際関系学院	外語学院	日本語系主任
団員(事務局)	王　磊	男	中日友好協会	都市経済交流部副部長	
団員(事務局)	李博寰	女	中日友好協会	政治交流部職員	

第21回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程

日次	日　付	日　程	宿　泊
1	11/28 （火）	国際線（JL20便）にて北京より羽田空港へ **【北京　8：25→羽田　12：45　JL20】** 13:45　貸切バスで移動 **14:00～15:30　●企業訪問 ①　ＪＡＬ整備工場見学** 16:30　羽田空港発　JAL127便にて大阪へ移動 17:40　伊丹空港到着 到着後、バスにて大阪市内で夕食その後ホテルへ	大阪 千里阪急ホテル
2	11/29 （水）	ホテル8:00発 **9:30～11:30 ●企業訪問 ②（関西地区）ﾊﾟﾅｿﾆｯｸｴｺﾃｸﾉﾛｼﾞｰｾﾝﾀｰ** 昼食:大阪 **14:00～19:30 ◎大学交流 ① 大阪大学（含む懇親会）** 20:37　新大阪→21:28名古屋　ひかり538（新幹線体験） ホテル21:50着	名古屋 名古屋国際ホテル
3	11/30 （木）	ホテル8:00発 **8:30～13：45 ●企業訪問 ③ 三菱電機名古屋製作所（含む昼食会）** 午後　箱根へ（約4時間30分） ホテル18:00頃着	箱根 天成園
4	12/1 （金）	ホテル8:30発 東京へ移動 昼食:東京 **13:30～15:15　●企業訪問④NECイノベーションワールド** **16：00～19:30 ●企業訪問⑤丸紅（含む懇親会）** ホテル20:30着	東京 ホテルニューオータニ
5	12/2 （土）	終日　ホームステイ	ホームステイ
6	12/3 （日）	夕方までホームスティ 夕方　ホテル集合	東京 ホテルニューオータニ
7	12/4 （月）	ホテル8:20発 **9：00～11：15　●企業訪問⑥　みずほ銀行** 昼食:　★ソフト文化等視察①日比谷松本楼 **14:00～15:30　●中国大使館訪問** **16:30～19:30　◎大学交流②中央大学（含む懇親会）** ホテル20:00着	東京 ホテルニューオータニ
8	12/5 （火）	**9:30～11:00　●企業訪問⑦ホテルニューオータニ　エコ視察** 12:00～13:45　歓送会（@ホテルニューオータニ） 14:00　ホテル発　羽田空港へ移動 15:00　羽田空港着 17:20　羽田空港発（JL25便） **【羽田 17：20 → 北京 20：30 JL25】** 20:30　北京首都空港着	

第21回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト

1. 日本航空（11月28日）

加藤智也	コーポレートブランド推進部 シチズンシップグループ	工場見学担当
宗村清一	同上	同上
隋千秋	本店　顧客販売部　第1グループ	アカウントマネジャー
天野雅子	同上	

2. パナソニックエコテクノロジーセンター（11月29日）

笠原英樹	企画・管理部	部長
藤本尚子	企画・管理部（兼）総務部	
片浦瑞穂	企画・管理部	見学スタッフ

3. 大阪大学（11月29日）

小溝裕一	接合科学研究所	東アジア拠点長 （名誉教授）
有川友子	国際教育交流センター	センター長（教授）
南二三吉	接合科学研究所	所長（教授）
麻寧緒	同上	教授
劉恢弘	同上	助教
Fincato Riccardo	同上	特任助教（常勤）
王洪澤	同上	特任研究員
青木祥宏	同上	同上
丸田博一	同上	事務長
山崎和久	同上庶務係	係長
遠山裕子	国際部国際学生交流課	課長
上河原淳	同上	課長補佐
岡本雄一	国際部国際学生交流企画係	係長
内山夕貴子	国際部国際学生交流課	係員

（大阪大学の学生（院生を含む）19名）

吉田　浄　　コーディネーター

4. 三菱電機　名古屋製作所（11月30日）

小山健一		執行役員　所長
福田和仁	総務部	部長
大隈信幸	総務部総務課	課長
浜島康昌	同上	
石川園子	営業部国際戦略グループ	マネージャー

鳥居衛	同上	
大竹梓	同上	
石原正高	FA Communication Center カスタマーG	
伊藤帆奈美	同上	
萱島悟	サーボモータ工作課	

5. NEC（12月1日）

森田隆之		取締役 執行役員常務 チーフグローバル オフィサー
高橋昇	中国・APAC本部	本部長代理
福盛孝一	同上	シニアエキスパート
石暁梅	同上	総監
林瑶	同上	主任
陳威	同上	同上

6. 丸紅（12月1日）

伊佐範明		執行役員　CSO補佐
川野光一郎	市場業務部	参与　部長
徳永貴司	同上	部長代理（兼）アジア大洋州チーム長
稲積和典	市場業務部　中国チーム	課長
成玉麟	市場業務部　アジア大洋州チーム	課長
佐藤健	同上	
李雪蓮	経済研究所	シニア・アナリスト

7. みずほ銀行（12月4日）

寺本禎治		常務執行役員
広瀬俊	中国業務推進部（中国業務促進部）	部長
白井和樹	同上	次長
安井正明	同上	調査役
劉蕾	同上	
葉嵐	同上	
稲冨まな美	同上	
西尾和之	丸の内中央支店、丸之内支店 東京中央支店	副支店長
熊俊	国際戦略情報部（国際戦略咨詢部）	調査役
胡楠	グローバルプロジェクトファイナンス 営業部（跨国項目融資営業部）	調査役

瞿愛貞	中国営業推進部	
郭蕤	営業14部	

8. 日比谷松本楼（12月4日）

小坂文乃		代表取締役　社長
今井康雄	営業部	部長

9. 中国大使館（12月4日）

郭燕		公使
邵宏偉	友好交流部	一等書記官
潘林	同上	二等書記官
張天曄	国際及び地域部（国際及地区処）	アタッシェ

10. 中央大学（12月4日）

加藤俊一	理工学部	副学長 研究推進支援本部長 教授
服部健治	ビジネススクール大学院 戦略経営研究科	教授
杉浦宣彦	同上	同上
山田正	理工学部	同上
佐藤留美子	国際センター	副課長
田中慶子	文学部	4年生

（中央大学の学生（院生）を含む25名）

11. ホテルニューオータニ（12月5日）

山川剛	関西営業所	所長
平野力也	同上	グループリーダー
田島浩一	宿泊営業部　国内営業課	アシスタント ディレクター
山田聡	料飲営業部　料飲営業一課	シニアセールス マネージャー
三浦光昌	ファシリティーマネージメント部 ファシリティーマネージメント課	課長

（註）尚　みずほ銀行、中国大使館の所属部署名欄の括弧書きは、中国語表記です。

Fly Into Tomorrow—JAL整備工場の見学にて

北京理工大学学生代表

見学日時：2017年11月28日（火）14:00-15:30
見学場所：日本航空株式会社

見学概要

JAL の整備工場に到着すると、私たちは同社のスタッフから熱烈な歓迎を受けた。その後二つのグループに分かれて、それぞれ 1-2 名のスタッフの案内の下で見学することになったが、その前に JAL から客室乗務員の制服での記念写真という特別な「プレゼント」を受け取った。記念写真の撮影が終わり、二つのグループは JAL の整備工場の見学を始めた。

皆はまず工場の観察用の台に上り、工場全体を見渡した。整備工場は中国語では維修工場の意味で、内部には補修やメンテナンスを行う予定の JAL の飛行機が停泊していた。スタッフの詳しい解説により、私たちはメンテナンスの周期、設備そしてプロセスを含む関連知識について知ることができた。その後私たちは配られたヘルメットを被り、観察用の台を下りて間近でメンテナンス予定の飛行機を見学した。

そこでは、スタッフから私たちに飛行機の離陸及び着陸のプロセスの紹介があり、さらに指示灯を通じた飛行機の機種そして飛行方向の見分け方について教わった。また私たちは飛行機の着陸の様子を目にすることができた。その後質疑応答となり、スタッフからは丁寧な回答を頂いた。

最後に私たちは休憩室に戻り、スタッフの案内の下整備工場を後にした。そしてスタッフが手を振り見送る中で、訪日初日の最初の企業訪問を終えた。

なぜですか？

1. 飛行機の着陸プロセスにおいて、機体と地面との角度は二度変化する。最初は三度前後に維持されるが、その目的は飛行機を降下させるためである。それから接地の直前に一度に維持される。その目的はハードランディングによる反動が原因で事故に繋がることを回避するためである。
2. 飛行機には三種類の減速方法がある。一つめは機翼の一部を折り畳み風の抵抗で減速する方法。二つめはエンジンを逆噴射し反動力により減速する方法。三つめは着陸後にタイヤと地面の摩擦力を利用し減速する方法である。
3. JALの飛行機のメンテナンス周期に関しては、毎回の着陸と離陸前の「T点検」、1ヵ月から2ヵ月 毎の「A点検」、7～10日間をかけ検査する一年半に一度の「C点検」、6～8年に一度の「M点検」がある。

整備工場内で「C点検」予定の飛行機

感想

日本航空（JAL）の整備工場の見学を終えて一番印象深かったのは、その緻密で細やかな作業理念であった。工場内で私が目にしたのは雑然としたメンテナンス設備ではなく、また聴こえたのは工場にありがちな様々ながやがやとした騒音ではなく、私が目にしたのは、きちんと停泊された各飛行機、整然と置かれた部品やヘルメット、静かに作業をするスタッフ、そして常に注意を引く心温まるキャッチフレーズで、聴こえたのは、工場の外で飛行機が離着陸する音だけであった。この点については、どの企業も学ぶべきものだと思った。航空安全は極めて重要であり、日本で最大規模の航空会社の一つである日本航空は、日本で最も多い国際線拠点と延べ搭乗者数を有し、非常に大きな責任を担っている。その立場にあるものは、その責任を負わなければならない。日本航空はその緻密で細やかな姿勢により乗客の安全を保障し、日本の航空事業の振興という責任を担っている。同社のキャッチフレーズである Fly Into Tomorrow のように、今後日本航空が一層発展し、より多くの人々へ奉仕できるよう期待している。

安全のため赤いヘルメットを被る

パナソニックエコテクノロジーセンター——地域社会・エコ・工場の有機的統一

華北電力大学学生代表

見学日時：2017年11月29日（水）09:30-11:30
見学場所：パナソニックエコテクノロジーセンター

見学概要

今日は訪日二日目で、私たちはパナソニックエコテクノロジーセンターの見学に訪れた。

同センターは広い田畑に囲まれていたが、これは私たちが予期していない情景であった。中国国内においては、こうしたごみのリサイクル工場は水源や田畑から離れた場所に設置される。パナソニックエコテクノロジーセンターがこうした自然環境の中にあることは、きっと同センターの日頃の努力と切り離すことができないと考えられる。その後の解説を通じて、私たちは同センターが環境保全や周辺住民との調和のとれた共存のために、毎年環境検査データの公開の他、さらに定期的に周辺住民との意見交換を行っていることを知った。

スタッフの案内の下、私たちはまず会議室に入り、そこから見学が始まった。私たちはパナソニックエコテクノロジーセンターのスタッフからの熱烈な歓迎そして挨拶をいただいた。今回の見学は四つの部分からなる。以下に順を追って説明していく。

初めは会社紹介であった。その紹介を通じて私たちは、同センターの主な事業は使用済み家電のリサイクル処理で、さらにリサイクル技術の研究開発を専門に行う技術研究センターを設置していることを知った。2001 年の創業開始から現在まで、同センターでは累計 1000 万台以上の使用済み家電を処理しており、環境保全そして資源の節約に非常に大きな貢献をしている。また同センターは日本で唯一見学可能な家電リサイクル工場であり、さらに環境保全教育における公開教育拠点として毎年多くの学生が訪れ環境保全と家電リサイクルについての教育を受けている。

次は、日本の家電リサイクルに関する法律の紹介であった。現在、日本では 2001 年に施行された『家電リサイクル法』を基に使用済み家電のリサイクル行為について取り決めを行っているが、同法では、小売・量販事業者は回収の義務、消費者は使用済み家電の引き渡し及び処理費用負担の義務、生産業者または輸入業者は使用済み家電の処理の義務を負うといった、異なる対象について異なる義務を設けている。家電リサイクル法の背景には、使用済み家電に存在する大量の有害物質について個人での処理が難しいこと、そして日本の国土面積の狭さと使用済

み家電の増大という矛盾が顕在化していたこと、さらに使用済み家電には大量の金属や非金属資源が存在することなどがあった。

次いで、この日のメインである実地見学となった。私たちはまず展示コーナーにおいて各種家電の回収の原理・効率・発生する収益等について概ね理解した後、解説スタッフの案内の下、工場の見学専用通路に沿って工場内の空調・冷蔵庫・テレビ・洗濯機等各種家電の回収リサイクル過程を上から観察した。見学を通じて私たちは技術の力に感心せざるを得なかった。工場内の機械化レベルはとても高く、人が担当する部分は限られていた。それと同時に、生産ライン上の細かな部分に表れていた労働者保護そして人間本位の精神に感動させられた。解説スタッフからはスタッフの作業着について詳しい紹介があり、とても厚い手袋、革靴に防護用の鉄板を付ける等、それらに示されたヒューマンケアについて私たちは感心させられた。

最後は質疑応答のコーナーであった。質疑応答ではとても和やかな雰囲気の中、学生たちはリサイクル技術、財政支援、法律・法規、企業の社会的責任及び従業員の福利厚生等幅広く積極的にたくさんの質問をし、スタッフからは丁寧な回答をいただいた。

皆はもっと続けたそうにしていたが、時間の関係で、最後は同センターのホールで記念撮影をした。パナソニックエコテクノロジーセンターの「トレジャーハンティング」そして「商品から商品へ」の理念は私たちの脳裏に深く刻まれた。

なぜですか？

問：パナソニックエコテクノロジーセンターの工場内にはどのような健康面の福利があるのか？

答：従業員は年に3度健康診断を行い、使用済み家電中の水銀やフロン等の処理をするといった特別な部署については、追加の健康診断を行う。同時に従業員の安全を保障すべく、業務環境に対する検査を毎年2度行っている。

問：家電製品の有料回収に対する日本の人々の意見はどのようなものか？

答：パナソニックエコテクノロジーセンターの見学後に行うアンケートによると、見学前は、約半数の人が回収費用について高いと考えているが、見学後にはその割合が30%に減っている。

問：水質汚染を防ぐために、パナソニックエコテクノロジーセンターではどのような取り組みをしているのか？

答：まず定期的に水質の検査を行い、検査結果を周辺住民に公開している。また工場内には水処理設備があり、水を規定値まで浄化した後に排出している。そして内部で処理が難しい汚水については、専門の処理工場に輸送し処理を行っている。

感想

私たちはパナソニックエコテクノロジーセンターにおいて、その詳しい解説と実際の工場見学を通じ家電リサイクルのプロセスや意義について知り、環境保全行為への理解を深めることができた。その中でも印象深かったのは以下の

三点である。

一つめはパナソニックの環境保全の理念である。企業の発展と同時に、パナソニックでは地球環境との共存、環境立社の理念を確立しており、さらに企業市民活動、社会への取り組みそして環境への取り組みといった「三大責任」を積極的に押し広めている。家電のリサイクルにおいては、「トレジャーハンティング」、「商品から商品へ」の理念を打ち出し、再利用可能な資源を最大限回収し、資源の循環利用に繋げている。パナソニックは環境保全の理念を実際の行動に反映させ、さらに環境保全の理念を工場見学のプロセスを通じて素晴らしい形で他の人々へ伝えている。二つめは実際の見学において知った各リサイクル技術である。使用済み家電の構成分析を通じ、段階的に使用済み家電を分解し、再利用可能な部分を一つひとつ順に回収する。工場内の機械化処理レベルは高く、処理のプロセスにおいては、異なるプラスチックの水中での浮力の違い、また特殊な光線を照射した後の反射波長の違いを通じ素早く効果的に仕分けをする、そして金属の電磁反応を通じ金属とプラスチックを分離する等、異なる物質の性質をうまく応用している。これら多くの性質について私たちは知らないわけではないが、こうした性質をこれほどまでに効果的に利用し速やかな仕分けを行うという知恵には、とても驚くと同時に感心させられた。三つめはパナソニックエコテクノロジーセンターのヒューマンケアである。同社では厚い防護服の他、年に 3 度の健康診断によりスタッフの健康を守っている。またその中で印象深かったのは、のこぎりの改善プロセスの紹介であった。のこぎりは専門的な研究を通じ特殊な筋目を加えることで騒音低減を実現し、スタッフにより良い作業環境を提供している。さらに、福祉施設と提携し、身体にハンデを持つ人々にも多くの働く機会を提供している。

今回パナソニックエコテクノロジーセンターの見学を通じ、パナソニックの環境保全理念や家電リサイクルのプロセスについて詳しく知ることができ、とても感謝している。人と地球は共存しており、環境保全について私たちはさらに多くの事を行う必要がある。リサイクル技術の発展や回収効率の向上、そしてより多くの人が環境保全事業に加わることにより、未来はより輝かしいものになると信じている。

大阪大学での交流にて

国際関係学院学生代表

見学日時：2017年11月29日（水）14:00-19:30
見学場所：大阪大学

見学概要

まず初めに、大阪大学の成り立ちなどについて、大阪大学の教員からお話があった。また、入学希望者、技術、研究経費と社会との繋がりといった方面から接合科学研究所について理解を深めた。

次に、私たちは学生や先生の案内の下、研究所及び同研究所の 3 台のハイテク設備を見学した。各担当者からは各設備の原理や用途について詳しい解説があり、私たちとしても得るものが多かった。

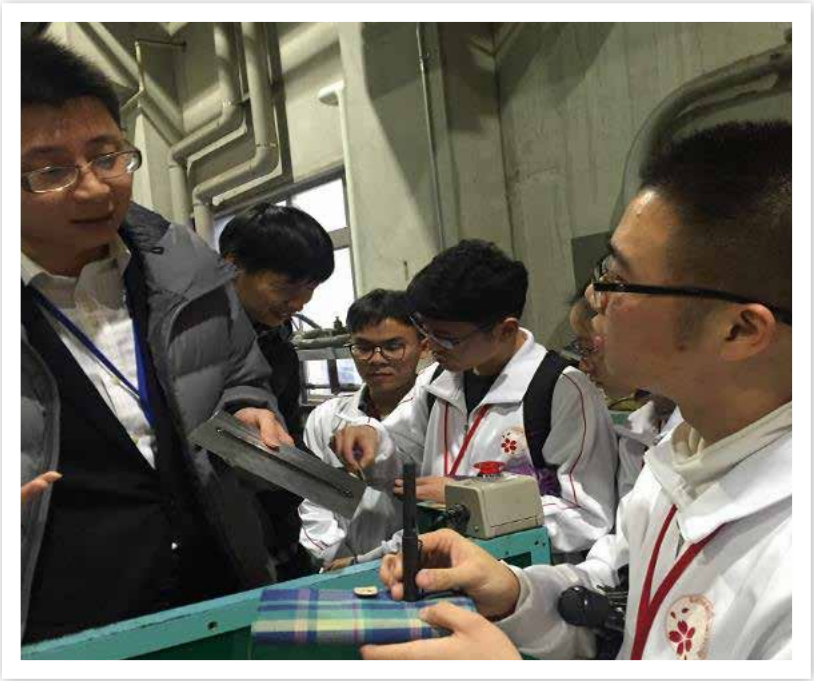
夜には、大阪大学の各キャンパスから中国に興味のある学生が集まり、互いに交流を図った。討論したテーマは幅広く、また、多少踏み込んだものであった。討論はとても熾烈で、各グループは素晴らしい発表を行った。内容としては、日中両国の違いについての比較や中国特有の現状についての分析などがあった。

最後は、立食パーティーとなり、程団長と大阪大学の代表者がプレゼント交換を行った。その場の雰囲気はとても賑やかで、皆とても楽しむことができた。

なぜですか？

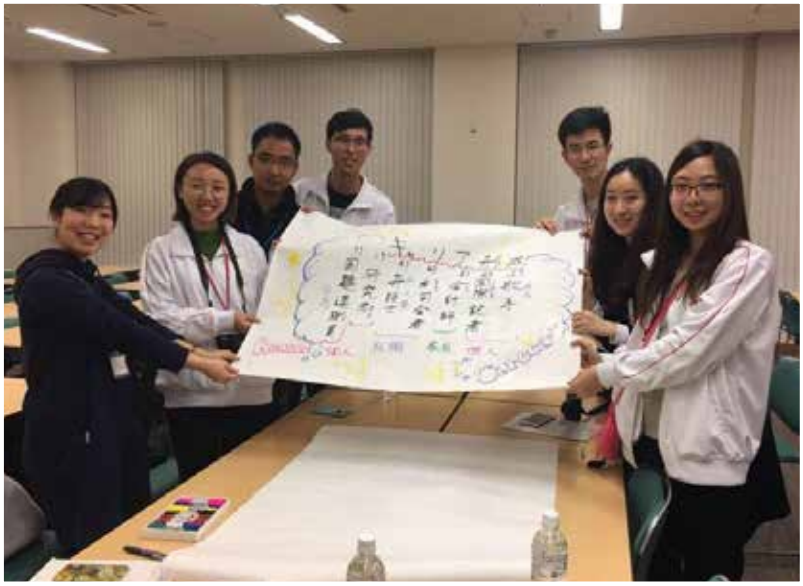
1) 過去または現在を問わず、大阪大学は優れた科学研究能力を有しており、ここから福沢諭吉といった明治維新における指導者やノーベル賞受賞者を含む国際的な賞の受賞者が多数誕生している。

2) 接合には従来の溶接という方法だけではなく、先進的な技術も含まれており、大阪大学の接合技術のレベルは世界でもトップクラスで、接合技術研究における大黒柱的存在である。



感想

大阪大学への訪問は、まず、大阪大学について知ることから始まった。私たちは会議室で大阪大学の成り立ちなどについての紹介に耳を傾け、紹介ビデオを鑑賞した。ビデオでは、様々な国からの学生がここに集い、学習そして生活している様子が紹介され、大阪大学の多様性や開放性が感じられた。その後、接合科学研究所の南所長から、私たちがこの後見学をする同研究所について紹介があり、その紹介を通じて私たちは、接合には従来の溶接という方法だけではなく、先進的な技術も含まれていることを知り、それと同時に大阪大学の接合技術のレベルは世界でもトップクラスで、接合技術研究における大黒柱的存在であることを知った。紹介の後、私たちは実験室の見学を始め、自動X線マイクロアナライザシステム、粒子法による摩擦攪拌接合技術、そして、検査シミュレーション技術について順に見学した。研究スタッフはとても詳細にその原理を解説してくれた他、私たちからの質問にも丁寧に答えてくれた。接合科学研究所の見学を終えた私たちは、接合構造の耐災害性テストや摩擦攪拌接合の改良等、科学技術の刷新がもたらすイノベーションを体感した他、大阪大学の研究スタッフの研究に対するひたむきな姿勢を知ることができた。



大阪大学の学生との討論では、キャリア形成に影響する要素について討論をした。交流が深まり、同じグループのミャンマー語を学んでいる日本の先輩女子学生の職業認識は、社会に貢献し、異なる国や民族について理解することだと知った。これには私たちは彼女の崇高な信念を感じ、また彼女の思いに心を打たれた。

今回の見学を通じて、私たちは大阪大学の緻密な学風を感じた他、意見を交わすことでお互いに友情の架け橋を構築することができた。

e革命の牽引者ー三菱電機

北京理工大学学生代表

見学日時：2017年11月30日（木）08:30-13:45
見学場所：三菱電機名古屋製作所

見学概要

三菱電機株式会社は 1921 年に設立した世界トップ 500 企業の一社である。その事業内容は幅広く、個人消費者向けの液晶テレビ、携帯電話、キッチン家電、車載家電、生活家電、空調家電の他、業務用の電子、電力、ソーシャル、交通、宇宙、情報、電機、機械、半導体及び映像等が含まれる。今回、三菱電機の工場及び生産ラインを見学し、私たちは三菱電機の特色である世界初の今後の工業の発展の在り方となる E-Factory の FA 統合ソリューションについて知ることができた。

現在、生産の最前線において、生産性の向上、効率化、品質の向上、コスト削減、エネルギー消費の削減等は解決が待たれる問題である。三菱電機は情報システムと生産の現場を連動し、E-Factory の FA 統合ソリューションを導入することで、生産性を高めると同時に生産コストを引き下げ、FA 製品や配電、空調等の様々な設備を運用し、多くの分野において工場の最適化のため全面的なサポートを行っている。

E-Factory の概念は、FA 技術と IT 技術の柔軟な活用を通じ、開発、生産、メンテナンス等全プロセスにおけるトータルコストを削減し、ユーザーの改善措置を支援すると同時に、顧客に製造業で他をリードする総合的ソリューションを提供するというものである。この枠組みは生産現場でのリアルタイムのデータ収集を手助けし、その後のデータ処理により IT システムとのシームレス連結を実現する。その後、IT システムの分析結果に基づきフィードバックを行い、改めて生産現場への検査と改善をするといった好循環を形成する。例えば、私たちが見学したサーボモーター工場では、案内のスタッフの紹介によると、従来は出荷検査において 2 日間の解析作業を行い、この間欠陥品の電圧調査、固定子や回転子の因子分析、欠陥品の分解、寸法確認、磁束波形確認、磁束データ確認等をしなければならなかったが、E-Factory を導入してからは、製造記録データとの比較対照システムの構築が可能となり、解析時間はわずか 5 時間となった。この他、生産現場のデータの収集を通じて、工場のどの部分で電力消費が多いかを知ることができ、改善ができるようになった、とのことである。

なぜですか？

問：工場は次第にスマート化を実現しており、これまで人が行っていた沢山の業務においてロボットが担当できるようになっている。これは従業員の働く場の減少に繋がるのか？

答：そうはならない。会社は大量の人員削減は行わない。ロボットの導入の後、確かに一部のスタッフの持ち場は減ったが、それらのスタッフについては会社の他の部署に異動となっている。

問：ロボットアームがあるのに、なぜ一部のネジの締付けについては依然として人が行っているのか？

答：一部の部品のネジはサイズが異なり、ロボットを使うとより多くのコストがかかってしまう。逆にロボットが情報の表示や通知を行い、人がネジの締付けを行うことで効率の向上とコストの削減が可能となる。

問：ロボットの使用により、生産ラインにおいて人が担当する業務が次第に簡単で繰り返しのものになる。これは工場における人の退化をもたらさないのか？

答：そうはならない。ロボットにより人が行う業務が次第に簡単になってはいるが、より多くの知識をもった人がロボットの設計や制御を行う必要があるため、人は依然として主導的立場にある。

感想

三菱電機には厳密な企業文化があり、また優れた従業員の管理制度がある。工場の見学の際、私たちは各作業場の外に台が立てられ、そこにはここの作業員の作業状態や熟練度が記され、名前の後にはそれぞれ異なる色のラベルがあることに気が付いた。またその下には作業員自らが自分を激励する言葉が書かれ、その傍のモニターには各作業員の作業の進捗度合や作業効率が表示されるなど、こうした方法により各作業員の業務効率を高め、良好な業務モデルが形成されていた。この他、工場の見学の際には各作業員が細かな繰り返しの作業を行っていたが、彼らは皆職人の精神で各作業を真剣に行っていた。例えば電気機械の最後の包装段階では、作業員はとても注意深く外側を包み、その後慎重にそれらを完成品のテーブルにきれいに並べて置いていた。厳密で細やかな文化は会社全体に浸透していた。またチップの製造工場を見学した際には、工場の貨物輸送の右側のエレベーターでは原材料の輸送を行い、左側のエレベーターでは製品や半製品の輸送を行っていることに気が付いた。原材料は右側のエレベーターを通じて 6 階に運ばれ、右側から左側への一次加工の後、左側のエレベーターで 1 階に運ばれ、左側から右側への再加工が行われる。巧妙な設計は流れ作業を実現し、製造効率を大きく高めている。これは三菱電機の各段階の設計への心配りと真摯な姿勢を反映しており、私たちも多くの収穫を得ることができた。

時代の流れを掴み、正確に未来を予測する

華北電力大学学生代表

見学日時：2017年12月1日（金）13:30-15:15
見学場所：NECイノベーションワールド

見学概要

NEC は世界の IT・通信ネットワークをリードするサプライヤーの一つで、先進的な情報技術とネットワーク技術を融合し、政府、業界、企業そして個人向けに優れた総合的ソリューションを提供している。業界をリードする同社はまた、絶えず技術革新を行い、スーパーコンピューター、光通信、マイクロウェーブ、衛星通信、ナノテクノロジー、情報ストレージ、生体認証、液晶ディスプレイ等多くの分野において大きな貢献をしており、さらに世界をリードする多くの成果を保持している。

12 月 1 日午後、私たち訪日団は NEC に到着し、スタッフの案内の下会議室に移動した。そこではまず NEC の森田隆之チーフグローバルオフィサーと訪日団の程海波団長による挨拶とプレゼント交換が行われた。次いで、私たちはプレミアムジャーニー、スマートネイションそして GAZIRU（画像認識サービス）の 3 つの展示ゾーンを見学した。最後に NEC 側の代表者が学生と質疑応答を行い、記念写真を撮影した。

なぜですか？

NEC は「プレミアムジャーニー」のビジョンを打ち出し、未来の都市のスマート化を如何に実現するのかについて多くの方面からそのソリューションを示している。

最初は、顔認証技術によるスピーディーな空港でのセキュリティチェックプログラムである。乗客は事前に顔認証をした後、必要な個人情報が記録された一枚のカードを受け取り、そのカードによりスピーディー、そして手軽にセキュリティチェックの機械に本人認証をさせることで、セキュリティチェックの所要時間を大幅に減らすことができる。これは乗客の時間の節約のみならず、NEC の世界トップの顔認証技術により身分確認における安全性や正確性が保証されることを意味する。

二つめは、スマート化した広告投入である。特に 2020 年の東京オリンピックが間近に迫っており、その際スポーツの祭典が引き付ける多くの外国人観光客が、日本に景気高揚の機会を提供すると考えられる。販売者が顧客を引き付けるための重要な手段である広告は、NEC の重要研究対象の一つである。「プレミアムジャーニー」では、顔認証が同様に広告の投入にも活用される。一方では認証結果に基づき広告を閲覧した顧客の年齢、性別を判断し、ピンポイントの広告投入をする、もう一方では顧客が広告を見る際の表情を分析し、動作の特徴から消費者のフィードバックを獲得し、最終的にビッグデータ分析の結果を利用し、販売者の今後の市場戦略や生産配置への参考データを提供する。

三つめは、体育館等の人が密集する公共スペースでのモニタリングである。顔認証技術は能動認証と受動認証に分かれ、NEC は世界でも少ない受動認証分野においても技術的優位性を持つサービス提供企業である。受動認証は認証の対象者がカメラに近づく必要はなく、最新の技術では人が歩く過程において素早く認証を完了することができる。この技術を利用し NEC は集団における各個人への個別管理を打ち出している。例えば、とある女の子がサッカースタジアムのスタンドで父母とはぐれたといった場合、スタッフはシステムを通じその女の子と一緒にいた人を検索

し、その身分を確認し、素早くその女の子の父母を見つけることができる。また NEC はさらに、実際に危険な状況が発生した際に如何に素早く効果的に人々の避難誘導を行うかを知ることができる緊急避難時における人々の分散の量、方向、分布モデルを確立した。

この他、「プレミアムジャーニー」ではまたテーブル投写によるメニュー、AR 補助ナビ等多くの生活シーンにおける技術的な構想を打ち出し、さらに大筋において実現している。NEC は科学技術のイノベーションにより彼らの NEC イノベーションワールドを体現している。

感想

今回の NEC 訪問はまさに日中国交正常化 45 周年の時期であった。1972 年に両国のトップが歴史的な握手を交わした場面は NEC が提供した中継システムを通じ世界にリアルタイムで中継された。この事は今回の訪問により重要な意義をもたらした。

NEC からは成熟した最先端技術である「プレミアムジャーニー」構想、スマートネイションそして GAZIRU（画像認識サービス）の三つが紹介され、私たちは科学技術のイノベーションの魅力を充分に感じることができた。

最も印象深かったのは NEC のスマートネイションである。スタッフは三つの具体的事例によりその技術や設計の理念を紹介してくれた。一つめはアルゼンチンのティグレ市で、NEC は行動解析や顔認証技術により街への監視を行い、大量のデータと画像の照合により犯罪予防に貢献している。二つめはスペインのサンタンデール市で、NEC は Smart Waste Collection Solution により、クラウド・シティ・オペレーション・センター（CCOC）を通じた可視化管理を行い、各地の様々なデータを分析・シミュレーションし、効率の向上とコストの削減を実現している。三つめはニュージーランドのウェリントン市で、NEC は ICT 技術を活用し、ビデオカメラと CCOC を連結し、交通、環境等の監視を通じて環境保護と犯罪予防を同時に実現している。NEC は AI と IoT 技術を通じ、都市のスマート化の進展を推進しており国家レベルで社会的価値を創出している。

NEC は科学技術により世界を変え、科学技術により未来の青写真を描き、人類を未来に導くことに注力している。今回、技術や創意において先見性に富み、さらに未来を切り拓くべく努力を続ける NEC を見学できたことに心から感謝している。科学技術は生活そして世界を変える。このイノベーション、大志、発明の時代における青年として、私たちは輝かしい未来の創出のために努力しなければならない。

総合商社の使命——丸紅

北京師範大学学生代表

見学日時：2017年12月1日（金）16:00-19:30
見学場所：丸紅株式会社

見学概要

期せずして皆がとても大きなエレベーターに驚くところから丸紅での見学が始まった。

訪日団と丸紅双方の責任者が名刺を交換し紹介を行った後、丸紅の市場業務部部長からの歓迎の挨拶があった。その中では市場業務部の主な業務についての紹介と、「丸紅としてのこれまでの走近日企活動の推進における貢献」という点について彼らの今回の活動への重視、中国市場への重視、及び今後の経済そして交流における提携継続への期待と展望についてのお話があった。

挨拶の後、皆は丸紅の会社紹介 DVD を鑑賞し、経済と産業の発展維持という総合商社としての同社の使命について知ることができた。その後、皆は丸紅経済研究所のシニア・アナリストである李雪蓮女史による講座に耳を傾けた。

李雪蓮女史からは「総合商社とは何か」という点から、総合商社の概況、経営戦略及び丸紅の中国における発展の状況について順に紹介があった。その紹介を通じ、皆は総合商社の変遷、業務種別、丸紅のバリューチェーン戦略、リスクマネジメント、ポートフォリオマネジメント、経営体制の改善及び中国における組織の設置、重点業務分野そして主なプロジェクト、企業投資等についておおよその理解をすることができた。その後の質疑応答のコーナーでは、数名の学生が李雪蓮女史と「企業投資の型式」、「リスクコストの確定」、「国際合弁プロジェクトにおける役割」等の問題について踏み込んだ討論をした。

講座の後、皆は懇親会の会場に移動した。懇親会では双方の代表者による挨拶の後、学生等は丸紅のスタッフと交流を図り、楽しいそして視野が広がる夕食のひと時を過ごした。

なぜですか？

問：丸紅は通常どのような方法で投資を行うのか？内部の部門が担当するのか？それとも専門の子会社を設立するのか？或いは他社に委託するのか？また丸紅の投資における資金源は？

答：これはケース・バイ・ケースであり、私たちは具体的状況に基づき、特定のプロジェクトについて内部評価を行い、その後会社を設立するのか或いは企業を買収して行うのかを選択し、本部のスタッフを派遣して管理している。資金源については、「内部資金（75%）+銀行融資（融資金利が低い日本政策投資銀行）」で、必要時には新株発行も行う。

問：丸紅の管理部門によるプロジェクトのリスク予測は独立して行われているのか？それとも外部のリスク予測会社、データ会社などを通じ行っているのか？ベンチャーキャピタルの基本的プロセスは？

答：リスク管理については当然外部の力が必要になる。まず私たち内部の関連スタッフは20名に満たず、さらに現在では外部のリスク評価企業の多くが素晴らしい実績を示している（中国、アメリカ等）ため、私たちとしては彼らの力を完全に利用することができる。ベンチャーキャピタルについては、私たちは国のリスク格付けやその業界のリスク格付けを参考に、さらに企業自身及びそれらとの関係性を考慮する。私たち内部の業務としては、外部から提供された評価や完成した製品が丸紅の要求に合致しているかどうかの評価と検査である。

感想

丸紅の見学をする前は、私たち自身総合商社の概念についてほとんど理解をしていなかった。そうした中、紹介により丸紅の事業内容が農業、機械、化学等様々な分野に及んでいることを、私たちは驚きを以って知った。小さなものでは穀物や食品、大きなものでは機械やエネルギーなど、これらはいずれも丸紅の生産そして投資の対象である。

同社について私たちが印象深かった点は二つある。一つめは丸紅のベンチャーキャピタルへの高い要求で、彼らは利益が 20% 以上のプロジェクトしか行わない、つまりとても強いリスク管理の意識を有している。二つめは丸紅の企業としての社会的責任感である。彼らは「社会貢献と環境保全活動に積極的に取り組む」ことを基本方針とし、利益を追求すると同時に社会にとって有益な企業となるべく取り組んでおり、非常に高い社会的責任感を有している。

丸紅への訪問では多くの収穫が得られた。企業が成功する上での内在的理由を知った他、講座での質疑応答そして懇親会における同社社員との交流等を通じて多くの知識が得られ、彼らの体験や経験について知るなど私たちとしても得るものがとても多かった。

イノベーションを追求し顧客に配慮する

北京大学学生代表

見学日時：2017年12月4日（月）09:00-11:15
見学場所：株式会社みずほ銀行

見学概要

12 月 4 日の午前、団員らは 9 時ちょうどに開いたみずほ銀行のゲートをくぐりこの日の見学活動を開始した。皆はまず会議室にてみずほ銀行中国業務推進部の広瀬俊部長による「中国におけるみずほ銀行」というテーマの講座に耳を傾けた。その後、皆は積極的な質問を通して多くの収穫を得た。さらにその後団員らは A、B の二班に分かれ営業ホールを見学し、企業の発展過程における顧客のニーズへの配慮や技術的イノベーションへの追求について実感した。見学の後は会議室へ戻り、みずほ銀行の中国人従業員らと交流を図った。団員らは情熱や好奇心に満ち、東京での仕事や生活についての感想など積極的に彼らへ訊ね、さらに業種の選択や今後のキャリア構築についても意見交換をした。

最後にみずほ銀行の寺本禎治常務執行役員や訪日団の程海波団長から双方を代表したあいさつがあり、集合写真の撮影の後に今回の見学活動は終了した。

なぜですか？

問：みずほ銀行は中国においてどのように事業を展開しているのか？発展の歩みはどのようなものか？

答：みずほ銀行は中国という海外市場を非常に重視しており、1979年からみずほ金融研修セミナーを開き、劉鴻儒、朱光耀氏らがこの研修セミナーに参加している。1996年には北京で支店を開設し、1997年には外資系銀行で初の人民元業務資格を獲得し、上海支店において人民元業務を開始した。2007年には現地法人として開業。従来の支店は現地法人傘下に組み込まれた。みずほ銀行は中国における外資系銀行の中で支店が最も多い銀行の一つである。

問：フィンテックが急速に発展している今日において、みずほ銀行はイノベーションや顧客のニーズを重視する企業としていかにこの課題に向き合っていくのか？

答：まず初めに業務の種類から言えば、現在みずほ銀行は中国国内において法人業務しか行っておらず、日本国内では法人業務の他個人業務も行っている。そのため、中国国内での事業の拡大を願っているが、この過程におい

て最も重要なのは、規制と自由化のバランスのとれた発展である。中国ではAlipayやWeChat決済等の個人消費の利便性を高めるツールが続々と誕生しそして大きく発展している。しかし日本ではオンライン決済方式は完全には普及しておらず、未だに現金での支払いがメインとなっているため、みずほ銀行としてはフィンテック業務については慎重に検討をしている段階である。さらにみずほ銀行は個人情報の保護をとても重視している。金融機関の顧客データ管理は非常に厳しいものであるため、フィンテックの展開と同時に金融機関に対する各地の規制への適応についても検討する必要がある。

問：中国の金融市場政策の変化に対するみずほ銀行の発展戦略とはどのようなものか？

答：みずほ銀行は中国の金融政策の発展動向を常に注視している。2007年、中国は銀行の外資持株比率の制限を緩和し、さらにFIG業界における49%の外資持株比率の上限を緩和した。みずほ銀行としては中国金融市場のこうした政策変動においては依然として具体的な細則を明確にすると同時に積極的に対応する必要があると考え、戦略面において一部調整を行った。証券分野では、北京と上海にそれぞれ非営利的な代表所を設立した。これまで出資比率の制限により設立していなかった子会社については、現在の開放的な金融政策の下での発展性には未知数な部分がある。それと同時にみずほ銀行としては、中国市場における発展においては未だ多くの課題が存在しており、中国国内の証券市場の拡大に対する金融政策の自由と規制のバランスについては更なる検討が必要であると認識している。

感想

日本トップの商業銀行であるみずほ銀行が有する効率的で時間に正確な仕事への姿勢といったものも今回の見学においては示されていた。例えば、9 時ちょうどに開くゲート、見学の各コーナーにおける正確な時間調整の他、団員らを二班に分け皆により多くの交流の時間を提供するなどこうした細部から、私たちはみずほ銀行が日本の数多の銀行の中で確固たる地位を獲得しているのはそれなりの理由があるのだと感じた。

また「みずほ銀行はイノベーションを重視し顧客のニーズに配慮する」という点についても、団員らが今回の見学を通して感じたことである。営業ホールには利用者の沢山のニーズに応える ATM 機が置かれ、顧客により良いサービスを提供するためのロボットも間もなく導入される。待合コーナーには快適な椅子そして雑誌などが置かれている。顧客へのこうした細かな配慮は、企業がその発展において他より優れるために必要不可欠な姿勢である。

みずほ銀行の中国人従業員との交流では、東京での仕事や生活は中国国内でのそれとは大きく異なっていることが分かった。彼らは私たちと共に金融分野における業種選択やキャリア構築について意見を交換し、私たちは従来の製造業であれ金融サービス業であれ、顧客のニーズを重視する必要があることが分かった。さらに業界内の新興分野の発展や模索も重要である。企業の発展とは、努力をしなければ後退してしまうものである。勇敢に突き進み、時代の足並みについていくことで業界をリードしていくことができるのである。

国の垣根を越えた友情

北京第二外国語学院学生代表

見学日時：2017年12月4日（月）12:00-13:30
見学場所：日比谷松本楼

見学概要

私たち訪日団一行は 12 月 4 日正午に日比谷松本楼に到着した。日比谷公園は東京都の中心部にあり、周囲には皇居や日本の各政府機関が立ち並ぶ。松本楼はその日比谷公園にある 3 階建ての建物である。私たちはそこで美味しい料理を楽しんだ後、小坂文乃女史による、彼女の曽祖父である梅屋庄吉氏と孫文氏の当時のお話に耳を傾け、意気投合した両氏による「国の垣根を越えた友情」について理解を深めた。

なぜですか？

問：松本楼に展示されているこのピアノにまつわる話を知っていますか？

答：このピアノは梅屋庄吉氏が自分の娘のために買ったものである。音楽好きな宋慶齢女史は、日本滞在期間中梅屋邸に身を寄せ、よくこのピアノを弾いていた。その後松本楼の三代目社長小坂哲瑯氏はこのピアノを松本楼内に展示したのである。

問：孫文氏と梅屋庄吉氏そして松本楼の間にはどのような物語があるのか？

答：孫文氏と梅屋庄吉氏は香港で初めて出会い、互いに革命を目指す二人の若者はすぐに意気投合した。しかし孫文氏の革命は頓挫し、清朝政府に追われていた彼は日本に亡命し梅屋邸に身を寄せた。日比谷公園が完成の際に、小坂梅吉氏は公園内に3階建ての建物を建て、松本楼を名づけた。そして孫文氏は日本滞在期間中に梅屋庄吉氏と何度も松本楼を訪れた。松本楼は孫文氏と梅屋庄吉氏の友情を見守った証人といえる。

感想

今回の見学では、日比谷公園の美しい風景そして美味しい料理を楽しんだ以外に、孫文氏と梅屋庄吉氏との「国の垣根を越えた友情」について深く知ることができた。

孫文氏と梅屋庄吉氏は香港で知り合った。当時梅屋庄吉氏は写真館を経営しながらも、アジア各国の革命事業を支援したいと願っていた。そして志を同じくする二人の若者は知り合ってすぐに意気投合し、孫文氏は梅屋庄吉氏に対して清朝政府を倒すという願いを伝え、梅屋庄吉氏は財でその革命を支援することを孫文氏に約束した。こうして二人の「革命の志士」による友情が始まったのである。

梅屋庄吉氏は日本で最初に「映画ビジネス」の恩恵を受けた人物で、とても裕福であった。彼は幼いころから冒険精神に富んでいた他、アジア全体を助けたいという思いを持っていた。彼は中国の人々が迫害を受けているのを目にし、義憤を感じ、その後自分の全財産を使い孫文氏の革命事業を手助けした。これについて小坂文乃女史は、「曽祖父は全財産を孫文氏に提供したため、私たちには何も残らなかった。」と冗談っぽく述べていた。それでも孫文氏の革命事業は順風満帆であったわけではなく、途中で頓挫し日本へ亡命し梅屋庄吉氏のもとに身を寄せていた時期もあった。「孫中山」という名前は、その日本での亡命時期に使っていた名前である。

私たちが感服するのは、梅屋庄吉氏の冒険精神とその心の広さである。梅屋氏は自国の視点から世界を見るのではなく、アジア全体を救うという信念を持っていた。彼は私欲を捨て、全力で孫文氏の中国における革命を支えた。孫文氏にとって、梅屋庄吉氏と出会えたことはその生涯の中で最も幸運なことの一つであったと言える。松本楼には梅屋庄吉氏そして孫文氏の「国の垣根を越えた友情」を示す物品が保存されている。しかしこれは二人の友情というだけでなく、当時の中国と日本との友情ということもできる。現在日中関係が悪化を続ける最大の理由について、私は両国が互いに相手を理解しそして受け入れることができていないせいだと思う。両国の人々は梅屋庄吉氏を見倣い、彼の広い心を学ぶべきである。「将来、社会のために自らの力を捧げる」、こうした言葉は現在では頻繁に目にするが、真にそれを行動に移している人はとても少なく、覚悟が足りていないという問題も存在する。私たちは遠くを見据え、身の回りの事だけでなく、梅屋庄吉氏のようにアジア全体ひいては世界全体に目を向け、世界のために貢献していかなければならない。

孫文氏と梅屋庄吉氏による「国の垣根を越えた友情」について知ると同時に、私たちもこれを自身への啓発とし、より広い心と大きな理想を持つことが必要である。そして中国のため、また日中関係の改善のため、さらにはこの世界のために考え、自身の責任感を高め、有用な人材とならなければならない。

旅人の暫しの帰宅——中国大使館での交流にて

国際関係学院学生代表

見学日時：2017年12月4日（月）14:00-15:30
見学場所：中国駐日本国大使館

見学概要

まず初めに代表団の程海波団長からの挨拶があった。程団長からは今回の訪問活動の内容についての紹介の他、中国大使館の日頃の業務への感謝そして今回の中国大使館での交流における期待が述べられた。

その後、中国駐日本国大使館の郭燕公使からお話があり、今回の代表団に訪日の機会を提供した各関係者への感謝の意の他、代表団の中国大使館訪問への歓迎の意が示された。

次いで、代表団の 6 大学の代表者が企業見学やホームステイ、日本の環境保全への取り組みなどこの数日間の日本訪問での経験や感想についてそれぞれの思いを述べた。

その後の質疑応答のコーナーでは、学生からの質問に郭公使が丁寧に回答された他、郭公使からは皆の前途への祝福の意が示された。そして最後に国章の下で記念撮影をし、今回の中国大使館での交流は円満に終了した。

なぜですか？

1) ここ数年、中国の多くの都市においてキャッシュレスのライフスタイルを始める人がますます増えている。中国においてキャッシュレス決済を利用する実名制ユーザーは4.5億人を超えており、中国のアントフィナンシャルとインドの提携パートナーが開始したインド版の支付宝のPaytmユーザーは2.2億人を超え、世界3位の電子ウォレットとなっている。中国は世界のキャッシュレス化ランキングの第6位で、キャッシュレス決済の比率はここ5年間で2倍になった。日本は現金大国で、世界のキャッシュレス化ランキングでは第9位、ここ5年間でのキャッシュレス決済の比率は5%増加した。

2) 日中友好の土台は民間にあり、日中関係の前途は両国の人々に委ねられている。日中双方は歴史を鑑とし未来に向かう精神により、日中の4つの政治文書を基礎として平和的発展を互いに促進し、長きに渡る友好関係を構築することで、アジアそして世界の平和に貢献しなければならない。「国の交わりは民相親しきにあり」、両国の民間による相互交流や理解は、両国関係の更なる改善推進を後押しするのである。

感想

中国駐日本国大使館では郭燕公使からのもてなしを受け、郭公使からは日中両国間の複雑な関係性や意見の不一致が存在する点などについて紹介があり、学生からはたくさんの質問提起があった。それらの中には日米関係の中国の外交政策への影響に関するものなどもあったが、郭公使は平和、発展、協力、相互利益を旗印とする原則に基づき、私たちの質問に回答されていた。

統計によると、日中関係が最も冷え込んでいた時期、90% の日本の民衆は中国への好感がなかった。その原因の一部には日本のメディアの不充分そして客観性を欠いた報道があり、また一部には日中の交流不足がある。例えば今回の交流において、一部の日本の人は中国の食べ物を食べるとお腹を壊すと考えていた。この点についてはとても残念に感じている。中国の隣国である日本にとって、中国と良好な外交関係を維持することはとても重要であり、同時にこうした良好な外交関係は政府間の交流だけに限らず、より多くの部分で日中の民間の友好交流にかかっている。

日中関係について私たちは歴史的、客観的そして開放的な姿勢で見ていく必要がある。問題はどちらか一方のものではなく、過激な行為は日中関係をより硬直化させるだけである。今後国の柱石となるべき私たちは、尚のこと日中関係を正しく認識し、日中両国の新たな交流・協力分野を積極的に開拓し、民間の力で私たちの友好への願いを伝えていかなければならない。

「国の交わりは民相親しきにあり」、両国の民間による相互交流や理解は、両国関係の更なる改善推進を後押しするのである。私たちもホームステイといった活動をより多く展開し、日本から交流に訪れる学生をもてなし、中国の姿を紹介していく必要がある。また同時に中国企業見学のプロジェクトを展開し、中国の技術を紹介することで日本の人々により直観的に中国を知ってもらい、両国間における真の利益や需要を可能な限り明確にし、日中の民間の友好関係を発展させていかなければならない。

中央大学での考察と交流

北京第二外国語学院学生代表

見学日時：2017年12月4日（月）16:30-19:30
見学場所：中央大学

見学概要

12 月 4 日の午後、私たち一行は中央大学の本部を訪れた。同大学は法律家によって創設され、今回私たちと交流をする 20 数名の学部生や大学院生も、そのほとんどが法学を専攻していた。まず日本の学生から中国語での学校紹介があった後、日本と中国の学生が混合でグループを作り、決められたいくつかのテーマから自由に選びグループ討論を行った。そして最後に討論の成果について各グループがそれぞれ 5 分間の発表を行った。夕食の際は学生が自由に、互いに興味のある問題について交流をし、多くの学生はまた連絡先の交換などをした。

なぜですか？

問：中央大学で最も有名な学部は何か？

答：中央大学は日本の関東地区の「難関私大」の一校であり、多くの日本の学生が理想とする大学である。同大学は当初18名の法律家が創設したことから、法学部は日本において特に有名で、130年以上の歴史を持っており、中央大学の毎年の司法試験の合格率は日本でもトップ3の地位を維持し、卒業生は日本の法曹界において強い影響力を有している。この他、中央大学は政界、経済界、文化界、ひいてはスポーツ界、芸能界等社会の各界においても強い影響力を形成している。

感想

今回の見学と訪問を通じ、私たちは本当の意味で日本のトップクラスの大学における学習状況を知ることができた。私たちが訪問した後楽園キャンパスの場所は皇居の近くにあり、これほど現代化した場所にこうした学校があることで素晴らしい景観を構成していた。今回私たちとの交流に訪れた中央大学の学生の多くは、大学本部がある多摩キャンパスから来ており、後楽園キャンパスの風景とは大きく異なり、郊外にある多摩キャンパスでは自然の景観がとても素晴らしいとのことであった。これほど遅い時間に郊外からわざわざ私たちとの交流に来てくれたことには驚いたと同時にとても感動した。中央大学から受ける雰囲気は一風変わっていた。トップクラスの大学ではあるのだが、皆の課外生活がとても充実しており、多くの学生の思想もとてもユニークであった。

今回、中央大学での見学を通じ、私たちは日本の大学生の英語のレベルが中国の大学生ほど高くはないという印象を受けた。あるいはその専攻と関連があるのかもしれない。その点について中央大学の学生に訊ねてみたところ、日本の英語教育への重視度合は確かに中国とは異なるとのことであった。日本では、英語の授業が早くても小学三年生から、遅いところでは中学生から始まる。また単語の量もさほど多くなく、多くの中学校の英語の授業では少し学んでみる程度で遊びに近いものもある。もちろんこれは普通の学校の場合で、一部の進学校では優秀な学生を東京大学等の清華大学に劣らない有名な学校に進学させるために、英語の授業も難易度が高いものとなっている。

日本の教育の問題から、日本の学生の外国語レベルは低いのではないかと考える人が多いが、実際はそうではない。まず私たちに学校の紹介をしてくれたのは清華大学での留学経験のある学生で、日本人には比較的難しいとされる巻き舌音を含めて全体的に中国語の発音がとても良かった。これには中央大学の学生の優れた外国語のレベルを感じることができた。テーマ討論の際は日本の学生の発表時の立ち振る舞いの素晴らしさを感じた。日本の大学では日頃からグループ討論を行い発表する場を設けているため、多くの学生はとても堂々としている。いかに聴衆の注意を引き付け、ミスをした時にはいかにユーモアを交えてその場を乗り切るか、いかに皆の積極性を引き出すか、これらは私たち中国の大学生が学ぶべきものだと思った。また日本の学生の多くの授業ではグループ内討論が行われ、教師への依存度が低いとのことである。一方中国の多くの学校では教師による解説への依存度が依然として高い。

中央大学の学生たちは私たちにとても良くしてくれた。最後の懇親会では多くの学生が私たちと積極的に交流を図り、中国についてのたくさんの質問をしてくれた。中国の文化や法律制度についても一定の理解をしている学生が多く、専門知識について私たちと交流をした他、その他多くの学生もまた自身の趣味や好きなスポーツなどについて交流を図り、さらには互いの連絡先を交換していた。短い時間と住む地域の違いは、日中双方の若者に隔たりをもたらすものではなかった。皆は若く、同じ思想や趣味を持ち、話の合う話題では互いに笑顔で一つになることができる。また多くの学生は留学に関することについても意見の交換をした。両国がより多くの留学プロジェクトを展開し、両国の学生の交流を促進し、優秀な日本の学生に中国の文化をより知ってもらい、両国の新たな世代が互いに交流そして理解をすることでより平和で安定した日中の友好関係の構築に繋がることを願っている。

未来へ向けた「環境哲学」

北京大学学生代表

見学日時：2017年12月5日（火）09:30-11:00
見学場所：ホテルニューオータニ東京

見学概要

12 月 5 日の午前、団員らはホテルニューオータニ東京の見学を行った。同ホテルでの宿泊以降、団員らはこのホテルの規模の大きさや素晴らしいロケーション、優れた環境やサービスに心を打たれており、関連資料を読み終えた団員らは同ホテルの省エネ・環境保全対策についてとても期待していた。

ファシリティーマネージメント課の三浦光昌課長からホテルニューオータニの発展の歩みについて紹介を受けた後、私たちはホテルのエネルギー制御施設、廃水処理施設及びコンポストプラントの見学を行い、三浦課長からは中水の生産プロセスや生ゴミの再生プロセスについて詳しい紹介があった。最後に、団員らはホテルニューオータニの日本庭園を訪れ、和風の造園芸術の魅力を堪能し記念写真を撮った。

見学レポート

ホテルニューオータニは 1964 年の東京オリンピックの直前に建設され、その後タワーが、さらにガーデンコートや当時東京で最大規模の宴会ホールや日本庭園等が建設され、次第に現在の規模になっていった。

1964 年の開業以来、ホテルニューオータニは常に環境保護や循環型経済を積極的に推し進めている。2007 年のザ・メイン改修工事終了後、同ホテルの発展は新たな段階に突入し、環境保護と快適さが有機的に結びついた「複合エネルギー型ホテル」の目標へ向け邁進している。

私たちはホテルニューオータニの廃水処理施設を重点的に見学した。廃水処理施設の機能やシステムは整備されており、回収効率は極めて高い。同ホテルでは毎日平均 1000 トンの厨房廃水が発生するが、それを中水に転化し、ホテル館内のトイレ洗浄水や屋上緑化の一部の散水に利用している。また　飲料水は、厚さ 70mm の米ヒバを使用した木製受水槽に溜めて、ヒバの殺菌作用を利用している。

勿論、ホテルニューオータニが工夫を凝らした日本庭園も団員らからは好評であった。ここでは高くそびえるビルが流れる水や青々とした木々や落ち葉などを囲み、そこを歩くと清々しい気分になった。そして枯山水等の要素が適度に融合し、繁華街にあるこの場所に「繁華街において自らを浄化する」といった「境地」を持たせている。ここでは「未来へ向ける」上でも当初の様子を忘れてはいない。

なぜですか？

問：ホテルニューオータニは主にどういった方面において環境努力を行っているのか？

答：具体的にはホテルニューオータニではCO_2排出削減、耐震性強化、屋上の緑化、循環利用等に多くの投資をしており、大きな成果を挙げている。AEMS空調エネルギー管理システムは温度、湿度、風向きの個別化調整を可能にし、快適さと高効率の融合を実現している。温水供給の面では空気熱源ヒートポンプ給湯設備や余熱回収システムを設置し、また機関室の放熱の回収利用により都市のヒートアイランド現象の緩和を図っている。またオール電化厨房システムやAEMSにより更なる省エネや排出削減を実現している。そして2007年のザ・メイン改修後、耐震能力は全面的に強化され、阪神大震災のような大規模な地震にも耐えられるようになっている。ホテルニューオータニ独自の屋上緑化はその面積の広さだけでなく、景観の美しさと環境保護との融合を実現しており、異なる高さの様々な植物も効果的な断熱の役割を果たしているだけでなく、それら植物の栽培用の水もホテルの廃水処理設備からもたらされている。

問：ホテルニューオータニのコンポストプラントではどのようにコンポストが作られているのか？またどのような優位性があるのか？

答：ホテルニューオータニにおける生ゴミの100%資源化を行うコンポストプラントでの年間のコンポスト生産量は300トンになる。ホテルの生ゴミは分別、攪拌、発酵、混合等のプロセスを通じて堆肥化され、さらに農家が状況により枯葉などを混ぜて使用している。

年間の生産量は特別大きいわけではないが、千葉県の90の野菜生産農家及び茨城県の一部のコメ生産農家をカバーしている。ホテルが生産する有機肥料は環境に優しく、この肥料を用いて生産した野菜やコメなどはより確かな安全性を有している。またホテルの肥料生産量は比較的安定しており、輸入肥料の価格は時折大きく変動することから、「肥料プラント」は農家の利益を大きく保障するものでもある。さらにコンポストプラント内に入れる生ゴミについては厳しい要件があることから、ホテルが提携農家から購入するコメや野菜の一部はこれらの生ゴミの分別を行う従業員への「報奨」となっている。

感想

見学では三浦課長からの解説や李先生の分析を通じて、団員らはホテルニューオータニが受け継いでいる未来へ向けた「環境哲学」について深く理解することができた。この「環境哲学」については、まず初めに高度な社会的責任感や未来志向の戦略に現れており、次いで技術や管理におけるイノベーションに示されていた。ここでは、循環型経済の発展は環境便益と経済効率の完璧な融合を実現している。

ホテルニューオータニが独自で構築した廃水処理システムはホテル内部の水循環における重要な位置を占めている。厨房廃水のトイレ洗浄用水及び緑化灌漑用水への変換過程、特に廃水処理施設の見学の後に日本庭園や宴会ホールなどを訪れ、私たちはより一層「循環利用」理念により再生された水の巨大な力を感じることができた。環境便益と経済効率の融合はこの場において最もよく示されていた。紹介によると、水の再生の項目だけで毎年 200 万人民元以上の節約になっているとのことで、ホテルの評判の向上がもたらす間接的な収益増については言うまでもない。いわゆる「豊かな自然は金銀ほどの価値がある」であり、環境と経済の相互利益は実現可能であり、また実現しなければならないものである。

今回の見学において私たちがホテルニューオータニを含めた日本企業から感じた非常に際立ったポイントは「社会的責任感」である。技術や管理のイノベーションは企業が発展をする上での原動力であり、高度な社会的責任感は企業が未来へ向けた発展をする上での「命綱」であることを知らなければならない。ホテルニューオータニは企業としての社会的責任を非常に重視しているだけでなく、それを基に発展のための戦略や目標を定めている。「遠い将来を見通す」ことで「造作なくできる」ようになるのである。

これから先の世界にはチャンスや課題が共存し、人と自然はどのように共存そして発展をすべきかといった問題については、ホテルニューオータニの未来へ向けた「環境哲学」に関しての更なる研究やその哲学の各地の事情に応じた応用が必要であろう。

終点でもあり新たなスタートラインでもある——歓送会

北京師範大学学生代表

見学日時：2017年12月5日（火）12:00-13:45
見学場所：ホテルニューオータニ東京

概要

歓送会が始まる前、私たちはホールの入口で中国駐日本国大使館の外交官、中国日本商会、日中経済協会のメンバー、ホストファミリー及び訪問先企業の代表者を出迎えた。歓送会では、日中経済協会の伊澤理事長、そして「走近日企・感受日本」訪日団の程海波団長及び日中経済協会の横山氏、中国駐日本国大使館の薛剣公使級参事官がそれぞれ挨拶を行い、今回の活動が無事終了したことへのお祝いの他、私たち若者世代への期待そして日中関係の更なる発展への期待を述べた。その後、訪日団の６大学の各代表者が自らの体験と感想を交え、この８日間についての総括を行った。今回実際に日本を体験して、私たちは本当の日本というものに触れ、その優れた科学技術、整った制度、国民の素養の素晴らしさを目にした。これからの時代の青年として、私たちはより多くの人が客観的に日本

と向き合うべく、今回見聞きした事を周りの人々へ伝え、日中の友好に自分たちなりの貢献をしなければならない。そして最後に、学生全員が訪日団の団歌である「違いはない」を合唱した。感動的な歌詞によりお別れの寂しさはより強まり、嗚咽をする、また涙を浮かべる学生もいた。出会いがあれば別れもある、この８日間、私たちは企業、大学、中国駐日本国大使館を訪れ、そしてホストファミリーとの忘れ難い友情を培った。私たちは身を以って実際に日本への直感を得ることができた。今回の訪日活動は私たちが今後前進する上での原動力になっていくだけでなく、日中の友好交流を促進する架け橋となることを確信している。

なぜですか？

問：歓送会では一部の人が和服を着て参加していた。日本人はどういった場で和服を着るか知っていますか？

答：その場の重要度により着るものが決められる。日本人は普段の生活において浴衣等を着ることも少なくないが、より正装といえる和服は非常に厳かな場において着られる。例えば厳かな祝祭日、成人式、重要な会議や儀式等

では和服が着られる。そして今回の歓送会に一部の人が和服で出席したことは、彼らが今回の送別をとても重視し、私たちを非常に重要な人として認識しているだけでなく、さらに私たちへの最大限の祝福を表している。

感想

出会いがあれば別れもある。名残惜しいが、私たちは８日間の訪日の旅の終わりを迎えた。

大使館を訪れた際、郭燕公使は「若い時期に海外を訪れる経験はとても得難いものである」と述べていたが、本当にその通りだと思った。日本でのこの８日間、私たちは各企業からの細やかなおもてなしを受け、スタッフの熱心な解説に耳を傾けた他、ホストファミリーからの気遣いやお世話を受け、日本や日本企業、そして日本の家庭について知ることができただけでなく、自分たちの視野が広がり、思いやりを感じることができた。これら全てについて、それまで脳裏にうっすらと残っていたものが、歓送会の場で各企業のスタッフ、お世話になったホストファミリーなど一人ひとりを目にすることで、はっきりと、鮮やかに、そして永遠の素敵な思い出に変わっていった。

日本での８日間で受けた恩や思いやりといったものに対して、私たちは団歌を歌うことで恩返しの気持ちを示すしかなかった。メロディーが流れた瞬間、この数日間の記憶が映画の画面のように目の前を駆け抜け、名残惜しさがこみ上げ、どうやってお別れをしたらいいのか分からなくなった。空港に向かうバスがゆっくり動き出すと、車窓の外の「お父さん、お母さん」そして可愛らしい子どもたちがしきりに手を振っていた。お別れは終点ではなく、次の出会いへの始まりである。私たちは今回日本で感じそして学んだことの全てを中国に持ち帰り、今回の友情や縁というものを別の形で残し、再会の際に旧友に喜びをあたえられることを期して自分を高めたいと思う。

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 21 回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日　付：11月28日（火）1日目
大学名：北京大学
氏　名：陳晨

この日の昼、代表団が東京に到着し、興奮に満ちた日本での旅が始まった。今回最初に訪問したのはJALの整備工場であった。学生等はスタッフの案内の下、飛行機のメンテナンスの現場を実際に見学し、航空会社における技術や正確性の高さを体感した。また質問を通じて私はJALについて以下の認識が得られた。

はじめに、JALの最大の特徴はサービスの素晴らしさにあるということである。JALのサービスの質は極めて高く、その優れたユーザー体験こそが、正にJALがシェアを獲得する上での最大の武器となっている。素晴らしい機内食や客室乗務員のサービスから、安定した飛行体験、静かな環境まで、これらはいずれもJAL独特のものである。

次に、JALの現在の戦略としては、利益率が高い欧米路線を増やすことで急速な利益の増加を実現している。そのためJALは毎年40機の航空機を購入しているが、安易な新規路線の開拓は行っていない。

三つめに、航空業界といった大規模資産の業界においては、投資を如何に回収するかが重要である。この点においてJALは品質とメンテナンスを重視し、航空機の寿命を30年以上にすることで費用を効果的に分担し、また減価償却費用を下げることで黒字実現の土台としている。

日　付：11月28日（火）1日目
大学名：北京師範大学
氏　名：李易陽

早朝5時、夜がまだ明けていない頃、私たちは学校から空港へ向けて出発した。そして空港にて団員が集合した後で搭乗手続きを行った。日本人の礼儀正しさについてはかねてより聞いていたが、日本航空のスタッフが頻繁にお辞儀をしているのにはやはり驚かされた。

昼になり私たちは羽田空港に到着し、暫しの休憩の後今回の最初の目的地である日本航空の整備工場の見学を始めた。そこでは機長や客室乗務員の制服の試着のみならず、同社の歴史を紹介する博物館の見学の他、スタッフの詳しい解説を通じボーイングとエアバスの機体の見分け方、飛行機がいかに着陸するか等について一定の理解を得ることができた。また同整備工場における「整理整頓」、「安全第一」の理念についての理解を深めることができた。

そして見学を終えた私たちは飛行機で大阪へ向かい、豪勢なバイキング形式の夕食を楽しんだ後、仲間と共に宿泊先のホテルの近くを散策した。夜の北京の賑やかさとは異なるものの、街路は静かだが活気があり、空を見上げるといくつかの星がかすかに見えた。

初めての日本で、すべてのものに興味がある。明日にも期待している。

日　付：11月28日（火）1日目
大学名：北京第二外国語学院
氏　名：孫佳濱

今日は「走近日企・感受日本」活動の初日である。日本文化を体感することは私にとって長年の夢であり、日本は国土面積こそ小さいものの、その文化的内包は私たちが学ぶべきものである。私は日本への好奇心を抱きながら代

表団と共に日本航空の整備工場を訪れた。

地下の工場の門を開けると、皆は思わず驚きの声を挙げた。まず工場の面積がテニス場よりも大きく、大型の航空機が最大3機収容できる。次に同整備工場では設備が整っていた。航空機はとても大きいため、メンテナンスにおける利便性を高めるため、各部位には専用のはしごが配備され、スタッフが作業をする際の安全性と効率を高めている。今回幸いなことに私たちは航空機の着陸の様子を至近距離で観察することができた。また解説スタッフからは飛行時の知識について紹介があり、私たちはそれらに耳を傾けた。そして見学の時間こそ短かったものの、スタッフはとても丁寧に解説をしてくれた。見学を通じ私は、一人の大学生として自分の専攻に関する知識を得るだけでなく、本以外の知識により自身の見識を高めなければならないと感じた。特に日本語を専攻している私にとっては、日本の文化をこれまで以上に知り、感じることが必要だと思った。

午後、私たちは慌ただしく飛行機に乗り大阪へ向かった。明日私たちはパナソニックエコテクノロジーセンターと大阪大学を訪れる。明日は沢山の日本の学生と交流し、日中それぞれの文化に存在する違いを比較するなど日中の民間交流に貢献したいと思っている。そして明日への期待と共にその準備をした。いずれにしても今日は本当にいい勉強になりました。明日の訪問、楽しみにしています。

日　付：11月28日（火）1日目
大学名：華北電力大学
氏　名：付康

「ドン」という音と共にJALの飛行機が羽田空港に着陸し、私は日本の地に足を踏み入れ日本文化を体感する旅を始めた。

中国国内のネット上では日本人が細やかで礼儀正しいとよく聞くが、今日は本当の意味でそれを感じることができた。空港のトイレではビジネスマンがブリーフケースを置けるスペースがあった。こうした一見地味なディテールに私は中国国内ではトイレに入る際は手持ちの鞄を他人に預けなければならないことを思い起こした。ここでまた日本文化のもう一つの特徴について話をするが、ガイドの紹介にあったように日本では親が子どもに他人に迷惑をかけないよう教育する。そのため日本人は日頃から「すみません」という言葉を口にする。

午後は日本航空の整備工場を見学した。バスを降りると整備工場側から温かい歓迎を受け、出迎えのスタッフがバス近くまで迎えに来ていた。また建物内に入る際は常に案内のスタッフがいて、「列を作り歓迎する」様子からは多少古代中国の十里相迎（十里手前から出迎える）といった感覚がした。また作業場に入る際は私たちにヘルメットが配られるなど、安全意識の高さと共に生命への尊重が感じられた。

最後に見学を終えその場を離れる際、整備工場のスタッフは手を振ってお別れをしてくれた。またたとえ面識のない警備員でも、私たちに対してお辞儀をして見送ってくれた。こうした振舞いには心が温かくなる思いがした。

日　付：11月28日（火）1日目
大学名：国際関係学院
氏　名：杜文慧

朝、日本航空のJL20便に乗り羽田空港へ向かった。その後日本航空の歴史について深く知り感動した以外に、整備工場の見学では巨大なスチール製の足場や清潔な作業環境に驚かされた。日本航空における航空機のメンテナンスはA・C・Mの3タイプに分かれており、Aは650時間のフライト毎に行うメンテナンス、Cは1ヵ月半に一度行うメンテナンス、Mは5年に一度行う全面的なメンテナンスである。その他航空機には機首・胴体部分・機尾に計3つのエンジンがあり、その中機尾のエンジンは他2つのエンジンへの圧縮空気動力提供用で、客室内の空調や照明用電気の提供も行うことを知った。またボーイングとエアバスの各種機体の見分け方についても知ることができた。さらにスタッフか

らは何故主翼に燃料を蓄えるのか、また3つのエンジンの位置づけといった問題について丁寧な説明があった。

今回の見学を通じて日本航空におけるメンテナンスの実状を知り、同社の整然としたメンテナンスのメカニズムや方法には本当に驚かされた。

日　付：11月29日（水）2日目
大学名：北京大学
氏　名：高遠

朝の和洋折衷の食事でリフレッシュした後、PETECへ向けて出発した。

これほど有名な日本企業の内部に私は初めて踏み込んだ。思っていた通り活力に満ち、親しみやすさと緻密さが共存した作業場で、また奥深く分かりやすい、そして熱意に満ちたサービスと解説であった。しかしながら私が特に感動したのは、パナソニックの企業としての、また松下幸之助氏の企業家としての社会的責任感であった。責任感や社会的役割のない企業は成功することはなく、名声を得ることは尚のことない。対して松下幸之助氏は1965年にはすでにリサイクルを提唱し「モノを大切にする」ことを広めており、今回の見学で見聞きしたことについては本当に感服させられた。

また特筆すべきは、ディテールにより成果をあげている科学技術の応用（原理は簡単だが、それを効率的な選別につなげることは簡単ではない）以外にも、PETECのヒューマニゼーションやヒューマンケアは素晴らしいということである。リサイクル工場であるため、工場における騒音は大きく、作業もきついが、工場ではスタッフのために耳栓、超厚手袋そして革靴などの防護用具を準備している他、さらに作業用具の改良を行うなど、大規模な分解作業における騒音、汚染や危険性を最小限にするための対応を行っている。

昼食は、恐らくこの一年で最も上品であろうと思われる洋食に舌鼓を打った。

午後は待ちに待った大阪大学にやって来た。様々な高さのモダンな建物が並ぶ様は趣があるが、やはり工業精神が最もはっきり示されていた。特に接合科学研究所では、摩擦攪拌接合の発展ぶり、実験と数学モデルを兼ね備えた材料探求、複数のルートによる分析管理を行う総合実験室、先輩や教授らの細やかな解説、操作、回答など、接合科学研究所のハイテクぶり（世界で唯一の分析設備もあった）のみならず、着実な理工精神が感じられ、感服と同時に憧れを抱いた。

大阪大学の教授は素晴らしく、今回多くを学ぶことができた。また大阪大学の学生らもとても優秀で、懇親会もとても楽しかった。それから都市計画を専攻する学生が最も期待していた新幹線も体験した。

Farewell Osaka！Hello Nagoya！

日　付：11月29日（水）2日目
大学名：北京師範大学
氏　名：王月

2日目、私たちはパナソニックエコテクノロジーセンターへやって来た。

バスを降りる前、すでに私は窓からパナソニックエコテクノロジーセンターのゲート前の自然風景を目にしていた。それはまるで『紅楼夢』において王熙鳳を描写する際の「未見其人、先聞其声（姿を見かけるよりも先に声が聴こえる）」の手法のように、パナソニックエコテクノロジーセンターは見学者が足を踏み入れる前からすでに彼らの企業文化を無言のうちに伝えていた。その後、スタッフの紹介を通じて、私たちは同センターが「商品から商品へ」の理念を堅持し、100％のリサイクルの実現に力を入れ、環境保全事業の発展を推進していることを知った。その他、周辺地区との共生の実現のため、同センターはさらに現地と契約を締結し、環境品質を保証している。一連の紹介の中で私が最も意外だったのは、リサイクルのプロセスにおける消費者の役割や義務であった。中国国内とは違い、日本の消費者は使用

済家電をリサイクルに出す法的義務があるだけでなく、リサイクル業者に一定の費用を支払わなければならない。こうした取り決めは消費者の負担を増やすが、長い目で見れば全人類の権益を守ることに繋がっている。しかし、消費者の負担によりリサイクル業者の利益とする手法は長く続くものではなく、経済的収益により環境保全の効果と利益を賄うことで、真に経済と環境の良好な関係性を実現すべきだと私は思う。

パナソニックエコテクノロジーセンターに別れを告げた私たちは、長きに渡る高い名声を誇る大阪大学へとやって来た。私たちはスタッフの案内の下、摩擦攪拌接合、レーザー接合そして世界で唯一のX線4次元可視化システムを見学した。接合科学研究所で見たものは私の知識の範囲を超えるものであったが、スタッフの分かりやすい解説により私は接合技術について初歩的な理解ができ、自身の知識がより豊富になった。その後、私たちは大阪大学の中国人そして日本人学生と共同で発表を行い、懇親会ではさらに踏み込んだ交流をすることができた。顔を合わせた時間こそ短かったものの、時に互いに笑顔を見せるなどとても楽しく交流することができた。そしてお別れの際は連絡先を交換し合った。彼らとの再会の日を楽しみにしている。

日　付：11月29日（水）2日目
大学名：北京理工大学
氏　名：詹天予

朝7時30分に朝食を済ませ、この日の活動が始まった。午前はパナソニックエコテクノロジーセンターを訪れた。同社への訪問では多くの収穫が得られた。

同社は「地球環境との共存」を目標とし、「商品から商品へ」の循環を実現している。

ここではまず初めにスタッフから、商品の回収に関する日本の法律について紹介があり、日本では消費者が使用済家電を出す際に費用も納めており、これらは市民の責任そして義務であることを知った。これは中国とは全く異なる状況であり、この政策からは環境への重視の度合を見て取ることができた。次いで、私たちは工場のラインを見学した。そこではスタッフから鉄と非鉄の分離、プラスチックと非鉄金属の分離の方法などについて詳しい紹介があり、科学技術の重要性を感じた。その他、同社では従業員に対して細やかな気配りをしており、年に3回の健康診断を行い、騒音の従業員の聴力への影響などをチェックしている。

午後、私たちは大阪大学を訪れた。ここではまず接合科学研究所を見学した。ここの実験室は私がこれまで学校で目にしたものとは大きく違い、まるで工場のようで中には非常に大きな機材があり、より現実の問題に即した実験が行われていた。また教授からは私たちが提起した問題について詳しい回答があり、些細な部分から着手するという考え方を体感することができた。その後の大阪大学の学生とのグループ討論はとても印象深かった。私たちのグループのメンバーは皆中国語ができ、一人は中国から来た教授、もう一人は4歳の時に中国から日本に移り住んだ大学4年生の学生であった。私たちが選んだテーマは工業、経済、環境三者の関係性で、私たちは丁度午前に見学したパナソニックエコテクノロジーセンターが経済や環境の問題についてうまく対処していると思った。この他、私たちはofo、Alipay、ごみの分類、循環経済などについてブレインストーミングを行った。工業がいかに経済面と環境面を両立していくかは常に各国が抱える課題であり、今回の討論会を通じ、私はさらに認識を深めることができた。

日　付：11月29日（水）2日目
大学名：北京第二外国語学院
氏　名：張瀟

今日は活動の2日目で午前はパナソニックエコテクノロジーセンターを見学し、午後は大阪大学を訪れた。

パナソニックエコテクノロジーセンターでは、スタッフからの紹介により、パナソニックの創始者である松下幸之助氏は1960年代からすでに環境保全とリサイクルについて提起していたことを知った。そして2001年に使用済家電専門の

リサイクルを行うパナソニックエコテクノロジーセンターが完成した。次いで私たちは工場内部において使用済家電のリサイクル過程を実際に見学した。同センターでは主に、洗濯機、冷蔵庫、エアコンそしてテレビのリサイクルが行われている。そして段階的な分解ラインを通じて使用済家電は様々な再利用可能な資源に分類される。同センターを見学するまで、私は家電のリサイクルとは単純な分解を行うものだと思っていたが、リサイクルには複雑な技術や構想が存在することを知った他、パナソニックの自然や人類への責任感に基づく取り組みを感じることができた。こうした技術的な研鑽の精神と企業の社会的責任感については中国の企業も学ぶべきである。

大阪大学では世界トップクラスの技術能力を誇る接合科学研究所を見学した。私は日本語専攻のため、接合技術についての知識はなかったが、研究スタッフから設備や技術原理についての分かりやすい解説があり、私は従来関わりのなかった接合技術について多少の親しみを感じることができた。研究スタッフは私が想像していた「理系男子」のイメージとは違い、人文的な言葉で言えば、彼らは科学技術を頂点まで高めることができ、また一般の人に科学技術の偉大さと素晴らしさを感じさせることができる。

その後私たちは大阪大学の学生とグループ討論を行い、それぞれ討論の成果を発表し合った。日中の大学生生活の違いを比較し、日中のエネルギーと環境保全事業の先行きを研究し、キャリアプランを討論するなど皆の思考が大いに発揮された。この他、私自身ついに日本語を話すことへの恐れという課題を克服し、討論に可能な限り参加できたことはとても嬉しかった。討論終了後、私たちは懇親会に参加し、おしゃべりをしながら夕食を楽しんだ。

夜8時30分、私たちは名古屋に向かう新幹線に乗った。日本の駅の秩序、静けさ、清潔さはとても印象深かった。皆は案内に従い現地の習慣に則り列を作り改札を抜け列車を待った。今回の乗車体験で皆は時間遵守と秩序がもたらす効率の良さを体感した。これらは皆が良い習慣を身に付けるのに役立つかもしれないと思った。

清潔な列車は私たちを乗せ素早く目的地に到着し、こうして2日目の活動が無事終了した。

日　付：11月30日（木）3日目
大学名：北京大学
氏　名：費渝

3日目のこの日は見学が比較的集中していたが、メインは三菱電機の見学であった。三菱の名前は中国でも耳にすることが多く、この日の三菱電機の工場では同社の進んだ技術と理念にとても衝撃を受けた。

2日目のパナソニックエコテクノロジーセンターの見学では自動化の度合はそれほど高くないと感じたが、この日の三菱電機の工場では日本の工業の自動化の高さが表れていると感じた。同社のロボットは外観の美しさ、動作の精度、稼働の高効率性、スピードの速さなどが一体となっており、日本の高度に発達した技術を示していた。またさらに驚いたのは同社の E-Factory システムで、世界の高度なデータ化の時代背景において、いかに大量のデータを可視化し、それらを分析処理するかは、一企業そして一国家が時代をリードできるかどうかにおいてきわめて重要な要素である。技術レベルを向上すると同時に監督、管理システムの能力を向上する。E-Factoryは工場の生産能力の改善において非常に優秀であり、そのリアルタイムにフィードバックされるプランとシームレスに伝達されるデータにより、従来の工場におけるフィードバックと問題解決における効率の問題を解消し、同時に工場従業員による操作の難易度を大きく軽減している。三菱電機が中国と提携し、メイドインチャイナ2025の推進をすることをとても嬉しく思っている。三菱の先進技術はきっと中国の製造業に新たな活力を注入するであろう。

日　付：11月30日（木）3日目
大学名：北京師範大学
氏　名：尚楚岳

三菱の工場はとても先進的でまた人間本位であった。同社で私が印象深かったのはロボットと人のバランスで、ロ

ボットが完全に人の代わりをするのではなく、人の価値が示されていたことである。例えば組立完了の最後の行程は人が行う。その一つめの理由は人による組立はロボットではできない柔軟性があり、二つめの理由はこうした作業の場合、人の方がより効率的に作業を遂行できるからである。よってロボットの優位性を人が正確にできない部分に活用し、人の能力をロボットがコストパフォーマンス良く代替できない部分に活用する。こうしたロボットと人についての模索とバランスはとても印象深いものがあった。

もう一つ印象深かったのは、昼食会の席上私が日本側の代表者に「盗撮をする人はいますか？」と質問した際に得られた「私たちは見学に来る皆さんを信用している」との回答であった。悪影響も起こり得る強制的な禁止措置を採るのではなく、同社は他人を信頼している。私はこの点にとても感動した。

夜の箱根のホテルはとても家庭的雰囲気のある場所で、皆は一緒に温泉に浸かり、語らうなど友情を深めるとても良い機会となった。またちょうどこの日あたりから、私は他の団員についてより知ることができた。それから同行のガイドさんや先生そして私たちにこのような機会を提供してくれた各企業には心から感謝している。皆さんのおかげで、自分たちがこうした体験ができている。将来日本を訪れるとしたら、今回のような企業見学の機会はなく、きっと勉強や生活がほとんどであろう。そのため日本のハイテク技術を目にし、優秀な方々と交流できたことはとても得難いことであったと思う。

日　付： 11月30日（木）3日目
大学名： 北京第二外国語学院
氏　名： 呂嘉琦

この日見学した企業は三菱電機名古屋製作所の一社だけであった。生産ラインの見学において、私は三菱の「E-Factory」という先進的理念について基本的な理解を得ることができた。「E-Factory」のスマート制御の下、図表やデータを通じ直接工場の各部署の作業進行状況を把握することで人力や物資を大きく節約することができ、工場各部署の照明や空調の制御を通じ、無駄な電力消費を大きく減らすことができる。また質疑応答の際に、三菱電機の「E-Factory」理念は最も早く提唱され権威性もあったが、工作機械やロボット等の面で一部のライバル企業には及ばなかったことを知ったが、私はそうしたハード面よりも理論の方が重要だと思う。理論のサポートがあってこそ、ライン全体がうまく稼働するのである。設備などのハード面は、その中で作業をするにすぎないのである。設備は少しずつ改良改善できるが、全体的理論の支えがなければ何も始まらないのである。

工場内の生産ラインではそのほとんどの作業をロボットが行っており、一部の複雑でコストの高い作業を人が行っていた。将来的には工場全体として「全自動化」を目指していく。この点について、私は以前に先生から提起された「人工知能は人による通訳・翻訳業務を完全に代行することができるか」という問題を思い起こした。もちろん私の考えは不可能というものである。ロボットの学習能力は人よりも遥かに優れており、大量にデータを記録することができるが、感情がなく、異文化間の微妙な違いを感じることができないため、ぎこちない通訳や翻訳しかできない。しかし工場のラインであれば、私はロボットが完全に代行することができると思う。ハイテクそして精密加工の産業にとってもこれは大きな流れだと思う。

昼食そして箱根天成園での夕食はいずれも魚介類がメインの料理であったが、訪日代表団の関係者は常に私を気遣ってその他の料理を準備してくれていた。私自身魚介類が食べられない点が克服できずとても申し訳なく思っている。日本のような「人並み」を重んじる社会において、私は絶えず独立独歩の個人主義をいっている感じがしてとても申し訳なく思うと同時に、関係者の皆さんの私への理解や対応に心より感謝を申し上げます。

日　付： 11月30日（木）3日目
大学名： 華北電力大学

氏　名：張楠

昨晩新幹線で私たちは名古屋にやって来た。大阪と比べると、名古屋はより現代的な工業都市のような感じがした。しかも夜11時でも街はとても賑わっていた。

今日私たちは三菱電機名古屋製作所を見学した。私は今回見学できたことにとても感謝している。なぜならここは私がずっと憧れていた場所だからである。見学では、担当者から「E-Factory」の理念及び核心技術PLC（シーケンサ）によるスマート化作業とその先行きについて紹介があった。その紹介から、三菱電機名古屋製作所は現在、スマート化、省エネ及び製品デザインの面でますます成熟し、また開放的なプラットフォーム構築に尽力し、さらにメイドインチャイナ2025の実現へのサポートをしていることを知り、私たちが学ぶべきであると同時に感謝すべき存在であると思った。また見学を通じて印象深かったのは、ステーターの生産現場で、私は初めて至近距離でこうした生産ラインや人とロボットの共同作業の現場を目にした。スタッフらの手慣れた動作やデータのリアルタイム表示、厳しい業務環境における日本の生産の質への高い要求及びスタッフらの緻密な仕事への姿勢などには感服せざるを得なかった。しかし残念ながら、多くの製品が展示のみでその原理についての説明はなかった。電気関係を専攻する身として電気機械には非常に興味があるが、実際に関連知識を学べる機会はとても少ない。それでも今回の見学では自分の視野が広がり、特にスマート化やその工場での応用における重要性について改めて認識することができた。

夜、私たちは箱根温泉のホテルに到着し、本格的な日本料理に舌鼓を打ちながら親睦会を楽しんだ。衣装の関係でダンスには参加できなかったが、自分自身代表団のメンバーとこれまで以上に打ち解けることができたと思った。その後私たちは温泉に浸かり、この数日の疲れを癒した。温泉に浸かりながら、私は日本人の長寿の秘訣が分かった気がした。

今日の訪問ではたくさんの収穫があり、関係者の皆さんにはとても感謝している。

日　付：11月30日（木）3日目

大学名：国際関係学院

氏　名：姚禹

この日の私たちの最初の目的地は、三菱電機名古屋製作所であった。そこではまず初めに三菱電機の鳥居氏からの紹介に耳を傾けた。そして私はこれまで曖昧であった一つの概念についてはっきりと理解することができた。私はこれまで三菱と名の付く企業は一つの超大型の財団企業で、その下に多数の子会社があるのだと思っていたが、紹介を聞いて実際は各企業が独立していて互いには何の関係もないことを知った。長年勘違いをしていたことから、この事実には本当に驚かされた。

その後の見学では主にサーボモータの生産ラインと多くの自動化機械を見て回った。三菱電機の自動化機械については高効率、高精度、高速という言葉で形容することができる。現在の世界経済においては、高い生産効率を実現した者の利益が高く競争力も強くなる。またロボットによる自動化生産や高精度は品質の高さを保証する。こうした点もまた三菱電機が業界をリードする要因であろう。この他サーボモータの生産ラインの見学では、多くの段階において人がその作業を遂行していたが、その後の質疑応答においてその理由が判明した。それはこれらの段階の作業では人の方がロボットよりもコストが安く、さらに人の手はロボット以上の柔軟性を有しているため、製品の品質保証がより可能だからである。

午後私たちはバスで箱根へ向かった。道中では富士山の姿をはっきりと目にすることができた。山頂付近の雲は陽の光に照らされピンク色がかっていた。道中の景色を見ながら、日本の森林カバー率の高さと、同時に植生の多様性に感心させられた。これは中国では感じることのなかったものであり、一刻も早く中国でも見られることを願っている。環境面について、中国は日本に多くを学ぶべきだと思う。

夕刻私たちは山間にある天成園ホテルに到着した。知っての通り日本は衝突帯に位置しているため大量の温泉資源がある。この日は実際に日本の温泉文化を体験し、また他校のメンバーとも楽しい交流をすることができた。

日　付： 12月1日（金）4日目
大学名： 北京大学
氏　名： 劉瑞

午前の移動を経て私たちは東京に到着し、品川プリンスホテルで中国っぽくない「中華料理」を食べた後、NECの見学に向かった。同社は従業員10万人規模の大企業である。私たちは同社のイノベーションワールド内の画像認証技術について見学をした。話によるとこの技術については世界一とのことで、さらにスマート都市におけるソリューションを含む多数の製品があり、それらがメキシコやアルゼンチン等の国で都市の犯罪率の低下に役立っているとのことである。

しかし私にとって最も印象深かったのは同社の技術であり、また「Orchestrating a Brighter World」の概念そして優れた接待プランであった。日本での訪問先企業にはいずれも、効率的で魅力的な見学を実現する優れた接待プランを有しているという特徴がある。こうした角度から、日本企業は学習、教育、継承を重視していることが分かる。NECの接待プランは非常に優れていた、こうした点は非常に印象深かった。

そして丸紅で行われた「懇親会」もとても素晴らしかった。私たちは丸紅のスタッフから色々なことを教わり、世界における今後の発展の方向性や世界の変化、貿易のデジタル化、経済のデジタル化、人工知能の発展速度など多くの話題について語り合うなど真の意味で互いに楽しく「交流」ができ、自分自身とても励みになった。そしてこれまで以上に学問に打ち込み、自らの欠点や不足した部分を知らなければならないと思った。

他者から学ぶべきところはまだまだ多く、真剣な姿勢、真面目さ、責任感、寛容さを身に付けるためにはまだ先は長い。私たちはより成長し、より良い環境そしてより良い世界を作るために頑張っていかなければならない。

日　付： 12月1日（金）4日目
大学名： 北京理工大学
氏　名： 汪俊呈

この日私たちはホテルを出発してから午前の移動を経てお昼に東京へ到着した。そして美味しい昼食の後NECイノベーションワールドの訪問へと向かった。NECは顔認証技術に長けており、私たちは同社の顔認証技術、さらに同社の将来的な技術の発展の方向性について理解を深めた。

イノベーションワールド内に入ると、まず案内スタッフからプレミアムジャーニーに案内された。そこでは顔認証技術を活用した空港でのセキュリティチェック、チケット照合の全自動化について見学した。またジェスチャー認証によりテーブルでのスマート注文も実現可能とのことで、この機能には私自身とても驚かされた。なぜなら中国国内における関連の技術は進んでおらず、顔認証の正確度も不充分で、ジェスチャー認証についても早急に普及させる必要があるからであり、またNECがこれほどの先進技術を実用化させることは非常に素晴らしいことだからである。その後スタッフからは集団における受動認証について紹介があり、この技術により迷子の親御さんを素早く見つけることができ、且つ正確度が極めて高いなど、こうした点から私はNECの顔認証技術は世界一の実力を有しているのだと改めて確信した。

その後訪れた丸紅でも私は視野を広げることができた。日本の大型総合商社である丸紅の事業内容は、インフラ建設からエネルギー供給そして食品の輸出入など幅広く、国際的な提携も緊密で日本経済の発展や国際貿易提携の強化に突出した貢献をしている。私は工業を専攻しているため大型商社の運営モデルについてはあまり詳しくないが、分かりやすい解説スタッフからの紹介を通じ丸紅について基本的な理解をすることができ、それと同時に同社が今日まで積み上げた業績について心から感服させられた。

日　付： 12月1日（金）4日目
大学名： 北京第二外国語学院

氏　名： 徐穎

早朝の箱根の空気は、何の不純物もないくらいにとても澄んでいた。下駄を履いて外出し、鴨や魚に餌をやっているおじいさんに「こんにちは」と挨拶をすると、おじいさんも笑顔で「こんにちは」と挨拶をしてくれた。そして私はここの比類ない自然の美しさをカメラに収めた。

昨晩の温泉のおかげで、今日はリラックスした状態で企業訪問の旅を再開した。

午後の最初の訪問地はNECであった。解説スタッフの案内の下私たちは「未来の科学技術」を体験した。NECは世界をリードする顔認証技術を有しており、この技術が生活のあらゆる面で応用されると、私たちの生活の質はさらに高まり、リズムもより速くなる。そして私が驚いたのは、同社は物体の表面の凹凸により物体を認証することができる。例えば、形や大きさ、ねじ山が完全に同じねじでも見分けることができる。その他、NECは様々な国において認証技術を実用化しており、アルゼンチンの某都市では犯罪率が80％下がったという。しかしながらNECの同技術が成熟すると同時に、私も未来の人類について心配せずにはいられなくなった。解説スタッフが手のひらサイズ以下の翻訳機を持ちながら解説している様子を見て、私自身、自分の将来が心配になった。もし翻訳機の精度が人と同じレベルになった場合、人々はコストの高い人による翻訳を必要としなくなるだろう。

二つめの訪問地は丸紅株式会社であった。李雪蓮女史から詳しい紹介があり、沢山の専門知識に話が及びあまりよく分からなかったが、質疑応答の際に多少理解することができた。そして、その後の懇親会において李女史が私たちとおしゃべりをした際に、私たちがあまりよく分からなかった部分が多かった旨を伝えたところ、彼女は笑いながら「あと十年もすればあなたたちもこうした話をできるようになる」と言っていた。丸紅のスタッフである松田氏からもまた多くの疑問への回答を頂いた。またその間は全て日本語で交流をしたため、自分の日本語会話の鍛錬にもなった。

日　付：12月1日（金）4日目
大学名： 国際関係学院
氏　名： 辺嘉禾

この日ついに東京に到着した。かつて私の生活において映画やドラマでしか登場してこなかった東京というこの場所は、私が想像していた通り高層ビルが立ち並び、人が多く賑やかで、道行く人は忙しそうにしていた。しかし私たちが最初に訪れたNECでは心温まる体験をした。まず同社の顔認証と画像認証技術である。空港などでいかに安全性を保障した中で各審査の快適性やスピードを高めるのか。NECの高速通関ゲートはこの点を実現している。同製品のキーワードは「顔の特徴を把握する」ことであり、そのためたとえマスクや眼鏡を着けていても、同製品は問題なく使用することができる。アメリカやブラジルの空港で使用した際、比較の成功率は100%であった。プレミアムジャーニーではさらに年齢に基づき表示する広告を変えるスマートシステム、笑顔の度合を測定し顧客の商品への満足度を推測する機械など多くの目新しいものを見かけた。これらは将来的に市場に出回る製品で、これらの発明の目的は人々の生活の利便性を高めるという一点に集約される。NECはこの点をとても重視しており、中国の企業も同社に倣い、私たちの生活をより豊かにしてほしいと思う。

丸紅では講座形式で同社の事業内容や経営状況等についての紹介を受け、私はこれまで名前は知っていたがその他は謎に包まれていた同社について知ることができた。懇親会では丸紅の日本人・中国人従業員、また講座の担当者と様々な話をした。卒業後に日本企業に就職するかどうかについては皆の意見が分かれるが、それでも楽しい話し合いをすることができた。小異を残して大同を求めるとは、恐らくこういうことなのだろう。

日　付： 12月2日（土）5日目
大学名： 北京大学
氏　名： 李暢暢

私のホストファミリーは東京の郊外に住んでいて、家の中の神棚からは日本の伝統文化が感じられ、庭には小さな橋と池、錦鯉があり、調和がとれた安らかな雰囲気を醸し出していた。これには日本の中流家庭の実際の生活の有り様が感じられた。彼らは皆親切で礼儀正しく、またとても思いやりがあった。そして昔からの男性は外、女性は内という構成であった。ホストファザーは夜遅くに仕事が終わるがそれでもとても活力に満ちていて、これには偉大なメイドインジャパンを連想させられた。正にこうした無数の日本人家庭の努力によりメイドインジャパンは成り立っており、菊と刀そして匠の心が見事に融合している。

明治神宮の見学では、明治天皇の生涯を振り返りながら、明治維新において日本は欧米列強へ立ち向かい、和魂洋才の思想によりアジアにおける近代化の先駆けとなったが、その当時中国の洋務運動は挫折し、近代化への動きは多くの問題を抱え、後の改革開放によりやっと経済が発展したことを思い、この点について多くのことを考えさせられた。

日　付：12月2日（土）5日目
大学名：北京師範大学
氏　名：席靖毅

美貴さんが迎えに来た時にはすでに7～8名の団員が出発していた。

エレベーターの中で彼女は私がどこに行きたいか聞いてきたので、私は鎌倉に行きたいと答え、大丈夫かどうか、また遠くはないかと聞いたところ、「近くはないけど一緒に行こう！電車で1時間ちょっとかかる。」と答えてくれた。

電車の中で彼女は私がなぜ鎌倉に行きたいのか、お寺が見たいのかと聞いてきたので、私は興奮しながら鎌倉高校前の踏切で写真が撮りたい、そこはスラムダンクの桜木花道が立っていた場所で、その一帯の海は流川楓が毎朝バスケットボールを背に自転車で通っていた場所だと答えた。

流川楓を無邪気に好きだった高校生の当時、私は彼が生活していた場所を訪れることができるとは思ってもいなかった。

その後1時間ちょっと経過して、鎌倉高校前駅踏切で写真を撮り、海辺を散策した。

帰りの電車の中で私はラーメンが食べたいと伝え、私たちは東京駅で降り、その後JUMPSHOPで沢山買い物もした。

ラーメン屋では彼女は私に好きなラーメンを選ばせた後、コーラも注文してくれた。コーラについてはそれまでに話をしていた。

それから16時に彼女の中国語のレッスンに同行した。彼女は毎週土曜の午後にそこで中国語を学んでいるそうで、1クラスわずか10人で、高校生からおじいさんまで様々であった。先生からは学生の皆の発音の矯正を頼まれ、授業終了後にはあるおばさんから感謝のしるしとして飲み物を頂いた。先生からも本を二冊頂き、一冊は学生の作成物で、もう一冊は教材であった。将来もし中国語を教える機会がある場合は、この教材が参考になるとのお話であった。

その後一緒に帰宅した。

彼女の家は二階にあり、一階は彼女の弟さんが経営するレストランであった。夕食の際、ホストファザーはテレビでニュースを見ようとしていたが、私がアニメ好きと知り、すぐにチャンネルをコナンに変えてくれた。

夕食を終え東京タワーを見に行く際、ホストマザーはわざわざ私のためにマフラーを用意してくれた。またホストファザーは私がカイロを知らない（実はその時はカイロという日本語が分からなかった）と聞き、北京は東京よりも寒いからと沢山のカイロを私にくれた。

東京タワーの250mの展望台は整備中だったが、150mの高さから見る東京の夜景もとても幻想的で美しかった。

東京タワーを離れる際、1階のワンピースのグッズショップで写真を撮った。

「今日の日付も入れて写真撮ればいいよ。」

「ここに座って撮っても大丈夫？」

「大丈夫、ええ？」
「ここに座って撮りたい！」
「あー、大丈夫！」
夜間のホストファミリー宅一帯はとても静かであった。私たちはずっとおしゃべりをし、彼女は私と沢山おしゃべりをしてくれた。
私は彼女のことがとても好きである。次の日の朝は私を連れて相撲部屋や清澄庭園を見学し、また私が庭園内の松尾芭蕉碑の前で授業の際に習った俳句の話をしたこともあり、芭蕉記念館にも行った。
帰りの際は彼女の前で涙してしまった。この2日間親切にしてくれて、別れがとても名残惜しかった。

日　付：12月2日（土）5日目
大学名：北京師範大学
氏　名：賈羽飛
この日の朝、皆は朝食を済ませた後、ロビーでホストファミリーの出迎えを待った。その様子はまるで子供が放課後に家族の出迎えを待つかのようで、私もその中の一人であった。ホストファミリーが次々と入ってきて、私は彼らの登場への期待に胸が膨らんだ。私は早くに出迎えを受けた。事前に彼らの写真を見ていたので、彼らが入ってきたときは嬉しさの余り椅子から跳び上がってしまった。
ホテルを離れるとすぐに重山さんが私の荷物を持つと言ってくれた。この時私は、彼らの娘になったような気がした。その後私たちは駅で重山さんと一旦別れ、私は直美さんと一緒に東京タワーや浅草寺を訪れた。その道すがら私は、人生初の日本訪問だから日本の美しい着物を着たら意義深いだろうと考え、着物を着ることになった。その後直美さんは駅近くで着物を試着できる店を見つけ、そこで私が試着している際に直美さんはずっと店の人に私が中国から来た大学生でとても優秀だという話をしていた。彼女の自慢げな様子を見て私は、彼女は心から私を歓迎してくれているのだと思った。その後直美さんとほぼ同世代の何人かの女性と顔を合わせたが、彼女等もまた直美さんに私への称賛の言葉をかけていた。これには日本では赤の他人でも外国人である私に親切にしてくれるのだと感じた。その後浅草寺で写真を撮ったが、直美さんは本当に私の写真を撮るのが好きなようで道中は常に写真を撮り、私の楽しい瞬間を全て残そうとしてくれていた。
電車の中では直美さんは疲れから眠そうにしていた。これには疲れているにもかかわらず彼女は私の行きたい場所や体験したい事など様々な願いを可能な限り実現しようとしてくれているのが分かった。東京タワーでは記念品の買い物にも付き添ってくれて、さらにワンピースのグッズショップで写真も撮った。
重山さん宅に到着し一歩足を踏み入れると、そこにはこれまでの走近日企に参加した中国人学生からのプレゼント（北京オリンピックのマスコットや中国結等）が飾られていた。夕食は直美さんの旦那さんが作った和食だった。その夜は重山さん宅で彼らが世界各地を旅した際の写真を見た。彼らはすでに世界のたくさんの地方を訪れていて、様々な体験をしている他、マイカー旅行も好きで北海道等も旅している。
翌日は重山さんが自宅近くの海までバイクで私を連れて行ってくれた。出発の前、直美さんは私が風邪を引かないようわざわざズボンやマフラーを準備してくれた。母親のように優しかった。（前日、彼女の家でシャンプーをした後、髪が濡れているのを見かけた彼女は風邪を引かないかと気に掛けてくれた。）
バイクに乗る際、重山さんは、もし私が携帯電話を使うなら指先の出た手袋を使い、もし携帯電話を使わないなら指を覆った手袋を使うよう声を掛けてくれた。私は、彼らは本当に私の気持ちを尊重してくれていると思った。
お昼は彼らと一緒に中華料理を食べ、その後三人一緒にプリクラを撮ったりお土産を買ったりした。道中は常に重山さんが荷物を持ってくれて、それはまるで父親が娘の登校に付き添うかのようで、そうこうしているうちに東京に到着した。そしてお別れ前のお茶をした後、私をホテルまで送り届けてくれた。彼らはそこで先生方とも挨拶を交わし、最後に私の手を取り来年また日本に来てねと声を掛け、私はそれに「はい」と答えた。

全てがあっという間で、私がしっかりお別れをしなければと思った時には彼らはすでにドアの向こうに消えていた。ホテルに戻った私は、なぜしっかりお別れができなかったのかと涙が溢れた。

重山さんや直美さんは当初私のことをゆふえちゃん（中国語の名前の発音をもじったもの）と呼んでいたが、ふえが発音しにくいことから、彼らは私をゆちゃんと呼んでいた。今でも私の頭の中は彼らのゆちゃん、ゆちゃん・・・という声で一杯になっている。

日　付：12月2日（土）5日目
大学名：北京理工大学
氏　名：王天竹

ついにホームステイの日がやって来た！数週間前からホストファミリーの「妹」とラインを交換し色々な話をしていたので、すでにとても馴染みがあった。

朝、ホールで並んで座っている時、まるで自分たちが「養子」にもらわれる子どものようだと冗談を言い合っていた。だが「お父さん」は私が5番目に「養子」となったことをはっきり覚えていた、これには私は思いも寄らなかった。ホストファミリーと初めて対面し、すべての不安は一瞬にして消えた。まるで長年の知り合いのような感じがした。

1時間半ほど電車に乗り小田原（全団員の中で恐らく一番遠い場所でのホームステイ）に到着したが、突然電車酔いになってしまった。お昼にラーメンを食べる際、私は日本人が食べ物を無駄にしないことを知っていたので、我慢してそのラーメンを食べ切ろうとしたが、「お父さんとお母さん」は私の具合が悪いことを察知し、無理して食べなくても大丈夫だと声を掛けてくれた。その後ホストファミリー宅に到着するとまず私を休ませてくれた。この時私はとても感動し、まるで自分の家に戻ったかのようであった。

ここまで書いて私は出来事だけを羅列して書いていることに気が付いた。しかしそれは書きたいことが多すぎて、またあまりに印象深かったからだと思う。小田原はドラえもんやのび太が住んでいる場所にとても良く似ていて、まるで自分がアニメの世界に入ったかのようであった。緑の田畑、こじんまりとした家、自転車でダム近くを走り、手にはどら焼きを一つ、遠くには山が連なり、陽の光が山の間から見える。その瞬間、私は「お父さん」の夢がなぜここで家を持つことで、東京に住むことではないのかを理解することができた。日本の田舎は同じ田舎とは言え中国の農村とは大きく異なっている。ここの清潔さ、快適さ、温もり、便利さは忘れることができない。

私たち「一家」がテーブルを囲むと、床も暖かく、心も温かくなった。

日　付：12月2日（土）5日目
大学名：北京第二外国語学院
氏　名：徐穎

朝、私たちは父母の出迎えを待つ子どものようにホールで座り、ホストファミリーとの対面の情景を思い描いていた。実はその前にちょっとしたエピソードが生まれた。朝食を済ませ友人とお手洗いに行ったのだが、その後携帯電話が見当たらなくなり、レストランに置いてきたと思い、ウエイターに話をし、彼らはすぐに探してくれたのだがレストラン内には無かった。その後私はお手洗いで自分の携帯電話を見つけ、すぐにウエイターに伝えたところ、彼はとても優しく「よかった、気をつけてね」と声を掛けてくれた。その瞬間、私はとても温かい気持ちになった。

ホストファミリーが次々と会場に到着し、男の子と女の子が入ってきたのを見かけた時、私のホストファミリーがやって来たと分かった。なぜなら事前に澄川さんからお子さんの写真を見せてもらっていたからである。こうして私のホームステイが始まった。

澄川さんはまず地下鉄に私を案内してくれた。切符の買い方から改札の通り方まで丁寧に教えてもらい、お子さんからも傍で教わった。それから私たちは有名などら焼きを食べ、温かい紅茶を飲み、その後とある変わったお店に向

かった。そこでは着物を身に着けたイタリア出身の店員に案内され、和風の特徴的な店をまわり、店員の紹介を聞きながら伝統的な食べ物などを試食した。午後はデパートに行き、ドーナツを食べミルクティーを飲んだりした。子供たちが遊んでいる間、私は澄川さんと奥さんと一緒に沢山おしゃべりをした。その際彼らは話すスピードを抑えて、私が分からないことについては分かるまで何度も解説してくれた。

澄川さん宅に戻った後、澄川さんと奥さんはたこ焼きを作ってくれた。このたこ焼きは私がこれまで食べた中で一番美味しかった。またお子さんからも食べ方を教わった。その後お子さんたちはピアノの練習をした。それから私たちは一緒に本を読み、ゲームをしたりした。奥さんはわざわざ和室の寝床を作ってくれた。澄川さんは、かつて中国において中国人の世話になったことがあることから、その恩返しをしているとのことで、私は彼が受け入れた6人目の中国人学生とのことであった。

私は、彼らとのお別れがきっと辛くなると思った。

日　付：12月2日（土）5日目
大学名：華北電力大学
氏　名：蒲曾鑫

朝、東京の美しい陽の光を浴び、温かな夢路から幻想的な大都市へと徐々に意識が移った。ホテルニューオータニの高層階の客室において東京の朝から盛大な歓迎を受けたような、また信じられないような感覚がした。

午前9時、私たちは準備を整え、各ホストファミリーからの出迎えを待った。この時間はとても面白く、中国におけるテスト直前の時のように、ホストファミリーとの面会に備え、どきどきしながら覚えたての日本語を練習していた。

私のホストファザーはHayatoと言い、この日は彼が迎えに来た。丁度年に数日の皇居の一般公開日だったため、私たちはとても貴重な見学をすることができた。皇居はお城のようで、内部はとても静かで、建物は簡素、清潔でさらに古風であった。

道中、私はその場で歴史的観光地を見に行くことを決め、ホストファザーはそれらの場所の歴史的意味合いを紹介し、私が理解をしたかどうか確認をしてくれた。私は参禅といった行為は必要なく、ただ見てみたいと伝え、いくつかの場所を見て回り、私は彼に敏感な問題に触れない程度に多少知りたいと伝えた時にもHayatoさんは理解を示してくれた。

次いで私たちは銀座や浅草寺を見て回り、そしてHayatoさん宅に戻った。夕食はたこ焼きがメインだった。私たちの意思疎通は想像していたよりもスムーズだった。私の日本語は拙かったが、互いの努力でそれらの障壁を乗り越え、私たちは日中の教育の違いや大学生活等について沢山おしゃべりをした。またHayatoさんの娘さんのKanamiさんは現在高校生とのことで、私は彼女に《赤壁の戦い》について解説をした。こうした感覚はとても素晴らしいものであった。

日　付：12月2日（土）5日目
大学名：国際関係学院
氏　名：賈蘇元

机のある場所が寒かったので、ホームステイが終わりホテルに戻ってから5日目の感想を書いている。

この日は天気がとても良く、私たちは4万歩以上歩いた。ホストマザーの宋さんには赤ちゃんがいるため、私たちは早めにホストファミリー宅に戻った。

日中、私たちは浅草に行き、そこでは大吉を引いた。その後東京スカイツリーに行った。スカイツリーはとても高かった。私たちは色んな場所を歩き、また色んな話をした。受講している授業から道路になぜゴミ箱がないのか、大学入試から中産階級までと、一見何の関連もない話だが、それでも私たちは不思議なほどおしゃべりを続けることができた。

その日の夜、私たち3人はソファに座り、テレビを見ながら雑談をした。
私が普段家にいる時と同じであった。

日　付： 12月3日（日）6日目
大学名： 北京大学
氏　名： 費渝

ホームステイ2日目。
今日はJohnさん宅での二日目で、マンション近くでサンドイッチを食べてからこの日の活動を始めた。
日中の予定は浅草寺、東京スカイツリーそして銀座であった。浅草寺を選んだ理由は、日本に来る前から浅草寺について耳にしたことがあったからだが、実際にそこを訪れると想像していたのとは多少違っていて、その沢山の人だかりや商業化された街並みは成都の寛窄巷子や北京の南鑼鼓巷を思い起こさせた。観光地として過度に開発され、商業的雰囲気が通り全体に満ちていて、寺院や神社特有の静けさや神聖さはほとんど感じられなかった。一方、前日に東京タワーへ向かう途中に通りかかった小さな神社にはそうしたものが感じられた。ホストファミリーからのお話によって私は、日本には八百万の神という観念があることを知った。これは中国でいうところの万物には神が存在するというものと似ている。何気ない道路に設置された階段が高台に通じ、そこにある誰一人いない神社からは荘厳で神秘的なものを感じた。ホストマザーの中小司さんから水を使った参拝の作法を教わり、そして願をかけた。私の願いを叶えてくれるだろうか。
浅草寺の後はスカイツリーに行った。スカイツリーは浅草寺からさほど遠くなく、東京で最も高い高層タワーを至近距離で見た時はとても衝撃的だった。ただ、そこは人が多く、チケット代も高かったので上層階に行くことは諦めた。午後は銀座で少し買い物をして、長い間買いたかった傘やアシックスの新製品の靴を手に入れることができた。Johnさん一家とお別れした後、夜には他の団員と一蘭へラーメンを食べに行った。一時間近く並んだが、食べた後には並んだ甲斐があったと思った。

日　付： 12月3日（日）6日目
大学名： 北京師範大学
氏　名： 王月

西山さんから早めに休むよう言われたおかげで、ホームステイの二日目は早くに目を覚ますことができた。西山夫人は豪勢な朝食を準備してくれて、私たち三人は食事をしながらテレビを見るなど、家庭生活の雰囲気を体験した。
9時半に私たちは地下鉄に乗り浅草寺へ向かった。西山さん曰く、日本に来て浅草寺に行かなければ日本に来たとは言えないとのことであった。これには北京に来たら故宮へ行かなければならないというのに近いものがあった。浅草寺に到着後、目に映り込んだのは辺り一面の賑やかさで、そこには外国人観光客が沢山いた。雷門をくぐると、西山さんはおみくじを引かせてくれた。幸運にも私は大吉を引くことができた。それを見た西山さんはとても嬉しそうに、おみくじの内容を中国語で説明してくれた。
私は日本の古本屋に行きたかったため、西山さんは午後に私を秋葉原のブックオフへ連れて行ってくれた。ブックオフには沢山のフロアがあり、あらゆるタイプの書籍が置かれ、作家の名前の順番で商品が並んでいた。私は何冊か手に取ってみて、日本の古本は価格がとても安く、本自体も8割方新品に近い状態だと思った。中国にもこうした優れた古本市場が現れ、書籍のリサイクル利用が実現することを願っている。
ホームステイの時間はあっという間で、夕刻にはホテルへと戻らなければならなかった。西山さんは若者の私が渋谷といった若者の街へ行かないのはもったいないと思い、私を渋谷へ連れて行ってくれた。買い物をする時間は無かったが、久しく耳にしていた忠犬ハチ公像を見ることができて、とても満足だった。

ホテルへ戻る地下鉄の中で、私は多くの人が読書をしているのに気が付いた。しかも皆がブックカバーをし、読書の動作もとても丁寧だった。私は日本人のこうした書籍を大切にする態度が、正に古本屋の大規模化を実現する要因の一つになっていると思った。

日　付：12月3日（日）6日目
大学名：北京理工大学
氏　名：丁楷軒

さよならを口にした瞬間、様々な思いが混じり、涙を抑えるために私は素早く後ろを振り向き静かに顔を上げた。

この二日間の感想をまとめるとしたら、それは感動、感謝そして感激である。

感動。それは日本に来る前から始まっていた。おかあさんは中国語で1000文字以上のメールを私に送り、彼ら菊地さん一家の状況や彼らの中国との縁について紹介してくれた。長男の貴之さんは数少ない中国語を学ぶことができる高校を卒業し、さらに中国人のガールフレンドがいて、二男は中国の国宝のパンダから名前を付けるなど、菊地さん一家と中国はとても深い縁で結ばれていた。

感謝。彼らにとって全く面識のない外国人である私は、今回彼らから本当の家族の一員として扱われるとは思ってもいなかったが、菊地さん一家は私に本当に良くしてくれ、それは私自身が申し訳なく思うほどであった。お別れに記念写真を撮る際、おかあさんの「家族一緒に写真を撮ろう」の一言は、忘れることのできないものであった。私は心から菊地さん一家に感謝している。

感激。菊地さん一家のみならず、今回の訪日活動に携わった日中経済協会や中日友好協会、そして協賛の各日本企業に対して、間近で日本を体験し、日本を感じる機会を提供してくれたことに感謝している。百聞は一見に如かず、書籍上の知識には限界があり、本質を知るには自ら実践しなければならない。私は日本での体験をありのままに周囲の人へ伝えたいと思う。

ありがとう！

日　付：12月3日（日）6日目
大学名：北京第二外国語学院
氏　名：馬恵琳

今日はホストファザーやホストマザーと一緒に沢山の場所を巡った。朝食後、子供たちとおしゃべりをしたが、日本の子どもは中国の子どもより素直で可愛いと思った。彼らの目を通じて親切さと多少のはにかみ、そして礼儀正しさが伝わってきた。彼らからはジェンガの遊び方を教わった。日本、特に私のホストファミリーでは子どもへの教育がとても工夫されていた。子供たちが好きなゲームは頭脳が鍛えられるもので、ゲーム自体は難しいが子供たちはそれが好きで、大人でも楽しく遊べるものである。

今日は東京スカイツリーと浅草寺に連れて行ってもらった。昨日の夜、ちょうど東京で最も有名な観光スポットの1位が浅草寺で、2位がスカイツリーとの内容を見ていた。実際にそれらの場所を訪れ、浅草寺やスカイツリーは流石に外国人が好む観光スポットだと思った。この日は天気がとても良く、スカイツリー内部の見学ルートはとても合理的で、沢山の有名なオリンピック競技施設や両国国技館等を見ることができた。浅草寺は人がとても多く、周辺には特徴的な軽食やお土産などが売られていた。浅草寺の建物はとても雄大で、赤と緑が交わり、静けさと情熱といった二つの異なる雰囲気が共存したような感覚で、それは実際に目にしなければ分からないものであった。東京で最も古い寺である浅草寺は独特の魅力があった。しかし私が柏村さんに多くの外国人がこれらの場所を好んでいることへの意見を尋ねたところ、彼は浅草寺や東京スカイツリーには特別なところはなく、とても綺麗ではあるが、これらの場所がなぜ外国人に人気があるのか分からないと言っていた。

この他私たちは、企業や仕事、学校や学習、子供の教育等多方面の話題について意見を交わした。その中には、中国人の観念として日本もきっと同じだろうと思っていた事が実際はそうではなかったという事もあった。だからこそ、些細な点における交流でも意義深いものがあると言える。

日　付：12月3日（日）6日目
大学名：華北電力大学
氏　名：藍文鴻

今日は影山さん一家と過ごす二日目でまた最終日であった。ホームステイの時間はあっという間だった。東京タワーや浅草寺を巡った後、影山さんはわざわざ私を皇居に案内し、日本の歴史や徳川幕府による数百年の江戸（東京）統治、その後の明治維新、遷都等の興味深い出来事について紹介してくれた。私は自身の知識が深まったと同時に、影山さんの歴史の知識は素晴らしく、日本の基礎教育はとてもしっかりしていると思った。しかも今朝起床した際に、まさこさんの旦那さんへの気配りや家庭を重んじる態度が感じられた。日本という国は実際には非常に伝統的な家庭を重んじる観念の上に成り立っていると思った。私は現在の欧米を主とする離婚主義や独身主義よりも、日本の伝統的な家庭といったものの方が文化の維持や継承に適していると思う。私は民族の繁栄により有利な日本の伝統的観念や家庭理念に賛同している。

この他、皇居の日本における崇高な位置付けや天皇陛下の日本のシンボルとしての位置付けについて知ることができた。丁度昨日、NHKのニュースで天皇陛下の退位についての報道がされていた。これには影山さんも驚いた様子で、以前の昭和や現在の平成の繁栄時期に思いを馳せていた。

この二日間の影山さんとの交流を通じ、私自身彼の学識や経験の豊かさを知り、さらに沢山の収穫が得られた。ありがとう影山さんそしてまさこさん！

日　付：12月3日（日）6日目
大学名：国際関係学院
氏　名：辺嘉禾

「一、二、三･･･」朦朧とした中、誰かが日本語で物を数えている声が聴こえ、ベッドから起き、階段を上がりドアを開けると、そこでは娘さんが日課の数学の勉強をしていた。ホストマザーは申し訳なさそうに私の睡眠を妨げてしまったか尋ねてきた。これは私の東京でのホームステイの二日目の始まりであった。驚いたのは、昨晩は和食だったのに、この日の朝は完全な洋食だったことである。共通点と言えば、あっさりした味付けで、野菜も多かった。これこそが日本人が一般的に体型を維持できている理由の一つなのだろうと思った。

ホストファミリーと一緒にバスや電車に乗り街を歩くといった事は今回の訪日団に入る前には想像もしたことが無かった。しかしそれは確かに実現し、私もそれを心から楽しんでいた。佐田さんの奥さんとお土産の相談をしたり、娘さんと同じイチゴクレープを分け合ったり、たとえ言葉だけでは相手の意志を完全には理解できないとしても、私は彼らが心から私と交流していることを感じていた。

かつての私の考え方では、彼らがなぜ私にこれほど良くしてくれるのか分からなかっただろう。だが今では、両国関係の好転への願いの一種の表れなのではないかと思っている。

竹下通りは授業で習ったとおり、人がとても多く、素敵な商品が店の外にまで並べられていて、またそれらがスペースの節約のため何段にも積み上げられ、人形のようなメイクをした女の子たちがピンクのマフラーを指差しておしゃべりをしていた。この時私はまるで漫画の世界に足を踏み入れた感覚がして、ホストファミリーの娘さんの小さな手を握りながら時間が止まってほしいと思った。しかし楽しい時間はあっという間に過ぎ、ホテルでお別れをする際、娘さんは私のかばんの猫のアクセサリーに向かってまたねと言った。猫のアクセサリーは沢山あるが、私には彼らと再会できる機

会はあるだろうか。

日　付： 12月4日（月）7日目
大学名： 北京師範大学
氏　名： 尚楚岳

今日はスケジュールが最も詰まっていた一日だった。幸い、前日までのホームステイで休息をとることができていた。

みずほ銀行や松本楼ではいずれも時間の圧迫感を感じた。銀行側の解説担当者が二回続けて私たちに「いかがでしょうか」と訊ねてくれたが、私は実を言うと彼らともっとたくさん交流をしたかった。私は彼らと交流をし、彼らのような優秀な人々に会えたことへの嬉しさや沢山の素晴らしい企業を見学できたことの喜びを伝えたかったが、時間の都合でそれは叶わなかった。

松本楼でも同様で、お話の内容はとても興味深く、孫中山氏に関する情報を知り、日中の友好を感じ、とても素晴らしいと思った。そしてお話の最後の「日中両国がこのように友好関係を継続してほしい」の一言は、本当に私の胸を打つものであった。私たちの願いはまさにこのとおりである。

大使館では、中国人の日本語学習者として日本に来たからにはここを訪れなければならないと感じた。活動そのものは多少物足りなかったが、その他の企業と比べてもやはり帰属感が感じられた。

訪日前の面接の際に私は日本の大学について知りたいという話をした。そしてこの日は今回の訪日で二つめの大学との交流があり、期待に胸が膨らんだ。大阪大学や中央大学は国立、私立の大学の中でも優秀な大学で、これらの学生との交流では言語能力が鍛えられる他、自分の思想や思考能力も高まり、とても多くの収穫が得られた。

明日には帰国となるが、今でも今回の旅が終わることへの実感がない。旅や学習の過程はとても楽しく、多くの人が体験できないようなこうした機会が得られたのは本当に嬉しかった。今回経験した様々な事への印象は時間と共に薄れるかもしれないが、その場所に思いを馳せればきっと特定の人や物事、そして経験や言葉などが思い出されるであろう。

日　付： 12月4日（月）7日目
大学名： 北京理工大学
氏　名： 王楚婷

今日はスケジュールが詰まっていた。朝はみずほ銀行を訪れ、中国の銀行と異なる部分を沢山目にした。例えば顧客用窓口は厚いガラスで仕切られることなく、顧客と直接対面する形の対応をしていた。また二階の預金・引き出し等の短時間で済む業務についてはスタンド式の対応で、三階の株式や資産運用といった時間の長い、しっかりした話し合いが必要な業務については座りながらの対応をするなどとても細やかな対応がされていた。こうした細やかさは他にも沢山あり、用紙の記入場所には利便性を高めるため計算機が置かれていた。また銀行の副頭取のお話を聴き、みずほ銀行の日中友好への積極的姿勢や私たちの交流訪問活動への大いなる支援といったことについて強く感じることができた。その後の従業員との交流では、みずほ銀行は人材登用において特に専門分野を重視しているわけではなく、それよりも表現能力を重視しているため、様々な専門分野の人材を集めているとのことであった。これには私自身将来のキャリア構築においてより多くの選択肢が生まれたような気がした。

お昼は松本楼を訪れ、孫中山氏が日本滞在期間中に彼と意気投合した沢山の日本の人々の協力を受け、孫中山氏が亡くなった後も梅屋庄吉氏は孫中山氏の思想や遺志を受け継ぎ、さらに自ら出資し孫中山氏の銅像を4体作り中国各地に寄贈したといったことを知り、日中間の友好の歴史について強く感じることができた。

中国大使館に到着すると帰国をしたような感覚がした。公使の歓迎を受け、私は北京理工大学の代表としてこの数

日間の感想を述べた。その感想を通じて、この数日間があっという間だったことを改めて感じ、日本の街や日本という国、訪日代表団、団員そしてホストファミリーの皆との間もなく訪れるお別れへの名残惜しさを感じた。私は今回の旅を忘れない。

日　付：12月4日（月）7日目
大学名：北京理工大学
氏　名：詹天予

午前、私たちはみずほ銀行を訪れた。同銀行の特徴はワンストップ式サービスである。預金・引き出しから資産運用まで全て同じ階で行うことができる。銀行側からはさらに、銀行が行う個人資産保管業務について紹介があり、私たちは金庫の見学を行った。この業務では各顧客は自身の重要な物品を保管することができ、他者はそれを開ける権利はない。金庫はそのサイズにより手数料が異なるが、料金自体はさほど高くはなく、一般の中流家庭が賄える程度である。しかもこの金庫室の外壁は鋼鉄でできていて、地震や火災等のあらゆる自然災害にも耐えられる。こうした点にも日本企業の人間本位の理念が示されている。その後、同銀行の従業員と交流を図り、日本企業の一部中国や欧米とは異なる文化について知った。入社後従業員は共通の研修を受けるため、人材の採用の際日本企業は応募者の専門分野が自社に合っているかについてはさほど重視しない。この期間中、早く企業の文化に馴染めるよう従業員の対人関係を広めている。企業の従業員への福利も充実していて、欧米企業のようなリストラ等の残酷な現象は起きない。但し、配置転換を行い、従業員が各業務のプロセスを理解できるようにしている。私たちと今回交流をした従業員はみずほ銀行で10年近くまたそれ以上勤務しているベテランであった。彼らは企業への強い帰属意識や愛着を持っている。しかしながら、こうしたプレッシャーの比較的少ない業務環境は従業員を現状に満足させ、成長への前向きな姿勢を拒むのではないか、この点については依然として考えなければいけない問題である。

午後、私たちは中央大学を訪れた。中央大学では日本人学生や韓国人留学生と共に自分の両親が年老いた際に自ら面倒を見るか、それとも施設に預けるかというテーマについて討論を行った。異なる国の学生による討論だったが、有意義な討論ができ、私自身思想的そして文化的な刺激を受けることができた。今日は収穫の多い一日であった。今回の活動も終わりが近づいてきた。東京での時間を大切にしたいと思う。

日　付：12月4日（月）7日目
大学名：華北電力大学
氏　名：張楠

今日は訪日活動最終日の前日で、スケジュールが詰まった、また有意義な一日であった。

初めに私たちはみずほ銀行を訪れた。同銀行はみずほ金融研修セミナーの開催以外にも中国の金融界における人材を多く育成しており、さらに中国営業推進部を設けるなど、日本企業の対中投資の支援や中国の関連機関との交流を促進している。みずほ銀行の中国人スタッフとの交流を通じて、私はインフラ建設において銀行の果たす役割や日中両国の異なる国情において、銀行が直面しているチャンスや課題といったものについて知ることができた。私は金融を専攻しているわけではないが、この日の紹介は私にとっての新たな世界の扉を開くもので、金融や私たちの日常生活について新たな認識が得られた。それから私たちは二階や三階の業務フロアさらに金庫室にも入ることができた。そこはまるで映画で見るような感覚がした。

次いで、私たちは日比谷松本楼で昼食をとり、さらに梅屋庄吉氏と孫中山氏との間の革命の故事についてお話を伺った。梅屋庄吉氏は自身の危険を顧みず、常に孫中山氏の革命事業をサポートし、「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて支援す」の盟約を守り続け、自身の全財産を孫中山氏の革命事業に捧げた。現在、松本楼の社長や梅屋氏の親族らは依然として先祖の遺志を受け継ぎ、日中友好に尽力している。松本楼にはさらに宋慶齢女史がかつて愛

用したピアノが展示されている。

その後、私たちは中国駐日大使館を訪れ、郭燕公使及び大使館のスタッフと面会した。そして訪日団の6大学の代表者からの発表があり、私は彼らの発言内容から改めて今回の交流活動を振り返り、沢山の新たな視点に気付かされるなど多くの収穫が得られた。質疑応答のコーナーでは、郭燕公使は高級外交官としての思考や対応能力を示し、鋭い問題に対しても完璧な対応をされていた。また郭燕公使からは私たちが日中友好の架け橋となり、祖国の発展ひいてはアジアの平和と発展に寄与してほしい旨のお話があった。

最後に私たちは中央大学を訪れた。そこでは45分間のグループ討論を行い、国情や政策の違いにより、日中両国では就職時に考慮するポイントに大きな違いがあることを知った。例えば日本では収入の格差が比較的小さく、福利面をより重視しているなど、こうした点は日本の現代社会に存在する問題を間接的に反映している。

この日のスケジュールは詰まっていたが、そうした中私たちのお世話をしてくれた関係者の方々にはとても感謝している。収穫が多く、忘れられない一日となった。

日　付：12月5日（火）8日目
大学名：北京理工大学
氏　名：王天竹

Finally, time to go.

早朝、スーツケースを手に部屋の入口に立つと、窓の外の草木は青々と茂り、これまでの沢山の出来事が思い返され、今日が最終日だとは信じられなかった。ホテルニューオータニでの三日間、私は三つのレストランでそれぞれ朝食をとったが、そのサービスの素晴らしさは忘れ難いものがあった。出発前、幸いにも同ホテル地下のエコ施設を見学することができた。そこでは汚水の処理率が70%に達している（一企業としてホテルニューオータニは、ゲストのサービスへの要求を満たすと同時に環境への配慮という社会的責任を果たしている）。

離れがたいと思いながらも、歓送会は予定通りに始まった。出迎えの列を作る際、私は敢えて一番前に並んだ。それは「お父さん」に最初に見つけて欲しかったからである。私の「お父さん」は最初に会場を訪れ、私を見かけるとまず初めに私の胃の状態を気遣ってくれた。実は私はこの時からすでに涙をずっと堪えていたが、私たちが国歌を歌った時には堪えきれずに涙が溢れ、しっかり歌うことができなかった。中国と日本の関係は微妙で、私たちの間には多くの政治的そして歴史的なわだかまりが存在する。しかし今この時、私たちには何の違いもなかった。私たちは異なる言語を話し、異なる背景を有しているが、今この時、私たちは共通の素晴らしい思い出を持ち、心の中には愛や寛容さがあり、私たちは固定観念を超越し互いを祝福していた。

また会いましょうと言いながらも、今回のお別れ以降、私たちは遠く隔てられ、再会はとても難しいことは分かっていた。私は何度も振り返り、そして手を振り、今回の素晴らしい思い出をしっかりと脳に刻んだ。私は飛行機の中でこの文章を書いていたが、また目頭が熱くなってしまった。さようなら日本、さようなら私のホストファミリー、私は「互いにどれだけ離れていても、いつかまた再会できる」ことを信じている。

日　付：12月5日（火）8日目
大学名：北京第二外国語学院
氏　名：馬恵琳

今日は私たちの活動の最終日で、皆は互いにホームステイの際の状況を語り合っていた。私は昨日の時点でもう柏村さん一家を名残惜しく感じていた。彼らは皆仕事や勉強に忙しい中、今回週末の時間を使い最大限私をもてなしてくれたことに、私はとても感動した。ホームステイ生活は一生忘れられないものになった。帰国の途にある今、それらを思い起こすと目頭が熱くなってしまう。感激や感動が交わった気持ちであった。この日の歓送会には彼らは来られ

なかったが、私は内心彼らが来られなかったことへの多少の安堵があった。もし彼らが来ていたら私はきっと自分の気持ちを抑えることができなかっただろう。歓送会では訪日団団長や日本商会、中国駐日大使館の代表者から挨拶があり、私たち各大学の代表者もそれぞれの感想を述べた。日本語を専攻する大学三年生の私は、今回日本を訪れ依然として自分の日本語のレベルが不充分だと何度も思わされた。自分の言いたい事を流暢にすべて伝えられず、総括の時間も短かった。原稿を事前に書いていても、壇上に立ち発表する際には知らぬ間に原稿の内容とかけ離れてしまった。

歓送会で私たちは『違いはない』の合唱を披露した。歌っている際、その場の雰囲気が良かったのか、思わず自分の高校時代と現在の自分を思い起こし、またホストファミリーからのおもてなしに思いを馳せ、色々な思いが交錯し、自分自身これまで以上に勉学に励まなければと思った。国と国との関係は実際に人と人との関係に似ている部分が多く、互いに真摯に向き合い、そして理解し合い交流すれば、ホームステイ同様たとえわずか二日間の時間でも人の一生に影響を与えることができるのである。ましてや日中両国は長い付き合いがあり、私たち言語を学ぶ人間から交流や理解を始めることで、日中の友好に大きく貢献できると信じている。

日　付：12月5日（火）8日目
大学名：華北電力大学
氏　名：宇文天悦

今日は日本での最終日である。私たちはこの数日間宿泊したホテルニューオータニのエコ施設を最後に見学した。同ホテルはエコ対策が素晴らしかった。快適なホテルで優れたサービスを受けると同時に、私は常々同ホテルは如何にして優れたサービスの提供と同時に省エネや環境保全対策をしているのだろうと思っていたが、今日の見学でその方法が分かった。まずホテルニューオータニの地下三階には独自の発電設備があり、この発電設備は電力の供給と同時に水蒸気を生み出し、水蒸気は加熱に利用され、エネルギーの利用度合を高めている。またホテル内の多くの厨房から生まれる大量の廃水や生ゴミも処理の後に再利用されている。現在多くのゴミ処理工場では専門的に回収利用をしていることを知っているが、ホテルの地下にこれほど多くの処理施設があるのには驚かされた。厨房廃水は処理の後、ホテル内の庭園への灌水やトイレに使われ、生ゴミは有機肥料としてホテル内の植物に使われたり農家に提供されたりするなど、ホテルニューオータニではリサイクルによる環境保全を実現している。

ホテルの見学の後、お昼に私たちは歓送会へ参加をした。充実した8日間のスケジュールはあっという間に終わり、日本訪問も終わりの時が近づいていた。しかしこの8日間の出来事を思い返すと、本当に多くのことを学び、悟ることができた長い旅だと感じ、学んだ沢山の知識や見聞についてはじっくりと吸収する必要があると思った。このような日本の有名企業や大学への訪問、そして学生や企業の従業員またホストファミリーとの交流による相互理解といった貴重な機会が得られたことにとても感謝している。歓送会の席上では訪問先企業の従業員や沢山のホストファミリーの姿を見かけ、皆は国歌を歌い、私は彼らからのこの数日間の指導やサポートに心から感謝をした。私は今回、知識や文化そして習わし等様々な面で多くの収穫を得ることができた。

日　付：12月5日（火）8日目
大学名：国際関係学院
氏　名：査懿童

時間が経つのは早いもので、8日間はあっという間に過ぎてしまった。ホテルニューオータニで最後の朝食を済ませ、私たちは同ホテルのスタッフの引率の下、エコ施設の見学をした。仮にこれほど大きなホテルにおいて資源の再利用がされなければ、それは多くの資源の浪費につながる。ゲストに素晴らしい宿泊環境を提供すると同時に環境対策を行うのが、真に優れたホテルだと言える。

午後には日本を離れなければならない。歓送会では沢山のホストファミリーが多忙の中私たちの見送りに来てくれた。私たちが総括をしている時には、その様子を写真に撮ったり拍手をしたりと、まるで私たちは彼らの子どものようであった。私のホストファミリーは仕事の関係で歓送会には来られなかったが、彼らにはとてもお世話になった。わずかな間だったが、本当の家族のような気分が得られた。お別れの時はやはり訪れ、ホストファミリーの方々は私たちをバスの下まで見送り、その時多くの団員は涙を見せていた。私は、自分も泣いてしまうことを恐れて歩を速めた。これが縁という物なのだろう。山内さんは歓送会に来られなかったが、私は彼ら一家の幸福と健康、そして葉子さんと洋平さんが仲睦まじく、まだ喋れない楓子さんが早く大きくなり、元気で綺麗な女の子になることを願っている。その時あなたは自分が1歳の頃に、中国の女の子が家に来たことをかすかに覚えているかもしれない。

学生たちの観た日本

大学名： 北京大学
氏　名： 劉瑞

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本人のマナーの良さは有名であり、今回の訪日活動を通じて私は日本の文化におけるマナーへの重視度合について強く感じることができた。私たちが毎回日本の人々と顔を合わせると、彼らはお辞儀や挨拶をし、「すみません」、「ごめんなさい」といった言葉を常々口にし、お別れの際には彼らは終始手を振ってお別れをしてくれた。

また今回の訪日活動全体を通じて私たちは多くの企業を訪問したが、各社それぞれ受入の体制が確立されていて、さらに手順や時間など細かな部分まで配慮され、私たちをA、Bの二班に分け時間の節約や効率の向上を図り、すべての見学ポイントにも相応の解説があり、ひいては些細な通路においても解説があった。また多くの企業では解説を聴きやすくするためイヤホンが準備されていた。

こうした他人へのマナーや思いやりについては、ホームステイの際にも感じることができた。私の話す事について彼らはとても尊重してくれ、またホストマザーが朝早くに起きてお昼に外出先で食べるお弁当の準備をするなど、こうした事に私はとても感動した。

日本には「他人に迷惑をかけない」という有名な観念があり、これは彼らの日常生活において実際に体現されている。一般家庭のゴミの分類や使用済家電の回収工場における汚染対策処理などはこうした観念の表れである。

日本という国はとても美しく、沢山の長所や私たちが学ぶべき点がある。私は今回学んだことを継続し、また家族や友人にも伝えていきたい。

大学名： 北京大学
氏　名： 高遠

テーマ： 4.日中間の交流

12月4日の午後に中国駐日大使館において郭燕公使等との交流や報告をした際に、とある日本語学部の学生が「異文化」交流という言葉を使っていた。「異文化」とは即ちdifferent cultureであり、文化的ルーツについては日中共に源を同じにしており、現段階においては「多文化間交流」という言葉の方が適切でまた意義深いと思う。

今回の「走近日企・感受日本」における今日までの7日間の「訪問」を通じ、日中双方には互いにサポートできる部分が沢山あると思った。例えば日本側には私たちが学ぶべきところが沢山あり、中国側における電子商取引、共有経済などは非常に活力を有している。また日中関係、特に一般市民の見方については私自身大きく衝撃を受けた。日本企業における企業文化構築への重視と企業の活力を刺激するための努力等については、日本を訪れる以前は全く分からなかった。そして日本の一般市民の中国への態度について言えば、ホストファミリーからの好意を受けると同時に、一部の店員の「差別対応」も垣間見られた。加えて今回の訪日で私自身沢山の驚きや理解を得ることができた。それらは一部の面における私の認識の変化をもたらし、また「日中の民間交流と相互理解の促進」の必要性そして重要性を感じさせた。

郭燕公使が質疑応答の際に述べていた中国の努力は、日本の一部のメディアや極右勢力により捻じ曲げられ、日本の青年や学生が中国を訪れると、様々なことが聞いていた内容と異なることを知る。こうした点に私はいらいらを感

じ、やるせなさと同時に闘志そして重責も感じる。文化交流はいかなる宗教的イデオロギーよりも勝る意義を有しており、地道な交流、例えば東京の街を少し歩くだけでも「なるほど」という感嘆が生まれる。両国の民間の友好交流の力はすでに大きいが、更なる発展の余地があり、丸紅やみずほ銀行の責任者が私たちへの期待として述べていた通り、私たちは今回経験した真実を家族や友人に伝えたいと思う。これは私たちへの期待であり、それ以上に私たちの責任である。

2020年には東京で夏季オリンピックが開催され、2022年には北京で冬季オリンピックが開催される。その際には互いに相手についてより多くの理解が得られることを願っている。私もその時には再度東京を訪れたい。

大学名： 北京大学
氏　名： 陳晨

テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

この日の昼、代表団は東京に到着し、期待に満ちた活動はJALの整備工場の見学から始まった。団員らはスタッフの案内の下、飛行機の整備の最前線を見学し、航空会社の高い技術性と正確性を身近に体験した。また質問を通じ、私はJALについて以下のいくつかの認識が得られた。

一つめは、JALのサービスの質は極めて高く、良好なユーザー体験は正にJALが市場を獲得する上での武器となっている。キャビンアテンダントや機内食の質から安定した飛行体験、静かな飛行環境までいずれもJAL独特のものである。

二つめは、JALの短期的戦略で、利益率の高い欧米路線の強化により急速な収益増加を実現している。またJALは毎年40機の航空機を購入しているが、安易な新規路線の開発はしていない。

三つめは、航空類の大規模投資業界にとっては如何に投資分を回収するかは収益を出すための重要ポイントである。この点についてJALは飛行機の品質やメンテナンスを重視し、安定的に飛行機の寿命を30年以上にしており、さらに効率的な割り当てにより各時期における減価償却費用を下げるなど、収益実現のための良好な基盤を構築している。

二つの方面から見ると、

1.従来の製造業や基幹工業から見ると、日中両国の差は未だ非常に大きい。中国は自動化、精密機械、ハイテク、環境保全等の面で日本に学び、その差を縮めなければならない。

2.新興産業、デジタル経済から見ると、中国は世界をリードする立場にあり、発達した電子商取引や安価な人件費等は独特の優位性を有し、中国はニューエコノミーの発展において際立った存在となるであろう。この点については、日本は中国に学ぶべきだと思う。

大学名： 北京大学
氏　名： 費渝

テーマ： 1.国民性についての理解
2.集団帰属意識の強さ

今回の訪日の旅は時間こそ短かったが内容はとても豊富で、企業見学では日本企業の優れた企業文化や理念について学ぶことができたが、二日間のホームステイでは真実の日本というものについてより多くの認識が得られた。私

のホストファザーは私に真実の日本をより多く知ってもらう為、わざわざ自身の大学時代の同級生（リトアニア国籍の教授Romanasさん）を招き、彼らが感じる日本について紹介をしてくれた。

日本は集団帰属意識のとても強い民族だが、これは日本の民族が団結していることだけを言っているのではなく、各人が一つの集団の中に存在し、集団として互いに賛同そして存在しているのに近いものがある。Romanasさんは彼の経験について紹介してくれ、彼は大学生の頃に男友達を作ろうとしたが全て失敗した。夜にお酒を飲んでいる時は色々な話ができるが、次の日に学校に来るとそれ以前の距離間や関係に戻っていたとのことであった。日本人の集団意識はとても強く、小学生の頃は小学生のグループ、中学・高校・大学ではそれぞれのグループが存在し、知り合う方法の多くは、一つのグループに入るかまたは他人を自分のグループに引き入れるという方法で、グループの外にいる人に対しては、礼儀正しく接し一緒に行動はするが、腹の底を打ち明けることはほとんどない。またこうしたグループは日本人以外への許容度がとても低い。日本は純血民族で、遺伝子の9割以上は日本本土の遺伝子で、その他は見分けがにしくい中国や韓国の遺伝子である。こうしたことから日本民族の外部民族に対する受け入れ度合は高くないことが見て取れる。もう一つの集団意識は、他人へ迷惑をかけず、個人的主張をしないという行動原則に示されている。Romanasさんはもう一つの例を紹介してくれた。もしとある日本人が流暢な英語を話す場合、友人がいる場などでは英語が得意ではないふりをする。もし彼がそのまま流暢な英語を話した場合、自慢していると思われ反感を買うことになる。こうした集団意識や個人の集団への思い入れといったものは、私たちが日本の国民性を知る上で大きく役立つものである。

大学名： 北京大学
氏　名： 李暢暢

テーマ： 1.国民性についての理解

大和民族には菊と刀の伝統があり、美や自然を敬う心と、犠牲や勇敢さといった武士道精神を併せ持っている。現代の経済において、こうした点は優れた日本の製造業に活かされている。日本人はグループに従い、秩序に従い、上司を敬うが、こうした社会の共同体への敬意の背後には、人や社会の自然災害に対する無力さと脆弱さ、それら要素による文明秩序の構築への有難味というものがある。これらは「礼（礼儀）」という行動規範に示されており、礼儀は「菊（自然）」と「刀（社会）」に通じている。美への畏敬には自然の美やその破壊への理解が込められており、自然は簡単に社会を破壊することができる、こうした危機感が大和民族の文化の奥深くに根付いていることから、礼儀と思いやり、礼儀と敬意そして秩序は特に重要なものとなり、自身への抑制や、礼儀に基づく言動に繋がっている。そして礼儀という自己欲求に対する抑制や奉仕の精神が大和民族の伝統を形成している。

大学名： 北京師範大学
氏　名： 席靖毅

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

人が赤の他人をこれほどまでに思いやれるとは、私は思いもしなかった。企業と顧客、そしてホストファミリーや私たち学生の間も然りである。

初日に日本航空のカウンターで荷物の託送手続をした際にトランクが壊れ、自分がスタッフに面倒をかけたと思っ

ていた私は、以外にも様々な事情（トランクの値段、使用期間等）を訊かれた後に弁償を約束された。私はその時とても驚かされた。企業として業務の時間や範囲内に起きた問題について即座にその責任を負い、たとえ彼らの責任ではなかったとしても、彼らは自身の顧客にいかなる負担も与えないように行動する。私は日本航空だからこそこうした体験ができるのだと思った。

ホームステイの二日間、美貴さんからは至れり尽くせりのおもてなしを受けたが、これには私は、他人からこれほどまでに思いやりを受けることができるのかと改めて考えさせられた。

私が野菜嫌いであることを知り食事の際にはそうしたものを使わないことであったり、または私がアニメ好きであることを知り自発的に近場のグッズショップを調べてくれたことであったり、ひいては夜の外出の際にマフラーを用意したり、自分が中国語を学んでいるにも拘らず、私の会話の練習のために全て日本語で話してくれたりと、私は常に感動しきりであった。

彼女はホストファミリーとして私の想像の何倍、何十倍もの情熱で私をもてなしてくれた。

コンビニで丁寧にお金を両替してくれた店員、企業見学の際に集団からはぐれた私を引き戻してくれたスタッフ、懇親会の時に一人でいた私に声を掛けてくれた神永さんなど、こうしたことは他にも沢山あった。

私はこうしたことから日本人の他人への思いやりについて感じることができた。

大学名： 北京師範大学
氏　名： 王月

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本に来る前から日本はとても礼儀やマナーを重んじる国だと聞いていた。そして日本での8日間で最も印象深かったのもこうした点であった。

飛行機を下りるとすぐ、私は日本では視覚障害者用通路が整備されていて、通路配置も合理的で、さらには曲がる場所では点字ブロックで曲がる方向を示していることに気が付いた。それ以外にも、学校やデパート、会社といった建物内部においても視覚障害者へ配慮した構造になっていた。一方中国国内ではそうした視覚障碍者用通路は各地により差があり、樹木や電柱が通路を遮るなどしているが、様々なこうした「人身事故に繋がりかねない通路」については泣くに泣けず笑うに笑えない状況である。その原因について考えると、中国国内ではほとんどが視覚障害者用通路の建設を任務ととらえており、表向きには完成しているが、視覚障害者の需要を考えておらず、視覚障碍者への配慮が欠けている。

この他、日本での8日間では記念写真を撮ることが多かったが、正にこの写真撮影の際に私は日本人のマナーの素晴らしさを感じた。増上寺での写真撮影を終えた後、私は何気なく前に向かって歩いていたところ、ホストマザーがとても慌てた感じで私に端を歩くよう言った。私は最初理由が分からなかったが、私の前方に写真撮影をしている人がいたことをホストマザーから聞き、ようやく私の先程の真ん中を歩く行為は他の人の写真撮影の邪魔になっていたことを知った。この出来事の後、私はこれまで以上に写真撮影の際の日本人の作法について気にするようになった。写真撮影をしている人に出くわすと、日本人は歩を止め静かに待ち、写真撮影が終わってからまた歩き出す。こうした点は人としての素養が最も分かるものである。日本は国土面積が小さく、人口も多いため、互いに思いやったり相手の立場に立ったりすることで日常生活における摩擦を減らすしかない。「他人に迷惑をかけない」という意識は日本人の中にすでに浸透している。日本の隣国であるかつての礼儀の大国である中国人のマナーについては、現在国際的に評価は高くない。徳のある優れた人を見れば同じようになろうと思うように、私たちにはマナーや思いやりの面において、日本に学ぶべき点が沢山ある。

大学名： 北京師範大学
氏　名： 李易陽

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

今回の訪日において最も印象深かったのは日本人のマナーの良さや思いやりであった。日本に到着後、ガイドの中島雪美さんから日本人の他人へ迷惑をかけないという意識について私たちへ説明があり、その後の数日において私自身もそうした文化的雰囲気を感じた。例を挙げると、中央大学の日本人学生との両親の老後の世話における問題についての討論では、多くの日本人の両親は子どもらの負担にならないようにするという考えを持っており、自発的に自分自身や社会福祉による老後の生活を選択していることに気が付いた。これは高齢者の扶養を果たすべき義務とする中国社会における共通認識とは大きくかけ離れている。そのため日本人は赤の他人にうやうやしくするだけでなく、いつも一緒にいる人に対しても配慮をしている。

マナーについては、企業や大学の訪問を終える度に、関係者が私たちを門のところまで見送り、私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた。パナソニックエコテクノロジーセンターの見学を終えた後、バスがS字型の道路に沿って走り、その間長い時間互いには姿が見えなかったため、私はきっと彼らは会社に戻ったであろうと思っていたが、カーブを曲がると何と彼らはまだその場で私たちに手を振っていたのである。これには驚きとそれ以上に感動を覚えた。それ以外にも大声で話をする人がいない電車や整然としたエレベーター、常に口にする「すみません」や「ありがとうございます」など、こうした所から日本社会のマナーというものを充分に見て取ることができる。「礼」はすでに習慣となり日本人それぞれの生活に浸透しており、一つのシンボルとしてその国民性となっている。

大学名： 北京師範大学
氏　名： 賈羽飛

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり
4.日中間の交流

訪日活動も間もなく終わるが、私にとって最も印象深かったのは日本人のマナーの良さや思いやり、そして日本との交流であった。今回の訪日活動の当初、飛行機を降りるとすぐにお辞儀や挨拶に囲まれ、またどこに行ってもスタッフが100%の敬意をもってサービスをしてくれ、さらに彼らの笑顔と穏やかな口調は、彼らが自分の仕事に誇りを持ち、また同時にお客へのサービスを楽しんでいるかのようであった。

また、日本人の他人への思いやりにも驚かされた。例えばホームステイの際、ホストマザーの直美さんが咳き込んだ時に私が大丈夫ですかと訊ねたところ、彼女は私に心配をかけたとのことで「ごめんなさい」と謝っていた。それから他人の手助けを受けた際、ほとんどの場合に「ありがとうございます」ではなく、「すみません」と言う。それは他人へ迷惑をかけてしまったからである。さらに重山さんがバイクで私を海辺に連れて行ってくれた際、私が携帯電話で写真が撮れるように指先の出た手袋を準備してくれていた。この国ではどこに行っても身の周りには互いに尊重する、互いに思いやる人が溢れ、自分自身がそうした雰囲気を享受するだけでなく、相手のことを思いやらずにはいられない感じであった。

最後の日中の交流についてだが、それは今回の旅を通じて常に感じられたものであり、初日から私たちの交流は始まっていた。その中では沢山の感動があったが、ここでは一番印象深かったホームステイについて話をする。ホームステイが始まる前、私はたった一年しか日本語を学んでいないことから、日本語をうまく話せなかったり、話題に困ったりするのではないかと心配していたが、直美さんに会ってそうした私の心配は完全に無用だということが分かった。

交流とは相手に意志を伝えることであり、互いに理解し合う心があれば、それは難しいことではない。私はホストファザーやホストマザーと沢山おしゃべりをしたが、その中でどうしてもうまく伝わらないことについては紙に書いて伝えた。ホームステイにおいて私には言葉を原因とした悩みはなく、思い出はすべて楽しく充実したものであった。

8日間の旅では沢山の収穫が得られ、日中友好に尽力する多くの人々と出会い深く感動すると同時に、この国を離れる今では思い出と名残惜しさで一杯である。帰国の後、私は日本の人々の友好への思いや日本の優れた企業や大学への訪問で見聞きしたことを周りの人へ伝えたいと思う。

大学名： 北京師範大学
氏　名： 尚楚岳

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

まず初めに、日本での8日間においては一部の日本人のマナーの悪さを目にした。ホストファミリーも日本人全てが良い人だとは思わない方がいいと言っていた。確かにその通りで、「マナー」についての論争は常に存在しているが、ここでは私が実際に目にしたマナーのしっかりした日本人について話をしたい。

初めはサービス業のスタッフで、商店の店員やホテルのフロント等、ランクが高いほどそのマナーが優れ、時には不思議に感じるほどであった。また企業見学の際には日本のエリート集団や企業で出会った警備員や企業内の解説担当者などはいずれも礼儀や他人への尊重を自分自身の事とし、最も印象深かったのは、各企業の守衛さんが離れていくバスにお辞儀や敬礼をしている場面であった。

また私たちが訪問した企業の従業員や大学の学生や教師など、トップ企業に入ることができるような教育水準が高くマナーがしっかりした人については所作の一つひとつをとっても他人への配慮が感じられ、閉まりそうなドアを支えたり、ごみを自分のポケットにしまったり、携帯電話をマナーモードにしたりと日本人の他人への思いやりや他人に迷惑をかけないといった人柄が表れていた。

それから私が今回体験した出来事だが、街を歩いていて実際には私たちが道をふさいでいて私たちもすぐにそれに気付いたのだが、思いがけず後にいた歩行者からお詫びをされた。更にはホストファミリーからの私へのおもてなしでは挨拶、食事、日程、入浴など全てにおいて私のことを優先してくれていた。こうしたおもてなしや挨拶に私は心から感動した。

最後は社会的な習慣で、日本では電車の乗り降りにおいて先に下車し後に乗車することは実現可能であることに気が付いた。また道を歩いていて車にひかれるといった心配はほぼなく、皆はしっかりと交通ルールを守っている。もちろんこれらは行動習慣によるもので突発的なものではない。

悪い行為ももちろん存在するが、日本人は全体的にマナーが優れている。またこうしたマナーはすでに彼らに根付いているものである。

大学名： 北京理工大学
氏　名： 王天竹

テーマ： 4.日中間の交流

私はこれまで「国家間の交流」とはどういうことなのかについて理解してはいなかった。高校生の頃に模擬国連という部活動に参加したことがあり、そこでの会議の際、私たちは決まって「意思疎通や交流を強化する」という言葉を使っ

ていたが、私はそうした言葉は政府側の決まり文句だと思っていた。そして私はこの文章を書く現在になってやっと交流とは何なのかについて知ることができた。

この8日間において、私たちは企業と交流し各企業のモットーや企業文化を知った。また日本在住の華人や華僑と交流し、彼らからは日本での学習、生活、仕事など様々な面からの紹介を受けた。そして日本の大学生との二度の交流では皆が最後に名残惜しく感じる程であった。こうしたことから現在では、私の中の日本へのイメージはこれまで想像していたものとは全く異なっている。

私たちはよく、現代の青年は独立した思考能力を持たねばならないということを口にする。しかしこうした独立した思考とは実際の体験の上に成り立つものである。そのため、今回のような訪日の体験は非常に得難いものであると言える。もし今後私の家族が外国人学生を受け入れることがあれば、私はきっと喜んでもてなすだろう。

国家レベルでの日中両国の微妙で変化の多い関係については、皆が向き合わなければいけない話題であり、時折私たちは世論に流され他人の言葉の受け売りをしてしまう。しかし実際に体験していない事については、むやみに結論を出してはならず、ましてや現在の世界ではすでに互いの結びつきが強くなっており、いかなる国も繁雑な国際利益の場から自らのユートピアに戻ることはできないのである。日中関係の平和安定はアジア地区全体ひいては世界全体の安寧にも関わるものであり、こうした中、一大学生である私には何ができるのだろうか？

私は今回の交流で見聞きした事を持ち帰り、平和友好のメッセージを広め、より冷静で客観的な目で日中関係を見ていきたいと思う。日中両国の交流が今後さらに増え、両国が大きく繁栄していくことを願っている。

大学名： 北京理工大学
氏　名： 王楚婷

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり
4.日中間の交流
6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回の8日間の訪日活動を通じて、私には日本について多くの新たな見方が生まれた。初めにマナーについて日本での体験を話してみたい。日本人は他人に何かをしてもらった際、例え相手が仕事でそうしようが、店員であろうが、習慣的に「ありがとうございます」と言い、他人との会話や意思疎通の際は相手の話していることに対してその場で反応したり頷いたりしながら共感を示す。しかも時間にとても正確で、他者の立場で行動予定の細かな段取りを決め、私たちの好みや食べられないものなどを丁寧に調べていた。また道路や地下鉄など人が多い場所でも何の音も聞こえず、道路では車のクラクションの音を聞くことはなかった。さらに信号無視する人もなく、食べ物を歩きながら食べることはなく、店の中で食べるか家に持ち帰って食べていた。これらは中国とは異なる習慣であった。そして日本の道路ではゴミ箱はほとんど見かけなかった。

日中間の交流については今後PRを強化すべきで、今回の訪問団のような活動をもっと増やし、日本側も中国への交流訪問団を派遣することで両国国民の相互理解と意思疎通を深めるなど、互いの固定観念を変えるサポートをしていく必要がある。

今後の中国においては環境保全関連の技術へのニーズがますます高まると考えている。ここでいう環境保全とは、技術のみならず従来の各技術に環境保全の理念を浸透させることで、環境に優しい企業へと発展させることを意味している。根本から変えることで、汚染の後に対策を行うのではなく、汚染を生まない。日本の環境保全技術の多くは私たちが学ぶべきものだと思う。

大学名： 北京理工大学
氏　名： 丁楷軒

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

百聞は一見に如かず。日本人のマナーや思いやりは世界でもトップクラスだということはこれまで耳にしていたが、実際の体験を通じて私はそれらへの立体的また全体的な認識を得ることができた。

店員のマナーについては誰の目にも明らかで多くを語る必要はないため、ここではホームステイの感想を述べたい。私のホストファミリー菊地さん一家は私に日本人の細やかな気配りを感じさせてくれた。訪日初日にホストマザーの菊地佑美子さんから私が無事に日本に到着したかの確認があり、さらに中国語でホームステイの2日間の予定を伝えてくれた他、事前に東京見物用の乗船チケットや東京スカイツリーのチケットを予約してくれていた。またホームステイ時の最初の目的地は鎌倉だったが、東京から鎌倉までの道が混んでいたため、移動で大切な時間を無駄にしないように、ホストマザーは私とお兄さんが電車で先に鎌倉へ向かうよう指示し、その後私たちは鎌倉で沢山のお土産を買い、ホストマザーや弟さんの到着を待って一緒に鎌倉大仏を見学した。さらにもう一つ心が温まった出来事は、浅草寺の見学を終えた際に私の不注意で携帯電話のバッテリーが切れてしまい、その後のスカイツリーの見学では私が写真を撮れるようにお兄さんがすすんで自分の携帯電話を貸してくれて、見学の後には仕事を終えたお姉さんが持ってきたモバイルバッテリーを使わせてもらったことである。こうした出来事は他にも沢山あった。ホストファミリーは日本人のマナーや思いやりを真に感じさせてくれて、私はとても感動した。

礼儀の国という日本の称号は評判通りのものであった。

大学名： 北京理工大学
氏　名： 詹天予

テーマ： 1.国民性についての理解
3.マナーのよさと思いやり

先進国である日本と発展途上国の中国との違いについては、公共施設や市民の全体的素養などから多少見て取ることができる。日本のトイレには赤ちゃん用のスペースが設置されている。一部の商店のゲートは自動ドアで、旧式のドアより便利である。一部の公共施設以外にも多くの部分において日本人のマナーが感じられた。例えばエスカレーターに乗る際は皆が左側に立ち、右側を急ぐ人の通行用に空けていた。また私とホストファミリーが地下鉄駅でエレベーターに乗る際、傍の人は私たちがベビーカーを押していたことから自発的に私たちを先に乗せてくれた。地下鉄の中は、人はとても多いが全く騒々しくなかった。良い環境を作るため、訪問先の企業や学校はあらゆる場所がとても清潔で、たまたま見かけた掃除のおばさんは、掃除機で熱心に地面の埃を掃除していた。ここの全ての従業員の勤務態度は同様に最善を尽くすべく真剣なものであった。

こうしたマナーの他にも、日本という国の細かな部分への重視というものについては私たちが学ぶべきものである。バスのシートベルトの内側を黒に外側をグレーに色分けする、階段の最後の数段に1・2・3と数字を付けることで降りる際に不注意での転倒を回避する、高層ビルの窓に赤い三角形のマークを付け、災害時に救助作業員がその窓を割り救助を行うなどである。

他にもこの数日での体験により、私は日本について沢山の新たな認識を得ることができた。それらはいずれも印象深いものであり、私たちは彼らの物事への緻密で真剣な態度やマナーといったものから学び、中国を経済のみならず文化的にも発展させていく必要がある。

大学名： 北京理工大学
氏　名： 汪俊呈

テーマ： 5.アニメなどのソフトパワー

理工系の学生として私は今回日本を訪れ、いくつかの技術系企業について特に印象に残った。まずはパナソニックエコテクノロジーセンターで、同社は松下幸之助氏の環境保全理念を受け継ぎ、廃棄家電の回収を通じて希少原料の高純度回収を行い、原料のリサイクルを実現することで社会的価値の創造と資源浪費の抑制、そしてゴミの削減を図っている。同社の工場の見学を終え、その技術や生産ラインの完成度合には驚かされた。日本においては環境保全技術とは絵空事ではなく、成熟した、また大きな社会的価値を生み出す技術そして産業であった。一方中国は広い国土を有しており、日本のようにゴミの埋め立ての場所に困ることはないが、資源の過度の消費や利用可能用地の減少に伴い、こうした環境保全や資源のリサイクル技術は今後中国においても普及していくであろう。

もう一つは三菱電機で、私たちは同社のサーボモータ製造工場を見学した。工場内で私たちが目にしたのは、慌ただしく働く作業員の姿ではなく全自動のロボットアームで、その他わずか数人の制御パネルを操作する技術スタッフ、そして大型パネルに次々と示される製品パラメータや生産状況であった。こうした自動化の生産ラインは全てその背後にある E-Factory システムの恩恵を受けている。製品の生産状況をリアルタイムに伝送し、中央演算装置が処理を行い各生産ラインにフィードバックすることで、高効率でスマートな生産を実現している。スマート製造やインダストリー4.0を推進している現在の中国において、こうしたスマート製造システムはメイドインチャイナ2025の全面的推進における技術基盤となるであろう。

大学名： 北京第二外国語学院
氏　名： 馬恵琳

テーマ： 1.国民性についての理解
3.マナーのよさと思いやり

これまで日本における自殺率は高いと聞いていたが、今回実際に日本を訪れ、人々の幸福度の高さに驚かされた。私が目にしたのはほんの一部分かも知れないが、普段中国で私の身の周りにいる人々で、今回目にした彼らに匹敵するほど幸福度の高い人はいない。私のホストファミリーは典型的な幸せな家庭であった。

私はこうした幸福感とは彼らの生活や仕事への真剣な向き合い方から来ていると思う。今回の日本での8日間では、工場見学の際またコンビニでの買い物の際など様々な場面においてその特徴的な細やかな仕事の流れがあり、彼らはそれらを全て真剣に行っていた。初め私はこうしたことは仕事の効率を大きく下げ、時間やエネルギーを無駄にしているのではないかと思っていた。中国では工場の作業効率は高く、技術スタッフは寝食を忘れ、研究スタッフは一心不乱に仕事をしているが工場内はごちゃごちゃしそれを気にも留めない。住まいも同様で、日本人は多くの時間をかけ家の中をきれいに片付ける。そのため女性の多くは専業主婦であり、中国では女性の地位が高く、その多くは仕事に明け暮れているが家の中はごちゃごちゃしている。日中のこうした違いは大きいが、どちらがいいのかと言えば、私はどちらにも利益と弊害があると思う。またこうした違いが生まれた原因については、効率と真面目さにおいて中国は効率を優先し、日本は真面目さを優先しているからである。日本は効率と真面目さをはかりにかけ、こうした細部にこだわる態度を終始徹底していることで、人付き合いにおける挨拶やマナー、互いに贈り物をする、時間を守る、事前に準備をする、サービス業が世界トップクラス、ゴミの分類処理が正確、都市計画に死角がない、あらゆる場所がきれいで清潔等の様々な面で彼らの真面目で細部にこだわる国民性を示している。また正にこうした細やかさが彼ら

の生活に洗練さや秩序をもたらすことで、彼らが実現したい事については熟慮の上で事前に準備をし、真剣に向きあい実現への努力をし、細部を見逃さず完璧を目指す。効率的には多少劣っても、予想通りの成果を成し遂げた最終的な結果として人々の幸福度は概ね高いものになっている。

中国は現在発展における重要な時期にある。効率の追求はそうした国情によるもので、私は効率の追求は人々の緊張感を高めるものでもあり、国の発展には有益だと思う。

大学名： 北京第二外国語学院
氏　名： 徐穎

テーマ： 1.国民性についての理解
3.マナーのよさと思いやり

私は「思いやり」という日本語の言葉が好きで、中国語では「為他人着想（他人のために考える）」という意味である。日本に到着した初日から私は日本人の思いやりやマナーの素晴らしさを感じていた。

今回、私は実際には自分の携帯をトイレに置き忘れたのだが、それをレストランに置き忘れたと勘違いしたことがあった。当初私がレストランのスタッフに伝えたところ、彼はテーブルの下を含めあらゆる場所を探してくれたのだが当然見つからず、その後私がトイレで自分の携帯を見つけそのスタッフに告げたところ、彼はとても優しい口調で、良かった、次からは気を付けてねと声を掛けてくれた。中国ではこうした場合、多くの人の反応は自分がやったのではないと慌てて責任逃れをする。日本のサービススタッフの対応にはとても感動した。企業や大学の訪問を終えその場を離れる際には、日本側のスタッフが皆私たちの姿が見えなくなるまで手を振りお別れをし、出迎えにおいては、早々に私たちを出迎えて会議室へ案内してくれた。さらに質疑応答においてはその場で分かりやすい回答をしてくれた他、たとえ本業と関係のないことでも彼らは丁寧に回答をしてくれた。

ホームステイでは日本の伝統文化の体験というよりかはホストファミリーの日常生活を体験した。彼らはとても親切に浴室の使い方を教えてくれて、私が濡れた髪のまま出てきた時には澄川さんが髪を乾かさないと風邪を引いてしまうからとドライヤーを持ってきてくれた。寝る前には部屋の温度は大丈夫かどうかを確認してくれて、エアコンの使い方を教えてくれた。普段の朝食はパンを食べているホストファミリーがわざわざ私のために和式の朝食を準備してくれた。子供たちと遊んでいる際にコナンが好きという話をしたことから、この日私はコナンの2018年カレンダーを受け取った。彼らはまた私を見送り姿が見えなくなるまで手を振って別れを惜しんでくれた。

わずか一週間ではあったが、今回の日本訪問では多くの感動が得られた。

大学名： 北京第二外国語学院
氏　名： 張瀟

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

「日本人のマナーの良さと思いやり」

まず日本人のマナーについては二つの面があり、一つめは他人を尊重することで、二つめは他人に迷惑をかけないということである。私は日本語学部の学生で、普段の学習においては先生が常々マナーを守るよう言っているが、今回日本を訪れ、マナーを守ることの難しさを知った。日本人は極めて他人を尊重し、商店やレストランなどのスタッフは自発的に挨拶をしさらに敬語を使い、客もすぐにこんにちはと返す。日本でのこの一週間において一番沢山話した

言葉は「ありがとうございます」であった。他人へ迷惑をかけた際にはすぐに謝る、何かをする際には他人の意向を頻繁に伺う、他人に迷惑をかけないために自発的に皆が片側に並ぶ、自分の持ち物をきれいに整頓する、遅刻をしないなど、これらの努力は全て他人へ迷惑をかけないためであり、社会全体がこうした配慮をすれば、その社会には極めて高いマナーや秩序が生まれる。

次に思いやりについてだが、上の「マナー」の部分の「他人に迷惑をかけない」とは即ち他人への配慮のことである。日本人はマナーを重んじており、マナーと自制は彼らに浸透しているため、「他人を思いやる」ことはすでに彼らの無意識の動作となっており、また実際には「他人を思いやる」ことは一種の公衆道徳として、法律の遵守同様に市民それぞれがすべきことになっている。

秩序、マナー、効率、これらは日本社会から私が受けた最も印象深い三つのキーワードである。「人々が互いに思いやる」生活のように、マナーはすでに日本民族のシンボルとなっており、彼らはマナーの恩恵を受けると同時にそうしたマナーの保護に尽力している。

大学名： 北京第二外国語学院
氏　名： 孫佳濱

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり
4.日中間の交流

日本語を学ぶ学生として今回のような日本文化を実際に体験する機会が得られたことは、非常に意義深い経験であった。私は中学一年から大学二年の現在まで日本語を七年学んでいる。この七年間においては何度も日本を訪れたいと思っていたが、色々な原因によりそれは叶わなかった。今回は幸運にも優秀な先生方や各大学の学生等と一緒に日本の企業を訪問できるとのことで、私はこうした得難い機会を大切にするという気持ちで今回の旅に参加した。

日本語を学ぶ中で私は次第に日本文化にも興味が湧いた。日本語を学ぶ人であれば知っていると思うが、日本人はマナーを大切にしており、何をするにもまず他人に配慮する。日本を訪れる前、私の日本についての知識は日本語の先生から聞いたこと、もしくは日本のドラマで見たことが基になっていたが、実際に日本を訪れ、先生の言っていた通りであることが分かった。例えばマナーの面では、日本人は恩を受けた人のことを覚えており、次に会った際には必ず前回への感謝の意を述べてから、話の本題に入る。日本人は互いに見知らぬ人でも挨拶をする。公共の場ではゴミを捨てたり、騒いだり、交通ルールを守らないといった人は少ない。日本には「人に迷惑をかけないでください」という言葉があるが、これは他人を煩わさないという意味で、特にホームステイの際には、夜は冷えるからとストーブをつける、私に楽しんでもらうために渋谷、浅草、原宿を案内する、私の胃腸が弱いことを知りわざわざ暖かい日本茶を準備するなど、彼らは常に私を気遣ってくれた。今回彼らからはとても良くしてもらった。私は一生彼らのことを忘れない。

日中文化について話をすると、日中の友好発展の促進というテーマは一見とても広いと感じるが、私たちにとっては民間交流が非常に重要であり、今回日本を訪れ私は、日本人との交流においては未だ一定の理解の違いが存在するが、正にこうした違いの存在により日本文化をより良く理解できるのではないかと感じている。

大学名： 北京第二外国語学院
氏　名： 呂嘉琦

テーマ： 4.日中間の交流

今回の「走近日企・感受日本」活動はとても充実していて、時間が経つのが速く感じ、あっという間に一週間が過ぎてしまった。今回私は同年代の大学生や、ホストファミリーなど沢山の日本の人々と交流をした。ここでは日中間の交流における私たちの収穫や感想について話をしてみたい。

中央大学での交流の際、ある学生から「中国には日本に反感感情を持っている人は多いのか？」と聞かれた。この質問から私たちにはちょっとした討論が生まれた。その結果、両国の大部分の国民は相手に反感を抱くといった極端な思想は持っておらず、対立の大部分は政府レベルもしくは一部の過激派によるものであることが分かった。一般の認識から見ると、「両国の国民は互いに相手の国を排斥している」という認識は間違っている。私はこうした間違った認識が生まれた原因は両国の交流不足にあると思う。大阪大学そしてホストファミリーとの交流では、私たちは自分たちの国の文化的背景による文化の垣根を越えた交流といった文化情報の交換をしていた。互いの比較を通じて、私たちは沢山の興味深い点を発見すると共に、互いの違いから様々な思考をする機会を得ることができた。

こうした文化の垣根を越えた交流はとても大切である。特に私たちのような学生にとっては、言語能力を高めると同時に日本文化を知ることは重要である。現在、日中関係はめまぐるしく変化しているが、こうした状況の原因の一つは互いに相手を理解できていないことにあると思う。文化の垣根を越えた交流は正にこうした状況を解決する方法であり、交流による相互理解は日中関係の改善に大きな役割を果たすであろう。

だからこそ私は、今後の両国はこうした文化の垣根を越えた交流活動を多く実施することで、互いに相手の文化を理解しさらに受け入れ、悪化している日中関係を段階的に改善すべきだと思う。

大学名： 華北電力大学
氏　名： 張楠

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本は礼儀で有名な国であり、訪日の前に私はインターネットメディアを通じて多少知識を得ていたが、今回の訪問や交流により、彼らのマナーや文化についてより深い理解と認識が得られた。

基本的なマナーに関して、日本では家に上がる際に靴を脱ぐ習慣があり、靴下を履いて室内で行動する。温泉ではまず先に身体をきれいに洗ってから温泉に浸かる。待ち合わせの際は遅刻をしないよう5～10分前に到着し、用事がある場合は事前に知らせる。討論や交流活動の際はなるべく多く質問し、質問の際はまず自分の名前を名乗る等がある。

人付き合いに関しては、礼儀正しく、顔を合わせた際は互いにお辞儀をし、譲り合いや思いやりの心で接する。私にとって印象深かったのは、まず空港にて搭乗までの間何度も航空券の確認をすることからスタッフは常にすみませんと謝っていた。次に毎回の訪問が終わると、関係者が皆私たちを見送り、姿が見えなくなるまで手を振って別れを惜しんでくれたといったことである。ホストファミリーはまた私にとても親切にしてくれて、すべての事において私の立場に立ち面倒を見てくれた他、常に色々な話題について私とおしゃべりをしてくれたので孤独に感じることはなかった。

以上が今回の訪日での体験を踏まえ私が感じた日本のマナーである。

日本には欧米や中国とは異なる独特のマナー文化があり、それは多種多様で日本人の日常生活を踏まえたものである。日本を訪れる前、私は彼らの繁雑なマナーは交流における障害になるのではないかと思っていた。しかしながら、こうしたマナーはすでに彼らに浸透しており、互いに理解し尊重しあうことで秩序の保護の役割を果たし、日本を礼儀の国にしている。

今回貴重な日本訪問の機会が得られたことにとても感謝している。今回の訪問を通じて私は日本の文化を学ぶと同時に自らの素養が高まり、これまで以上に他人を思いやることができるようになった。日中両国の友好関係においては、互いを尊重することが最も大切であり、互いに理解し学ぶことで共に経済や文化の発展を促進していく必要がある。

大学名： 華北電力大学
氏　名： 付康

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

今回の8日間の訪日の旅は、私の人生において忘れられない思い出となった。

中国では、日本人は極めて細部やマナーを重視しているということを耳にしていた。そして今回の8日間の体験を通じて、私は日本人の細部へのこだわりやマナーというものに対してより深い認識を得ることができた。私は細部にこだわる背景にはヒューマニゼーションがあると思う。例えば、日本のトイレには利用者がカバンや手荷物を置ける場所が設置されていてとても便利であった。さらに建物の出口や歩道が交差する場所ではサイレンが鳴り、車が出てくる際にはサイレンが鳴ることで歩行者に注意喚起をする。ヒューマニゼーションの他には基準化という点も存在する。つまり工場における「整理整頓」という基準である。この点については三菱電機の工場を見学した際にとても印象深く、各作業員の工具はとてもきれいに整然と並べられていた。

日本人のマナーはすでに彼らの中に浸透している。レストランやホテルでは従業員は常に笑顔でお辞儀や挨拶をする。赤の他人がエレベーターで顔を合わせても挨拶をする。私たちが企業見学を終えその場を離れる際には関係者が皆私たちを見送り、姿が見えなくなるまで手を振りお別れをする他、警備員も敬礼をしながら見送る。これらの行為からは私たちへの尊重を感じた。日本人のこうした友好的なおもてなしは私にとって非常に印象深く、中国国内では体験できないものであった。インターネット上の盲目的な言論は話にならず、日本人との交流を経験してこそ初めて日本人について述べることができる。

日中両国は互いに交流を強化することで友好関係を促進できると思う。

大学名： 華北電力大学
氏　名： 藍文鴻

テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回8日間の大阪や名古屋そして東京の三ヵ所での見学や訪問を通じて、パナソニックの環境保全技術、NECの画像認識技術そして丸紅のリスク管理技術を代表とする日本の先進技術が私にとって印象深かった。中国は現在モバイル決済、人工知能搭載車等の分野においてリードする立場にあるが、実際にはモバイル決済であれ人工知能であれ、二次元の画像認識技術なしには語れない。NECでの見学において、同社はその進んだ技術処理やスマートアルゴリズムを示し、その正確性や効率性といった優位性により当該分野をリードしている。中国において拡大を続けるWechat payやAlipayといったモバイル決済分野においては、その使用環境は日々拡大そして複雑化しており、そうした複雑でまた暗い環境においていかに効率的に必要な画像を認識するかは今後求められる技術的需要である。私はモバイル決済分野において、NECは画像認識技術や再認識技術においてリードする立場を構築する他、技術提供も可能だと思う。

この他、NECが打ち出す認識技術とクラウドの統合については、未来の技術における方向性だと思う。自動運転の時代は間もなく訪れ、BaiduやGoogleも自動運転関連事業を強化している中、自動運転には画像認識技術が必要不可欠である。そして都市全体の車両制御においては、大規模なクラウドサービスが都市の交通をより快適にする。この両者が結びつけばその効果は1+1＞2のものである。そのため、NECの現在の画像認識技術は事業化と同時に中国への輸出もできると思う。

大学名： 華北電力大学
氏　名： 宇文天悦

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本に来てから私が最も印象深かったことは、日本人のマナーや他人への思いやりそして細やかさで、あらゆる面からそれは感じられた。まずサービス業だが、スタッフのお客へのマナーについては日本に向かう飛行機に乗った際にすでに感じられた。スーツケースを片手に団員を待っていたところ、通りかかったフライトアテンダントが私を見かけ笑顔で会釈をしてくれた。機内でのサービスもとても行き届いていた。ホテルでは夜に外出先から戻ると、各スタッフが笑顔で「こんばんは」と挨拶をしてくれ、私は彼らの思いやりを感じた。その他、公衆トイレの施設はとても気配りがされていた。高速道路のパーキングエリアではトイレに通じる道が車イスでの通行が可能で、内部には赤ちゃんやカバンまたステッキ用のスペースがあり、利用者の様々な利便性を考慮している。電車には優先席の他、弱冷房車両もあり、身体の具合の悪い人や高齢者そして子どもらに配慮をしている。公共サービス施設において人間本位を実現し、社会における全ての利用者の立場に立った設計をしていたことは私にとって非常に印象深いことであった。

ホームステイではさらに日本の一般家庭の思いやりについて体験することができた。ホストファミリーは私にとても親切にしてくれた。私が食事面で食べられないものがあることから、彼らは毎回食事の際には私が食べられないものを避け、また私の好みについて細かく聞いてくれた。そして私が常に保温ボトルを持っていることに気が付いた彼らは私が秋以降は冷たい水を飲まないことを知り、家の中では温かいお茶を準備してくれたり、翌日の朝には私の保温ボトルにお湯を入れ直してくれたりと、こうした細やかな思いやりに私はとても感動した。

こうしたマナーはまた赤の他人同士でも示される。ホテルのエレベーターが開き、誰かが乗ってきた場合、赤の他人であっても互いに挨拶をしたり、些細な手助けについてもすぐに感謝の意を示したりする。礼節とは相互に影響を及ぼすものであり、他人が礼を尽くせば、自分も自然と礼で返す、こうしてマナーや思いやりというものが広まっているのだと思う。マナーは日本文化における重要な構成部分であり、人々に浸透している。

大学名： 華北電力大学
氏　名： 蒲曾鑫

テーマ： 1.国民性についての理解

私は国民性という言葉は範囲が広すぎて、一つの国またはその国民について、簡単ないくつかの言葉で表すまたは性格分類により定義付けすることは難しいと考えている。そのため、自分がすべての日本人もしくは大部分の日本人について理解をしていないうちは、この問題について定義付けする資格はないと思っている。

よって私が目にしたいくつかの現象から分析をしてみたい。まず私たちが宿泊したホテルニューオータニのエレベーターにて、とある老婦人が後から入ってきた中年男性が入りやすいようにドアを押さえ、男性が会釈で感謝を示し、老婦人がそれに会釈で返した。ユニークだったのはその後さらに男性が会釈を返したため、エレベーターの中は会釈の連続であった。こうした礼節を示すため、彼らは疲れたり面倒だと感じたりすることはないのであろう。或いは面倒であればあるほど良く、一見煩雑な方法でこうした礼節を示しているのかもしれない。私はこの時「辛抱強さ」や「礼儀」という場面に出くわしたと思った。

この他、見学先の各企業や大学では私たちの席に常にPR資料や飲み水が事前に準備され、さらに様々なサイズの資料が各席同じように置かれていた。こうした細やかさは非常に素晴らしいものであり、仕事への真摯な姿勢が表れていると思った。

大学名： 国際関係学院
氏　名： 賈蘇元

テーマ： 7.その他

私は日本の一般市民の生活を体験し、さらに都市や企業の構造を知るために今回の訪日活動に参加した。8日間の訪問を通じて期待通りの成果が得られ、次のような感想を持つことができた。

1.中流階級の生活の質が保証され、その階級は容易には変わらない

この点はホストファミリーを通じて感じたことである。彼らは千葉県に一戸建て住宅を持ち、仕事は安定している。収入については分からないが、以上の条件から家庭環境は良いと考えられる。また彼らはそれぞれ2～3ヵ国語を操り、さらに専門知識も有している。彼らはこうした生活水準を自ら選び、上流階級にはさほど興味を持っていない。安定した収入、年金、教育、医療制度が彼らの生活を保障しているため、彼らは平穏に生活するだけでよい。

2.都市の開放性と規則性

日本の道路は狭く平地が少ないため、建物もその場所により変化に富んでいる。しかし道路と建物の距離は変わらない。都内は高層ビルが立ち並んでいるが、込み合った感覚はなく、圧迫感は全く感じない。また緑化と建物のバランスが良い。

3.大企業は大きな発言力を有しておりクロスオーバーは少ない

明確な説明はしていないが、この観点は事実である。

大学名： 国際関係学院
氏　名： 姚禹

テーマ： 4.日中間の交流
6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

ここでは「今後ますます中国でニーズが高まる技術」について語ってみたい。我々個人にとって、最も分かりやすいのは身の周りの環境の変化であり、これには自然や人間社会も含まれる。自然を犠牲にした30年間の発展を経て、中国は世界の注目を集める成長を遂げたが、同時に環境に対する破壊や汚染をもたらしてきた。現在、中国人また中国政府はすでに環境の重要性を認識し、環境保護について持続的に国の発展戦略に位置付けているが、中国はこうした方面の経験や制度そして技術が不足している。一方近隣の日本は世界でもトップの環境保護強国であることから、日本の環境保護関連技術へのニーズは今後ますます高まるであろう。

例を挙げると、今回見学したパナソニックエコテクノロジーセンターのプラスチック分別技術は中国において非常に大きなニーズがあることから、今後中国に大きな影響をもたらすであろう。私はかつて生分解性プラスチックの研究室で助手をしたことがあり、その期間私は北京周辺の多数のプラスチックごみの処理状況について調査をした。北京周辺には巨大なプラスチックごみの地域が存在しており、そこから多数のプラスチック処理を行う作業場が形成されている。そこでは人が自らの手でプラスチックを分別した後粒状に粉砕し、分別できないプラスチックについては焼却または埋め立てによる処理をしている。この二つの方法については、一つは水源地や土地を汚染し、もう一つは大気を汚染するなど重大な環境問題を引き起こしている。仮にこうしたプラスチックが正しく分別されれば、プラスチックの回収率は飛躍的に高まると同時に汚染も減らすことができる。もちろん確実な実施のためには法律面の整備も必要だが、いずれにしてもこの技術へのニーズは非常に大きなものがある。

中国では、大気汚染や水質汚染、また土壌汚染などについて対策をとらなければならないが、同時に中国自体も発

展をする必要があり、そのためには環境保全技術により発展とのバランスを取らなければならない。よって、中国における環境保全技術へのニーズは今後ますます高まるであろう。

大学名： 国際関係学院
氏　名： 杜文慧

テーマ： 4.日中間の交流

今回の訪日活動では日本の企業や大学を見学した他、さらにホームステイも体験し、私は日本との交流について三つの認識が得られた。

まず、日中間は技術面における相互学習や相互促進、経済面における貿易取引や商品の輸出入、交換留学プロジェクトや教育面の交流、その他訪問団の相互派遣など様々な形式による交流が可能だということである。一つの形式だけに限らず、あらゆる形式の交流により様々な角度から互いを知ることで、両国関係は良い方向へ進んでいくのである。

次に、日中間の交流は未だ不足しているということである。ホストファミリーの北島さんとの会話の中では中国のモバイル決済やシェアリングエコノミーの話題が挙がったが、彼の中国への印象は十年前で止まっていた。客観的な報道や深い交流がなければ、日本の人々は実際の中国の状況を知ることはできない。充分な交流があってこそ充分な理解ができるのである。そのため日本との民間交流を更に強化し、理解度を高める必要がある。

最後に、日中間の交流の先行きは明るいということである。中国経済の発展により、日本企業にとっての中国市場の位置付けはこれまで以上に重要なものとなっており、両国の経済交流は必然的に増えていく。今回の訪問を通じて日中両国の人々は、言葉は通じないが心は通じていると感じた。日中の民間交流にはすでに素晴らしい基盤がある他、両国は本来一衣帯水の隣国であり、共に発展し人類運命共同体を構築することが両国共通の目標であると思う。

大学名： 国際関係学院
氏　名： 査懿童

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり
4.日中間の交流

今回の「走近日企・感受日本」活動では全体を通して非常に印象深く、日本について従来までと違った新たな見方が生まれた。

まず最も印象深かったのは日本人のマナーであった。お店の店員はとても親切に挨拶をした上、丁寧な対応をしてくれ、たとえ何も買わなくとも終始笑顔であった。ホテルのスタッフはまた常に挨拶をしてくれ、道で会った見知らぬ人でも目が合えば互いに会釈をして譲り合う。日本は人を重んじる社会であり、至るところで思いやりが感じられる。地下鉄のプラットフォームには何の表示もなくとも、人々は意識的に降りる人を優先している。ビュッフェは常に行列ができ、三人で食事をした際に料理を一つだけ注文すると、店員は確認するまでもなく2つのお椀も一緒に持ってきてくれた。また企業見学の際は、後で困らないように最初にトイレの時間を設けてくれていた。こうした細やかな気配りはまだまだあり、日々の生活において人々から大事にされているという感覚が得られた。

その他日中間の交流について私は、今後両国は交流を更に強化すべきだと思っている。日本人の多くは未だ中国についての理解が少なく、または昔の印象に止まっている。中国でも多くの人が日本に対して凝り固まった見方をしており、実際の日本はどうなのかを知らない。両国の民間そして経済は今後交流を深め互いに相手の国の状況を知ること

で、国の垣根を越えた友情が結ばれ、さらに偏見などを減らすことができると思う。

もし日本からこうした活動の訪中団が来たら、私は是非ホストファミリーとなり中国について日本の学生に紹介をしたいと思っている。

大学名： 国際関係学院
氏　名： 辺嘉禾

テーマ： 4.日中間の交流

今回の旅では、全体を通して日中間の交流というものが示されていた。企業やその従業員、ホストファミリー、ひいてはコンビニの店員との交流において、私たちの一挙一動は中国の大学生を代表するものであった。

私は日中間の交流は今回のような民間の交流から始めていくべきだと思っている。各企業では日本人そして中国人従業員との交流を通じて、私のこれまでの日本企業へのイメージが変わり、将来への不安を多少消すことができた。日本の著名な大学の学生との交流はさらに得難いものであり、皆は年齢も近く、両国の最も代表的なグループ同士の交流と言えるものであった。私たちの間には確かに大きな違いが存在するが、いくつかの共通点もあり、こうした共通点をまとめることができれば、そうした違いという壁を越えるものになるかもしれない。私にとって非常に印象深かったのはホームステイであった。一見半強制的な交流ではあるが、私たちは皆それを楽しんでいた。特に私のような日本語を学ぶ学生にとっては、これ以上ない会話の練習の機会であった。ホストファミリーとは好きなバンドから将来のキャリア構築まで様々な話題についておしゃべりをし、その際一部の単語がうまく使えなくても互いの意思疎通や交流には何の影響もなかった。私たちは人間であり、気づく心を持っている。交流したいという思いがあれば、言葉や文化の違いは問題にはならないのである。またこうした思いは日中間の交流においては必要不可欠のものである。より細かな部分から言えば、エレベーターに乗る際やホテルのスタッフとの簡単な対話などの個人レベルでの中国人と日本人の交流もまた日中間の交流である。

日中間の交流は本来政治や経済面での交流だけで認識されてはならず、こうした日常的な個人レベルでの小さな交流もまた非常に重要である。可能であれば、今回のような交流活動を今後も継続してほしいと思っている。日中両国の交流は民間から始まるべきである。

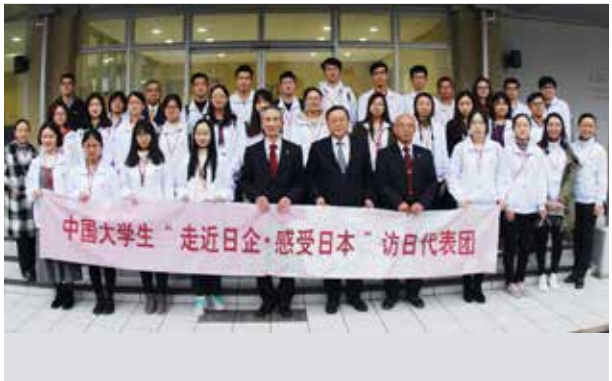
学生たちの撮った写真

日本航空：SKY MUSEUM内で、隋職員の説明を聴きながら、展示物に見入る程団長。

日本航空：格納庫内で、機体を背景に記念撮影。

パナソニック：藤本職員から、金属類選別過程の説明を受ける。

パナソニック：ロビーで、団旗を拡げて記念撮影。



大阪大学：接合科学研究所前で、小溝名誉教授（右）、程団長（中央）南研究所長（左）を中心に、記念撮影。

大阪大学：劉助教の接合プロセスの説明を熱心にメモを取る。

大阪大学:グループ討論の発表光景。

大阪大学:懇親会にて、東アジア拠点長
の小溝名誉教授のご挨拶。

新幹線:大阪大学との交流を終え、新大阪から名古屋まで新幹線で移動。

三菱電機:ショウルームで、E-Factoryの解説を受ける。

三菱電機:鳥居職員と学生との間で質疑応答が続く。

箱根温泉:新東名から薄暮の富士山を望む。

箱根温泉：宴会開始前、全員浴衣姿で、記念撮影。

NEC：森田取締役執行役員常務から歓迎のご挨拶。

NEC：イノベーションワールドの入口広間で、記念撮影。

丸紅：川野市場業務部長から歓迎のご挨拶。

丸紅：懇親会上にて、学生とホストファミリーの重山さん（中央）、伊佐執行役員（右）も参加して一枚。

みずほ銀行：金融専攻の学生から広瀬中国営業推進部長の講話に対し質問あり。

みずほ銀行：寺本常務執行役員の歓迎のご挨拶。

日比谷松本楼：小坂社長から、孫文と宋慶齢の婚儀では、梅屋夫人（徳子）が月下氷人だった秘話を聴く。

日比谷松本楼：日比谷公園の木漏れ日を受けて、記念撮影。

中国大使館：郭燕公使の講話を聴く。日中間の民間交流（特に青少年交流）の重要性に言及される。

中国大使館：団旗を拡げて記念撮影。

中央大学：加藤副学長より歓迎のご挨拶。

中央大学：山田教授（水工水理学）が研究室の中国人留学生を紹介。

中央大学：グループ討論の発表光景。

中央大学：程団長（左）から加藤副学長（中央）に礼品の手交、右は杉浦教授。

ホテルニューオータニ：エコツアーの後庭園で、滝を背景に記念撮影。

歓送会：団歌《没有什麼不同》を熱唱。

歓送会：最後に、ホストファミリーも入れて全員で記念撮影。

ホームステイ

北京大学：東京タワーの展望台から、夜景を望む。

北京大学：渋谷のスクランブル交差点で、歩行者の波にカメラを向ける。

北京師範大学：松尾芭蕉像の横に座り、俳句を一句試作。

北京理工大学：浅草　仲見世通りにて、笑顔で一枚。

北京理工大学：お腹がすきました。原宿で、山芋焼きを注文。

北京理工大学：浅草雷門の大提灯を入れながら、家族皆が入って撮影。

北京第二外国語学院：クリスマスツリー、お子さん達が椅子に座って一緒に。

北京第二外国語学院：東京大学の銀杏並木を背景に。

華北電力大学：クレーンゲームで、狙った景品を見事ゲット。

華北電力大学：夜の東京駅の前で。

国際関係学院：結婚式日和、新郎・新婦の後ろ姿が撮影できました。

国際関係学院：御神籤を引くと「凶」が出た、しばし手に取って、眺めてしまう。